
IS～女の子になった幼馴染

ハルナガレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 女の子になった幼馴染

【Nコード】

N7555V

【作者名】

ハルナガレ

【あらすじ】

まあタイトルでわかると思いますが、この作品は一夏に男の幼馴染がいてその幼馴染が女の子になってIS学園に入学する話です。TS物です。一応一夏とオリキャラとの絡みがメインストーリーになる予定です。恋愛まで発展するかは今の所考えてはいけません。駄文ですがよろしかったら見てってください。

遅れて現れた幼馴染

「あゝ、久しぶりだな我が家も」

IS学園は今日は休みなので、俺は久しぶりに家に帰る事にした。理由は単純にそろそろ季節が夏に近づいたため、夏服を取りに来たのと定期的に掃除しないと家が埃まみれになるからだ。ちなみに今家に帰る事は誰にも言っていない。何故なら

「誰かに教えたら絶対皆付いてきそうだなあ」

箒達に言えば絶対一緒に行くと思ってしまう。別に箒達の事が嫌いというわけではないが、家の掃除と替えの服を用意した後弾や和馬達に会いに行こうと思ってるため、皆には黙っとく事にした。理由は

「たまには男だけで騒ぎたいからな……」

IS学園に入学してから周りは女性しかない。ハーレムと思う奴も多いが、その状況がずっと続くとはやはり疲れてくる。箒達が悪いというわけでなく、一緒にいると楽しいのだが性差つてのはやはり大きい。男女の違いというだけでやはりどこか心の中で相手に対する遠慮みたいなものが生まれてくる。同性の遠慮のない会話つてのが出来ないのだ。

「さてと、弾達を待たせるのも悪いから早く終わらせるか」

居間、廊下、台所、千冬姉の部屋の順に掃除し、最後に俺の部屋を掃除する。まあ先月掃除した時から一回も家に帰って無いため、たいして汚れてないからすぐに終わっていく。掃除を済ませ押入れから服を引っ張り出し、持っていく服を選んだ。

「よし、こんなもんだろ。弾達と遊んだらまた家帰って荷物取りに行けばいいか」

荷物もまとめたし部屋を出ようとしたら、俺は机に置いてある写真立てが見えた。中学二年の春に撮った写真で、そこには俺と弾と鈴と……

「そういえば、あいつ元気にしてるかな…」

二年前の写真には、6歳の時から俺とずっと一緒に遊んでいた、男の幼馴染が写っていた。

「ちよつと一夏！今日は黙ってどこに行ってたのよ！」

久しぶりに弾達と男同士でバカ騒ぎしてIS学園に帰ってきたら、アリーナで自主練を終えた篤、鈴、セシリアの三人と出会った。

「そうですわよ一夏さん！黙って学園外に出るなんて！買い物とかでしたら私を誘ってくれてもいいですよに！」

「一夏、黙ってどこ行ってたんだ？」

俺が黙って外出した事に不満な三人。おそらくここにいないシャルルやラウラも同じだろうな

「いやちよつと家から服取りに行っただよ。それに久しぶりに弾達と会いたくなっただしな」

「弾と？なら私も誘いなさいよ。私も久しぶりにあのバカの顔見たいし」

「悪い鈴。ちよつと男同士だけで話したい事もあってな」

「なによそれ」とぶつぶつ言う鈴。

「弾ってどちらさまですの？」

「確か一夏と鈴の中学生の頃の友達だったか？」

「そう。IS学園入学してからあまり会ってないからな。今日は旧友を温めてたって訳」

そういうと三人とも納得したようで、俺を非難した眼差しは無くなっていた。

「弾達で思い出したけど、……一夏はあいつからは何か連絡あった？」

どこか遠い場所を見ながら鈴が俺に訊いてきた。その顔は寂しそうな顔をしていた。

「…いや前にも言ったが一度も無い。あいつは二年前置手紙残して消えたきりだ」

俺も寂しそうな顔してるだろうなと思いつつながら答えた。

「一夏、もしかしてあいつとは葵のことか？」

箒もどこか寂しそうな顔して俺に訊いてきた。

「ああ、あの野郎本当にどこ行つたのやら」

「あの皆さん…、一体誰の事について話されてますの？」

セシリアが頭に？マークを付けながら尋ねてきた。そういえばこの場で葵の事を知らないのはセシリアだけだった。

「ああ悪いセシリア。さっきから鈴や箒が言つてた奴は青崎葵って名で俺の親友。そうだな箒が女のファースト幼馴染なら葵は男のファースト幼馴染って所だ」

「親友ですか」

「ああ、一夏と葵は本当に仲がよかったぞ。そして私の所で一緒に剣道を習っていたから、私の幼馴染でもある」

「まあ私にとつてもそうね。一夏と同時に葵とは友達になつたし」

箒と鈴が懐かしいなあつて言つてるとセシリアが再度質問してきた。

「あの一夏さん、先ほどの会話の流れからして、その葵さんは急に一夏さんの前から姿を消したんですの？」

「そうよセシリア！あのバカ急に学校を休みだして、家に電話しても繋がらないし携帯も出ないし心配して家に行つてみたら、そこに私と弾と一夏宛の手紙があつてそれ以外はもぬけの殻だったのよ！」

あれにはビックリした。葵の家に付いていた青崎つて書かれた表札が無くなつててドアに鍵がかかつて無く開けてみたら、玄関入口に俺達宛の手紙が置いてあり、それ以外は家具も一切合財全部無くなつていたからだ。ちなみに弾宛の手紙には「短い間だったが楽しかったぜ」、鈴の手紙は「酢豚の腕前磨けよ」、俺の手紙には「またいつか会おうぜ！」だけだった。つーかこれわざわざ三人分用意する必要あつたのか？つて思えるほど中身が無い手紙だった。

「あの一夏はそれはもう落ち込んでたわね。一週間は机に突っ伏してたっけ」

「しかたないだろ、人生の半分は一緒に過ごした奴が何も言わずに
いなくなっただぞ。親友と思ってたのに俺に何も言わず…」

やべえまた落ち込んでくる。あの時は本当に絶望したな。鈴や弾
がいなかったら人間不信になってたかもしれない。

「そんな事があっただんですね…。大丈夫ですよ一夏さん、鈴さん、
箒さん。その方とはまたいつか会えますわよ。だって一夏さんの手
紙にいつか会いましょうと書いてあったんですから」

そういつて笑顔で励ましてくるセシリア。彼女の気遣いが少し嬉
しかった。

「そうね、あいつはとはまた会って一回ぶん殴らないと気が済まな
いし」

「私も葵から剣道の腕では負け越したたからな。今度こそ勝ちた
い」

そついや葵と箒は結構ライバルな関係でもあつたな。俺にとつて
もそうだったけど。

「そつだな、死んだわけじゃないしいつかまた会えるよな」

と言いながら俺達は寮に戻って行った。途中鈴と箒が「私がいな
くなった時はどんな反応だった？」と聞いてきて、どう返すべきか
かなり悩んだりもした。

翌日、教室でシャルルとラウラに「昨日はどこへ？」と聞かれ、
箒達と同じ説明をした。

「まあ確かに一夏もここにずっといると気が滅入るよね」

「ふん！私という夫がいるのに何か不満なのか？」

二日前クラスメイト達の目の前でいきなり俺にキスをして以来、
ラウラは俺を嫁扱いする。正直言って辞めて欲しい。

「ところで一夏よ、一つ聞きたい事がある」

と言ってラウラは誰も座って無い机を指差し、

「あの机に誰か座ってるのを私は見た事が無い。教官が教鞭を振る
ってるのに出席せんとはなんという奴だ？」

「あゝそういえば僕も気にはなつてたんだ。ここに転校してきてからあの机に誰も座つてないから」

二人に聞かれるも俺はこう答えるしかない。

「知らん」

「「は？」」

「だから知らないんだよ。このクラスに初めて入った時からあそこは空席だったんだよ。山田先生も名前すら教えてくれないし」

「名前も教えてくれない。同じクラスメイトなのに？」

「なにかわけありの人物なのか？」

「多分な。千冬姉も教えてくれなかったし」

そうこう言つてゐるうちにチャイムが鳴り、HRの時間となった。

山田先生と千冬姉が教室に入ってくるが、何故か山田先生はいつも以上に笑顔をしており、そんな山田先生につられたのか千冬姉までちよつと笑顔をしている！なんだなんだ？周りの皆も千冬姉の様に動揺している。

「さてと朝のHRを始めますが、その前に一つ報告があります」

笑顔を浮かべながら山田先生は言った。

「皆さんと新しく一緒に学ぶお友達を紹介します」

この時クラス一同の心は一致したと思う。「え、また？」と。

「いえ正確にはこのクラスに在籍してたのですが、事情があつて今まで登校出来なかった生徒が今日から通うんです」

なるほどな。シャルル、ラウラに続きまた転校生が入るつてのは少し変だしな。俺は今朝話していた空席を眺めた。

「それでは紹介します。入ってきてくださーい」

山田先生の合図の後、扉が開き一人の少女が教室に入ってきた。身長は高く、俺と5センチ位しか変わらないかもしれない。髪は背中を半分隠す位長い。そしてスタイルは抜群。痩せてるように見えて箒とタメ張りそうなほど大きな胸をしている。そして顔もかなり綺麗な分類に入るだろう。少ツツリ目だがその瞳は優しい気な眼差しをたたえている。

うんかなりの美少女だな。昔会っていたらそう簡単には忘れないだろう。でも俺は彼女に会った覚えがない。

なのに、何故……俺は彼女にとってもなく懐かしい印象を覚えるんだろう？

彼女は教室を見回し、そして俺を見つめると極上の笑顔で言った。

「皆さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情があって入学後出席しませんでしたけどどうかよろしくお願いいたします」

遅れて現れた幼馴染（後書き）

駄文ですが、今後も頑張って書けたらいいなと思います

告白（前書き）

オリキャラの青崎葵ですが、ぶっちゃけ見た目は型月のアオアオです（笑）

告白

「皆さんはじめまして。私の名前は青崎葵と言います。事情があつて入学後出席しませんでしたけどどうかよろしくお願いいたします」

ナニヲイツテルンダコノコハ？

その後も「特技は空手と剣道です。格闘戦なら誰にも負けない自信があります」と自己紹介を続けているが、俺の頭は混乱していた。なんて名のつたこの子は？青崎葵？いやあいつは正真正銘男だったはずだ。しかしこの子の名も青崎葵。

あ、なるほど！つまりこの子は

ただ単に同姓同名の別人の人だ！

いやそうだな、それなら納得だ。葵も空手と箒家で剣道習つてたけどただの偶然だな。葵は武術習ってるのに筋肉全然付かず、女みたいに細かったし、顔も凄く女顔で男子制服着なければほぼ100%女に間違われてたりしたけど別人だな！だって俺の記憶の葵と目の前にいる彼女、よくよく見たら凄く似てるが、記憶にある葵はまだもう少し男の顔してたよな……？あれ？

「以上です。あ、後一つ言う事があります」

そう言つて彼女は俺と箒の顔を見て、

「久しぶり元気だったか一夏！また会えて嬉しいぜ！箒も久しぶり！6年振りだな！」

と眩しい笑顔をして俺と箒に言った

……………数秒の沈黙の後、

「「葵~~~~???」」

俺と箒の叫び声が教室に響いた。

「え、織斑君と篠ノ乃さんの知り合い?」「そうでしょ、二人を名指しで挨拶してたし」「でもしたら何で織斑君と篠ノ乃さん、お化けでも見たような顔で青崎さんを凝視してるの?」「それと青崎さん、何でいきなり男の子みたいな話し方に?」

葵の発言によってクラスメイト達が騒々しくなった。箒を見たら葵を凝視しながら口をパクパクしてる。まさに鳩が豆鉄砲をくったように感じた。いや俺も似たようなもんだろうけど。セシリアは昨日葵の事話してたから「え、葵さんは男性だったはずでは?」と俺と箒と葵を交互に見ている。シャルルとラウラは……何故葵に対し敵意のこもった目で見てるんだ?

「静かにせんか馬鹿共!」

千冬姉の一喝で一瞬にして静かになった。流石千冬姉。

「全くまだHRは終わっておらんのに。ああ、青崎」

「はい何ですか織斑先」

パアン! という音と共に葵は千冬姉から出席簿で頭を叩かれていた。

「な、何故叩くんですか千冬さ」

しまった! って顔して口を押さえた葵に、再度パアン! という音が響いた。

「学校では織斑先生と呼べ。後先程の質問の答えだが、お前の口調が男になった場合容赦無く叩いて矯正してくれと上からの命令があったのでな。最低限公共の場では口調に気を付ける」

「了解しました織斑先生」

頭を抑え若干涙目で答える葵。痛いもんなあれ。

「さて、これでこのクラスの者が全て揃ったわけだが、お前達に言わなければならない事がある」

千冬姉はちらつと葵を見て、

「言わなければならぬ事とは、今日初めて登校した青崎の事だ。事情があつて登校が遅れたわけだが私が今から言う事はそれに関する事ではない。青崎自身についての事だ」

そういつて千冬姉は「青崎、お前から言うか？」と聞き、「はい」と言つて葵はまたクラスメイト達の前に立ち、

「えゝとですね、実は私は今は正真正銘女の子ですが、中学二年の春までは男の子でした」

と特大の爆弾を放った。

再度クラスは騒がしくなったが、同じく千冬姉の一喝で静かになる。

「話の続きですが、誤解しないでほしいのですが私が女の子になりたいから性転換手術をしたというわけではありません。私の体が元々は遺伝子的に女性だったんです。半陰陽といつて、詳しく話すと長いので省きますが、ようは元々女性だったけど見た目が男性だったというわけです。私が14歳になる前にそれが発覚し、将来の事を考えて男性として生きるよりも女性として生きる事を選びました」自身の事情を真摯な表情で話す葵。その顔に嘘など欠片も見えなかった。

「かなり葛藤や迷いもありましたが、こうしてISの操縦も出来るようになったので結果的には良かったと思います。それに思いもしなかった再会もありましたし」

そういつて俺と筈を眺める葵。

「なぜこのような事を言つたかですが、体は女性ですが手術前は男性として生きてきました。元男性ということで、私の事を女性として受け入れづらい人等もいるからです。そういう人がいるなら初めから言つて来てください。私もなるべく配慮しますので」

悲しそうな顔をして葵はクラスを見渡した。その顔を見て今までそういつた拒絶を受けた事があると容易にしれた。

「しかし」

ん？急に葵の顔が一転、悲しい顔から挑発的な顔をし、

「ISの操縦では誰にも負けるつもりはありません！そこだけは遠慮しません！」

と宣言した。

ああ、うん。そうだな。俺の記憶にある葵はそんな遠慮深い奴じゃあないもんなあ。気配りがよく出来る奴だった欲望には忠実だったし。

「以上です。では改めて皆さんこれからよろしくお願いいたします」と一礼した。その瞬間

「ああ、お前に色々あったようだが、そんなのは関係無い！本当は女だった？関係ねえ！その程度で俺がお前に対して認識変わんねえよ！またよろしくな親友！」

「うむ、お前の事情は理解した。しかしお前がどう思ってるかは知らんが、私にとってお前がどんなに姿が変わろうと私が知っている葵のままだ。一緒にまた精進しよう」

俺と筈の声がクラスに響いた。驚いた顔して俺と筈を見る葵。しかしすぐに少し半泣きになりながらも嬉しそうな顔をして

「ありがとう、二人とも」

と言った。

…やべえ、今は完全に女になってるからかなり可愛い。

「私も全然問題にしないよ」。このクラスに入っただけにはアオアオも一組の仲間だよ」

のほほんさんが笑顔で葵を受け入れてくれた。それをきっかけに「大丈夫よ青崎さん、私達はそんなことで貴方を偏見な目で見ないわ」「それに隠してるならともかく、堂々と私達に教えてくれたもの。並みの勇気じゃ出来ないわ。なら私達も

それに答えるまでよ」「IS勝負、私も負けないわよ！覚悟しててね」

クラスの全員が葵に笑顔で答えていった。セシリアもシュルルも、

……ラウラはよくわからないが拒絶してる様子は無い。どうやら葵は皆に受け入れられたようだ。

その後休み時間の度に葵は質問責めになり、葵の事を聞いた鈴が一組を襲撃。今の葵を見て（特に胸）驚愕し、そして以前宣言した通り一発ぶん殴った。葵も抵抗すること無く受け入れ「ごめん」と言う。「別にもういいわよ！こうしてまた会えたし！」とプイッと顔をそらした。

「休み時間じゃ時間が足りないわ！昼休みにたつぷりと色々話して貰うからね！」

と言って鈴はまた二組に戻って行った。俺も箒も込み入った話は昼休みにしようと葵に話してたためちようど良かった。

そして昼休みになると俺は葵の腕を掴み、

「さてと、じゃあ色々聞きたい事が山ほどあるんで話して貰おうか」

有無を言わずに屋上へ連行した。

おまけ

葵を受け入れるクラスメイト達。皆笑顔をしており、まさに青春！って光景である。

「うむ騒々しいがなかなか美しい光景だな。山田先生、教師としてこのような光景を見て嬉しく思わないか？」

「……あの織斑先生」

「どうした山田先生？」

「……私青崎さんの体の事、一言も聞いてないんですけど……」

「…教えて無かったか？」

「言ってませんでしたよ！一言も！私今日は純粹にこれですよやく全員クラスメイトが揃うんだ」としか思っただけです。ある意味生徒さん達よりもシヨック受けましたよ！」

「さてとそろそろ授業に進まんといかんな」

「逃げないでください！」

告白（後書き）

テンポ悪い…

初めて小説書いてみてるけど本当に難しい…

本当に知りたい事（前書き）

毎日更新したいのに、なかなか時間とれないのが悔しい。

本当に知りたい事

「さてと、ようやく昼休みだ。色々吐いてもらっぜ」

朝のHRで幼馴染との衝撃的な再会後、俺は聞きたい事がたくさんあったので昼休みが待ち遠しかった。あまりのうわの空状態で授業受けてたせいで、千冬姉に合計7回は頭を叩かれた。第4回叩かれていた。

葵と話す場所は人気が少ない屋上でする事にした。久しぶりに再会したら女の子になってるし、なんか複雑な事情がありそうだから教室じゃ話づらい事も多いだろうしな。

昼休みが始まり、俺は葵の腕を掴み、屋上まで引っ張って行っ

「おい、一夏。別に逃げないから引っ張るのは止める！」

悪いが無視だ。今はまだ優しくする気にはなれない。俺達の後ろには第3が付いてきている。葵について聞きたがつてるセシリア達には少しお願いを頼み込んだため一緒に付いてきてはいない。

「遅いわよ三人共！待ちくたびれたじゃない！」

屋上に着くとすでに鈴が待っていた。

「悪い鈴。葵を連行してたら遅れてしまった」

「だから逃げないっていつてるだろーが！」

「いいから話を始めるぞ。うかうかしてたらすぐに昼休みが終わってしまう」

とりあえず屋上に設置されてる円テーブルの椅子にそれぞれ腰掛

ける事にした。

全員が座ると、葵は俺と篤、鈴を順に見て回り言った。

「まあ一夏と鈴にとっては二年振り、篤にとっては6年振りの再会になったわけだけど何から聞きたい？一番聞かれると思ってたこの体については一夏と篤には朝のHRで、鈴には休み時間に話したけど？」

確かに見た目どころか性別まで変わった経緯についてはもう知った。だがな、

「葵、俺が本当に知りたいのはそんな事ではない。いや例えHRでその件を話さなくても、俺が葵に真っ先に聞きたかったのはそんな事ではない」

「いやお前、幼馴染が性転換して現れてるのにそれがメインでなく何を真っ先に聞きたいってんだよ？」

「とぼけるなよ。逆にお前が俺の立場になったら、お前はまず真っ先になんて俺に質問する？」

俺の言葉に葵は観念したような顔をして、

「どうして一言も無く、黙って俺の前から消えた？」

と、俺がもつとも問いただしたかった台詞を言った。

「ちなみに私もそれが知りたかったわ。あんな置手紙だけで納得し
てるとでも思ってたわけ？」

そういつて鈴は葵を睨んだ。その目は納得のいく説明をしろと言っている。

「私もそれは気になっていた。お前が一夏に何も言わず、しかも置手紙も一言しか書いてないのはおかしいと思っていた」

「葵、嘘偽りなく正直に話してくれ。この二年間これが俺が一番気になってたんだ」

俺達の質問を受け、葵は絞り出すように一言答えた。

「怖かったから」と

「怖かった？何が怖かったんだよ？」

「俺が男でなく本当は女だったから、それを話すことでお前達との関係が壊れるのが怖かったんだよ、あの当時はな」

葵は自嘲めいた顔してそう答えた。

「あの頃は俺も情緒不安定でな。考え方が凄くネガティブだったんだよ」

「何せ中二の春辺りから急に体調が悪くなり、手足も妙に痛むようになった。最初は成長痛と思ったけどそれにしておかしかったし。そしてついに急に家で俺は意識を失って倒れたんだよ。親父が慌てて病院の担ぎこみ、診断され結果俺は男ではなく女だと判明した」

「晴天の霹靂とはまさにこの事だった。だってお前は本当は女の子なんだよと言われても、俺は今まで男として生きて来たんだぜ。どうしろってんだよ。男として生きる事も考えたけど、生殖器は女だから男を選ぶと子供は作れない。なにより男を選んでも貴方の体では男らしい体格をするのはかなり難しいと言われたよ。」

……まあそれはわかる。中学入ってから葵、空手部に入って毎日相当練習してたのに、まるで女の子みたいな体格だったし。

「医者も俺を女として生きる事を強く勧めてきてたよ。絶対美人になるからって」

……たしかに。俺も医者だったら絶対そっちを勧める。

「それにやっぱり遺伝子的にも女性だからそっちの方が後々体の不具合も起きないからって。長生きしたいならやはり本当の性別が一番良いつて。医者の説明を聞いて、親父も俺が女として生きる事を勧めてきたよ。そして俺は考えに考え抜いて　　女の人生を選んだ」

「わかるか、あの時俺は男として生きて来た事を全否定されたんだよ。親からもな。今までのお前は間違った存在なんだって俺は思うようになった」

そして葵は俺達を見て言った。

「だから怖かったんだ。一夏達から俺が否定されるのが。俺が女になることで今までの関係が全て壊れるんじゃないかって。一夏達から俺を否定する事を言うんじゃないかって」

「そして俺は一夏達から逃げる事を選んだ。一夏達の反応が怖かったから。親父に頼んで夜逃げ同然で引越してくれと頼みこんだ。親父はそれを了承してくれた。でもやっぱり会えなくなるのは嫌で、凄く会いたいけど会いたくなくて。そんな考えをしてるうちに出発の時間が来て、時間が無くパニックになった俺は、とっさに思いついた本心の別れの言葉を書いた」

あの時俺に書いた手紙は「またいつか会おうぜ!」。つまり

「つまりうだうだ考えてても、結局会いたかってことだったんじゃない

ねーか」

「……まあな。ただあの時の俺は」

ふざけるな！

「バカかお前。HRでも言った通りお前がどんな姿に変わろうと、お前は俺の大切な幼馴染だ！なんで俺に相談してくれなかったんだよ！」

「だから一夏、あの当時の俺は」

「五月蠅い！事情はわかった！理由も聞いた！納得する事も多々ある！でも、俺を信用して欲しかった、悩みがあるなら打ち明けて欲しかった、お前のために力になりたかった…、こればかりは理屈では語れないんだよ！」

「ちょっと落ち着きなさい一夏！あんたの気持はよくわかるけど、葵も…」

「葵も悩み苦しんだんだ。つらかったのはお前だけでは無い」

鈴と箒に悟られ、頭に上っていた血が引いていく。そうだな、まだ葵には聞きたい事がある。

「葵、さつきから昔の俺は」と言ってるが、なら今のお前は」

「ああ、あんな事して後悔してる。何故一夏達を信用しなかったのか、頼らなかったのかって。実はそれに思い至ったのは夜逃げにして二日後、手術直前に思った」

「はやつ！」

なんだそれ。お前のそれまでの葛藤はなんだったんだよ！

「まああれだ、もう完全に女になるんだと思ったたら今までの行動を振り返り、自分の行動がいかに間抜けかと思い知った。はははは」
はははじゃねえ。箒も鈴も呆れてるぞ。

「……たく、じゃあなんであんなその後私達に連絡よこさなかったのよ！迷いなくなっただんなら電話一つ位よこしなさいよ！」
そこで葵はあゝ、それねと言って、

「いやそれが出来なかったんだよ、正確にはさせてくれなかった」

「させてくれなかった、だと？どういうことだ？私みたいに政府の監視下に置かれたわけではあるまいに」

「いやそれが……箒と同じような立場に俺もいたんだよ」

「「「はあ？」「」「」

本当に知りたい事（後書き）

思いつくまま書いてたらえらいダラダラしてしまう

会話ばかりでいかなこれ…

よろしく

「あゝいやどっちかというと箒よりも一夏の方が近いかも」

「俺と？」

「つまり……具体的にどういうことなのだ？」

葵、お前一体何したんだよ？箒も鈴もわけわかんないって顔してるぞ。

「わかった、ちゃんと説明しようか。そう、あれは桜も散り春も終焉を迎え葉桜が綺麗な」

「そういう前置きはいいからさっさと話さない！」

額に青筋立てながら鈴が葵に怒鳴った。俺も箒も同感とばかりに頷く。いいから早く言え。

「わ、わかった！だから落ち着け！……まあぶっちゃけるとだな、結論から先に言うが俺が日本代表候補生になったから、お前達に連絡する事も出来なかったし、入学も遅れた」

「……日本代表候補生！？」「……」

「そう、ゆくゆくは日本代表になって、千冬姉が出場したモンド・グロツソで優勝が今の夢で目標」

「

そついう葵の表情に嘘は全く見られない。どうやら本当に代表候補生になっており、そして本気で日本代表の座を本気で狙っている

ようだ。

「ちょっと！あんたが日本代表候補生？嘘でしょ？」

「いや本当だぜ」

そういつてニヤつと笑う葵。

「つーか俺からすればわずか一年とちょっとで中国の代表候補生となったお前の方が信じられないけどな」

「んっ、まあね！私って天才だし」

葵の言葉を聞き、自慢げにふんぞり返る鈴。

「そんなことよりも、どういった経緯でお前は代表候補生になったのだ？」

おい箒、そんなことよばわりされて鈴が少しむっとしてるぞ。しかし確かに気になる。お前一体何があつてそんなことになってるんだよ。

「ああ、それはな……」

そして葵は、どこか遠い目をしながら話出した。

「二年前、俺は手術終了後真っ先に一夏に事情を説明しようとしたが、やっぱりやめた。さすがにあそこまでやってしまったんだし、どうせなら完全に女の子になった状態で会ってびっくりさせようと思ったからだ」

「？手術終わったんだろ？女になったんじゃないのか？」

俺の言葉に葵は馬鹿を見る目で見た。……なんだよ変な事いった

か？。

「バカ。手術したからって体つきとかすぐに変わんないだろ。大体胸とかペツたんこだし。そんな状態で会っても女になったなんて言ってもお前ピンとこないだろーが」

なるほど、確かにそうだ。

「その後半年間女になってしまったから心のケアとかでカウンセリングを受けたり、色々な薬を飲んだり注射したりしたら、それがまあ色々成長することすること。その頃から髪も伸ばすようにしてだし、医者もびつくりなほど女っぽくなった。胸もそうだな、そのころですでに……」

葵の目は鈴の……、おい止める！そのネタは止めとけ！

「すでに……何？」

バックに炎が見えそうなほどの怒気を放つ鈴。マジ怖いんですが。

「……いや何でも無い。ま、そんなわけで見た目が充分整ったからいざ一夏達に会いに行こうとしたら、政府から役人が来てISの起動テストをして欲しいという要請が来た。どうも俺みたいなパターンの人間でも、女性ならISに乗れるかどうか調べるんだと。俺も女になったんだしISの操縦ができるかともと思い、快く了承。近くのIS開発施設に赴き、そこにあったIS打鉄に触ってみたから見事起動。俺みたいな女でもISは起動すること証明された。そして俺はどうせだしとISを動かしていいかと頼みこんだ、なんせISに乗る機会なんてこれが最後かもしれないと思ったからな。そして役人さん達は快くOKしてくれたんで、俺はISを思う存分動かしてみた」

「いやあまさに世界が変わるとはこのことかと思ったよ。今までと

はまるで違う感覚に俺は夢中になった。ISから流れてくる情報を基に俺はさらに自分が限界と思える操縦をこなしていった。そして一通り満足して地面に降り、ISを解除したらかなり興奮した役人さん達が俺に詰めより、『こっちに来てくれ!』と叫び俺を連行。検査室に入れ俺のフィジカル・データを取った。そして俺のIS適性だけど、なんとA!」

「まあ代表候補生ならその位あるわよ」

たいして驚いてない鈴。「ん~~~~!」となにか悔しそうな筈。まあわかるぞその気持ちは。

「どうも俺の操縦が初めてとは到底思えないほど良かったらしく、しかも適性Aってことで皆騒ぎ俺をべた褒め。いやあそれほどでもとか言ってたなら、そこに一人の少女が現れた。その子は俺を見て、『ふん、元男がIS乗り。冗談じゃないわね』と言って思いつき侮蔑を込めた目で俺を見た。その子の言葉にカチンと来た俺は、何?その元男よりもIS操縦下手そうだけど君と言いつ返した。そっからはお互い罵り合い、そしてその時その子が言った言葉にキレた俺は勢いでISで勝負だ!と言った。そして俺は周りが反対するのを振り切り、広場で俺は打鉄に、彼女は専用機を展開した。え、専用機?と思ったら施設の方が教えてくれ、その時彼女は日本代表候補生だと知った。自信満々に勝負に乗ったのはそのためだった」

「しかし後には引けないし、不思議と負ける気はしなかった。ISから流れてくる情報を参考にし、イメージ通りに操縦して戦ったら開始10秒足らずで俺が勝った」

「はあ?いやちょっとまで!おかしすぎるだろそれ!」

「あんだ話の流れからして勝ったんだなあとか思ってたけど、いく

「なんでも誇張しすぎよ！」

「10秒でシールドエネルギー全て無くすなど、打鉄に白式の雪片式型でもあったとしてもいいのか貴様！」

三者三様で葵に「嘘つけ！」と言う俺達。いくらなんでもおかしいだろ。代表候補生相手に！」

「いや本当。嘘偽り無し。ただ一つ誤解している。おそらくお前達は10秒で俺が相手のシールドエネルギーを0にしたと思ってるだろ」

「違うのか？」

「ああ、違う。俺は相手を気絶させたんだよ。俺の攻撃を受け、彼女の機体は勢いよく壁に激突。轟音を立てて壁を粉碎した彼女はその衝撃で気絶した」

「ISに乗った相手を一撃で気絶……葵、お前は一体何をしたんだ？」

「いや単純に『瞬時加速』を何故か理解できてたからそれを使って一瞬にして相手との距離を詰めた。俺を舐めきってた彼女は対応が遅れ、ガラ空きの腹に正拳突きを当てたらそうなった」

マジかよ。いくら葵が空手をやってたとはいえ……

「まあそれは今後授業や放課後の模擬戦で実践してやるよ。言うよりもやった方が早い」

「わかった。疑問は後にしよう。で、話の続きを頼む」

「ああ。まゝ俺が代表候補生を一撃で倒したもんだからもう大変な事になった。しかも倒し方が武器を使わず拳のみ。役人さんが政府の上層部に連絡して協議の結果、俺は代表候補生となった」

そして葵ははぐつと溜息をついた。

「しかし俺が代表候補生になった理由は少し複雑でな。ISは男しか操縦できないだろ。で、俺は体は本当は女だったとはいえ、手術前は男として生きてた。日本政府の一部がその辺を押し出して『今は女だけど元男！男で初のIS乗り！』というかなり強引だがそんな宣伝で俺を売り込もうとしたんだよ。しかしそれはいくらなんでもと反対する人達もいたんで、とりあえずIS学園入学までは保留となった。政府としては他国に秘密にして日本にはこういう人材もいるとアピールする目的もあったため、俺の存在は秘密扱いとなった。そのため俺は知り合いに干渉することが出来なくなった。俺が一夏達に連絡できなかったのはこれが原因なんだよ。まあだけど」
そう言つて葵は俺を見て

「一夏の登場のおかげでその計画は白紙になったけどな。本当の男がIS操縦できるんならそっちに飛びつくわな」

と言つて笑つた。ああ、やっぱりそんな風に宣伝されるのは嫌だったんだな。

「ま、それでも実力的には代表候補生のレベルなんで肩書はそのまま。政府の監視も無くなったんだけど一夏も第もIS学園に入学するのを知ったからその時言おうと決意。入学を楽しみにするもIS学園に入学直前にトラブルがあつて登校が遅れ、今日が初登校になった」

「トラブル？入学前に何があつたのだ？」

「いやそれはまた今度してくれ。今はまだ……言いたくない」
葵はどこか暗い顔して答えた。…その顔を見て俺も鈴も篁も追及するのは止めた。

「まあ以上が俺に起きた、一夏達が知らない二年間の出来事だ。満足したか？」

「いや話を聞いたが……、葵、お前どれだけ波乱万丈な人生送ってるんだよ」

「世界初の男のIS乗りのお前に言われたくはないぞ」
いや俺よりも絶対お前の方が凄い。

「それよりも、いい加減俺のことばかりでなく、お前達の事も話してくれよ。空白の時間を互いに埋めようぜ」
葵、そう言ってもだなお前が期待するほどの事はほぼ無いぞ。

「いや葵、俺はお前が消えた後はこれと言って話す事あんまり無いぞ。二年時は弾達と遊んでばかりだし三年の時は受験勉強で消えたし」

「私もあんたが知つての通り三年の時中国に帰ってそこで代表候補生になってISの特訓に明け暮れたわね」

「私は政府の監視下の元各地を転々とする日々だけだった」

「……予想以上につまらない返しだな。じゃあIS学園に入学してからはどうなんだよ。結構噂は聞いてたんだぜ。一夏のクラス代表決めとかタッグマッチトーナメントとか。なかなか面白そうだから話してくれよ」

俺はそれを聞いて時計を確認。かなり話しこんだが昼休みは後10分ある。これなら間に合うな。俺はセシリアの携帯にワン切りで合図を送った。

「ああ葵、いいぜ。でもそれならまずは」

その時屋上の扉が開き、セシリア、ラウラ、シャルルが入ってきた。シャルルの手にはバスケット。中には昼飯も食べずに話してた俺達用のサンドイッチがある。俺はセシリア、シャルル、ラウラの横に立ち、

「この学園で出会った、俺達の友達を紹介させてくれ」と言っ、セシリア達に自己紹介をお願いした。

「わたくしはセシリア・オルコットと言います。出身はイギリス。今後ともよろしくお願いしますわ」

「僕はシャルロット・デュノア。出身はフランス。僕とも一夏達みたいになんて友達になつて欲しいな」

「私の名はラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツ出身。嫁の一夏の幼馴染なら、私も仲良くせんとな」

「ああ、改めてよろしく。俺も皆とは友達になりたいよ。……ところで一夏」

葵はなんかニヤニヤしながら俺を見る。なんだよ気色悪い。

「嫁とはまた……、意外だがなかなか面白い彼女なんだな」と言っ、ラウラを見る葵。いやちよつと待て。

「違」

「違いますわ、ラウラさんは一夏さんの彼女ではありませんことよ！」

「そうだ葵、勘違いするな」

「こいつが勝手に一夏の事そう呼んでるだけよ！」

俺の言葉を遮って葵に否定するセシリア、鈴、篝。いや何をそんなにムキになってるんだ。

「何を言う、この国では気に入った者を」

「ラウラ、話がややこしくなるから」

そういつてラウラの口を塞ぐシャルル。あれ、なんか目が笑って無いように見えるのは気のせいかな？

「……あゝわかった、これだけでこれがどういう人間関係なのかも大体理解した」

なんかしみじみ納得つという感じで頷く葵。その手にはサンドイッチがつ……て！

「葵！何勝手に食ってるんだよ！」

「何言ってるんだ一夏。鈴も篝ももう食べてるぞ」

え？、と思い鈴と篝を見ている。二人とも片手にサンドイッチ、もう片手に牛乳を持っている。何時の間に！そしてバスケットを見てみたら……見事に空っぽだった。

「さてと栄養補給も済んだし、午後の授業を受けるか！セシリア達

は放課後また改めてお茶でもしながら話そうか」

「賛成ですわ。私も葵さんの事を色々知りたいですし」

「一夏達との昔の面白いエピソードとかあったら話してくれたら嬉しいかな」

「うむ、それは楽しみだな」

わいわい言いながら教室に戻っていく葵達。俺は空腹のまま空のバスケットを持ちながら後を付いていく。……まあ葵、皆と仲良くなれてるからいいか。

その後授業も終わり、放課後葵は千冬姉から自分の部屋鍵を受け取った。なんとなく予感がして葵の鍵の番号を見てみたら……俺の部屋の番号だった。

「葵は登校しない可能性もあったから、いない者と考えて部屋割を行った。しかもその後鳳やデュノア、ボーデヴィツヒと予定外の転校もあったため、使用可能状態の部屋が無い。用意が出来るまで織斑、お前の部屋に同室して貰う。まあ今まで篠ノ乃やデュノアと一緒に生活していたんだ。間違いは起こさないだろう」

そう言いながら何故睨むんだ千冬姉。信用してないのかよ！

「葵…それにお前もいきなり女と同室するよりは織斑で慣れた方がいいだろう」

「織斑先生……、ありがとうございます」

「そういうわけだ、お前ら仲良く生活しろよ。まあ言われるまでも無いと思うが」

そういつて千冬姉は苦笑を浮かべながら教室を去った。

その後篤達にこの事を伝えたら「うーん、でも葵なら……」「今は女の子だし……、でも男だったし……でも一夏と同室は……」「嫁と同室だと！羨ましい奴だ」と全員唸りだったが、葵が皆を引き連れて物陰で囁いたら全員一応納得してくれた。何を話したんだ？しかし葵に訊いても

「お前は気にしないでいいんだよ。ちょっとした協定」

とわけわからない返事しかなかった。なんだよ協定って。それからは全員でお茶を交えながら葵の事やIS学園に入学してからの事を話し合って、楽しい時間を過ごした。……葵がいくつか俺の過去の暴露話をした事以外では。

皆と別れた後、葵は送られた荷物を引き取りに行き、それを持って俺の部屋に入り、荷物を整理し終わると、

「じゃあ一夏、これからもまたよろしくな」と、笑顔で俺に言った。それに俺も

「ああ、お互いにな」と、笑顔で返した。

よろしく(後書き)

うーん、切り所がいまいちまだわからない

ちなみに葵は専用機持ってません

日常

葵が登校して、数週間が過ぎた。

葵が一緒に生活に俺は慣れ、それどころか前よりも充実した生活を送っている。葵が来る前まで、俺には本当の意味で心を許せる相手が居なかったのが大きい。一緒に馬鹿な雑談するだけでも凄く楽しい。いや箒達とも仲良くしてるんだが、なんというか葵と比べると空気が堅いつていうのか、たまになんかプレッシャーみたいなものを感じるんだよな。その点、葵と一緒に居てもそんなものは感じないし、逆に落ち着く。さすが10年近くも付き合っただけの物がある。見た目は完璧に女の子になっても、纏っている雰囲気は昔のまま。人は外見じゃない中身だな、いや本当に。

午前6時半。毎朝この時間に起きるが、例外なくその時間に葵の姿は無い。ベットは空っぽ。葵は毎朝5時半には起きて空手の練習をしているからだ。これは葵のIS操縦技術に大きく影響しているので、毎日欠かさず行い己を高めている。

何度が付き合ってみたが………凄まじい練習量に俺は何度も倒れそうになり翌日激しい筋肉痛に悩ませる事になった。その後葵から白式の戦い方を考えると俺より箒と特訓した方が良いと言われ、休日は箒が嬉々として早朝から俺をシバキ倒すようになった……。

そして俺が起きて顔を洗ってる時位に葵は部屋に帰ってくる。その時俺は洗面所を出て、入れ替わりに葵が入りドアを閉める。練習後の汗を流すためシャワーを浴びるためだ。シャワーの音が聞こえたら俺は再度中に入りさつさと用を済ませる。俺が出るとすぐに葵もシャワーを終え、着替えて出てくる。一度葵のシャワーシーンを遭遇してしまった事があるが、葵は笑って「何、一緒に浴びるか」

とからかってきたが、俺はその言葉を聞いても目は葵の体を凝視。いい加減恥ずかしくなってきた葵が俺にシャワー浴びせてきて俺は意識を取り戻し急いでシャワー室から出た。その後葵から散々「エロ河童」とからかわれたため、二度とそういう事が無いよう注意している。

いや、今でも脳裏に離れない。いや離したくない光景を脳裏に刻んだのは秘密だ。

そして二人で今日の予定や持っていく物の確認をした後、俺達と一緒に朝食に行くのが朝のサイクルとなっている。

食堂に着く時間はほぼ毎日同じなので、時間を合わせてるのが箒達と一緒にいる事が多い。朝は多く食べる派の俺と同様、葵も朝はかなり食べる。ご飯みそ汁は毎回御代りしてる位だ。皆の朝食の軽く2倍は食べる俺達に、箒達は毎回苦笑いを浮かべている。ラウラは千冬姉の影響が皆より比較的多く食べてるが俺達と比べたらかなり少ないのはいなめない。まあ体格差があるし。一度クラスの女子が葵の健啖っぷりを見て「そんなに食べたら太るよ」と言ったら

「毎日毎日体を動かしまくってるから大丈夫。それに食べないと体持たないし成長もしないわよ」

この発言を聞いた周りの女子達は葵の胸に視線が注がれた。そこには箒にも勝るとも劣らない立派な胸がある。皆葵を羨ましそうに眺めるが葵は気にせず食事を続けていった。

ちなみに葵は登校三日後から基本食堂や校舎の中等寮以外ではでは完全に女口調で会話するようになった。俺に対してもそうで、「一夏、今日は何食べる？私は今日は鮭定食にしようかな？」と言っ

てきた時は思わず葵を凝視した。まあ葵曰く

「何時、何処で織斑先生に出くわすかわからない以上、公共の場ではちゃんと女の子しないとね」

らしい。千冬姉本当にいきなり現れるからな。何度も何度も殴られればそうなるか。そのため篤達も最初は面喰らったが、今では慣れて普通に会話している。むしろずっとそうしなさいと皆言ってる位だ。

ちなみに何故葵が男みたいに喋ったら叩かれる理由だが、代表候補生だから。国の看板とも言える存在が、そんなガサツなことはしてはいけませんと主に女議員から言われてるらしい。これもある意味性差別じゃないとぶつぶつ文句言ってるが、俺も篤達も今の外見じゃ女の口調の方が断然あってるので同意できない。

その後朝のHRを終え、授業に入る。相変わらず授業について行くのがやっとの俺だが、それでも葵が来てからは大分マシにはなった。

「助けてドラエモン、ここがさっぱりわからないんだ」

「全くしょうがないなあおびた君は」

こんな感じでバカやってても、葵は乗ってくれてそのままわかりやすく教えてくれる。セシリアやシャルルとかに聞いても快く教えてくれるが、俺は葵が来てからは葵に聞く事が多くなった。まあどっちかというところだったバカなやり取りがやりたくて葵に聞くのが大きな理由。もう一つは……例えばセシリアに聞いた場合、そした

ら箒にシャルルにラウラが不機嫌になるし、『どうして私に聞かないの(だ)』となるからだ。何でもこうなるんだ？と葵に聞いてみたら苦笑いしか帰ってこなかった。

実習授業の時、葵に専用機が無い事を知った。代表候補生なのに？と俺が聞いたら

「別に代表候補生なら全員専用機持ちつてわけじゃないわよ。あくまで候補生なんだから。それに私の専用機の話はあったんだけど……誰かさんの専用機を作るためにコア使われて私の分が無くなったし」

そして俺をジト目で見る葵。いやなんというか……すまん。

しかし専用機は無いが、葵の操縦技術は確かに凄かった。訓練機に乗ってるのに、専用機持ちの俺やセシリア達とほぼ変わらない動きをしてくれる。一番驚いてるのは同じ訓練機に乗ってる箒で、どうやったらそこまで動けるのかと驚愕していた。

そしてここでも俺は葵に操縦について教えて貰ってる。

……まあ俺のコーチを買って出ている皆に不満持たれてるけどね。だってシャルルと同じ位こいつに教えて貰う方がわかりやすいんだよ。葵も俺が理解できるように考えて言ってくれるし。ただ難点があるとすれば

……ISスーツって目のやり場に困るよね。

昼食は最近では食堂以外でも屋上で皆で弁当を持ち寄って食べる事も多くなった。箒は和風、鈴は中華、シャルルは洋食が多い。セ

シリアとラウラも頑張って作るようにしている。最初葵はセシリアの料理を食べ、正直に

「不味い！ちゃんと味見してるの！」

と言ってしまった。セシリアはその時はショックで泣いてしまい、葵は慌てて

「ごめん！言いすぎたわ！私がちゃんと料理教えてあげるから！だからセシリア泣かないで」

と、昼休み時間中セシリアを宥めていた。その後葵は約束通り暇な時間があればセシリアに料理を教えるようになった。その甲斐あってか、最近では最初に比べかなり上達し、安心してサンドイッチを食べられるようになった。ラウラも酷かったが、シャルルがサポートすることでこちらも最初と比べかなりマシになった。

ちなみにこの昼食を皆で一緒に食べようと言い出したのは葵。葵はセシリアと鈴、ラウラの仲が妙にギクシャクしていると俺に指摘。学年別トーナメント前に起きた出来事を話すと葵は納得し、その翌日から弁当を各自作って一緒に食べようと提案してきた。各自のお弁当を食べて意見交換してしていけば心のしこりも溶けるんじゃない？とかなり曖昧な理由で行われたお弁当会は、まあ第一回はセシリアが大泣きして終わったが、その後は葵の言う通り順調に進んだ。主にセシリアと鈴には葵が、ラウラにはシャルルが間に入ってやり取りをしたおかげで、最近ではもうわだかまりなく三人とも仲良くなっている。

しかしこの昼食会、俺だけ弁当を作るのを葵から禁じられている。いや楽だからいいけど、理由を聞いたなら

「まだ駄目。皆のレベルがもっと上がったなら一夏にも作ってもらうから。今作ったら…皆ショックを受ける」

との事。なんのこっちゃ。

放課後になると、俺は以前同様アリーナでISの特訓をしている。専用機を持っていない葵は箒同様申請書を出してISを借りてくる。しかし毎日借りる事は出来ないの、基本セシリアや鈴達と訓練することが多い。

葵と箒だが、借りられない日は道場に行き、剣道勝負をよくしている。箒が転校してからは葵、剣道の練習はしてなかったが、代表候補生になってからは剣道の練習も再開したという。葵と箒だが、7対3の割合で箒が勝っている。さすがにずっと剣道を続けていた箒の方が強いようだが、それでも負けるのが悔しいのか大体箒の方から勝負を挑んでいる。葵の専門はどちらかというと空手だが、箒の実力は本物なので良い特訓になると喜んで応じている。俺も葵に剣道で勝負したが……ええボロボロにされましたよ。

そして葵とのIS戦だが、初めて戦った時はあまりの強さに茫然としたな……。

「よし、じゃあ一夏！待望のISでの勝負をしましょうか！あ、手加減いる？」

葵はそう言っで打鉄に乗って俺に笑いかけた。その顔は俺に負ける事なんてありえませんと言っている。

「ふざけんな！全力できやがれ！」

俺はそう叫び返した。

「じゃあ、始めようか！」

と言っで。俺に突撃してくる葵。早い！すぐに後退し距離を開けようと飛翔。しかし葵も俺を追い飛翔。その瞬間いきなり『瞬時加速』で一氣に間合いを詰めて来た葵。その手には何も持っていない。

「くそ！」

すぐさま雪片式型を構え、迎撃態勢を取る。葵の専門は空手だが、これはIS戦。なにか武器を持つてるかもしれない。しかし葵はそのまま俺に接近。俺は雪片式型を葵めがけて振り下ろす。

「それは下策中の下策ね」

と言つて葵は、俺の一撃を真剣白刃取りで受け止めていた。嘘だろ！

「じゃあ見せてあげる。私の戦い方」

と言つて白式の腹部に正拳突きを叩きこんだ。その瞬間

「~~~~~」

凄まじい衝撃が俺を襲い、勢いよく壁に激突。あまりの衝撃に眩暈を起こしかけるが、エネルギーを見て絶句。さっきの一撃で半分は無くなっていた。

「まだまだいくよ」

そういつて再度俺に接近してくる葵。雪片式型を構え迎撃するも俺の攻撃を曲芸師のようにかわしていく。そして葵は雪片式型の柄部分を蹴りあげ、浮いた手をさらに蹴つて俺から雪片式型を手放させた。無手となった俺に葵はまた拳を構えて、振り抜いた。

また容赦なく壁に激突した俺。そして絶対防御発動。俺のエネルギーは全て空となった。

誰が見てもわかる通り、俺の完敗だった。

「いやね、私はISは乗るで無く、肉体の延長的な物と思ってるわけ」

試合終了後、俺は葵にあのでたらめな一撃の正体を聞いてみた。

「ISを動かすのはあくまで人間。それは当たり前だけど、ISって人型じゃない。そして精密なその作りは肉体、いやそれ以上の動きを行える。一夏、私はISを操縦するでなくISを装備して戦うと認識してるわ」

「そして肉体とISの動きを完全にシンクロさせることで、今まで私が長年練習を重ねて来た空手の技をISで完全再現。あの威力はISを使うことでISが持つ力を最大限まで引き上げてるから産まれる威力。みんなISで格闘してるけど、それはただ動かし相手につけてるだけ。私からすればままたね」

そういつて葵はラウラ達が待機している所まで戻って行った。回線を通じ俺達の会話を聞いてたんだろう、皆驚愕の目で葵を見ている。そして思う。これだけの事ができても何で代表候補生なんだろと。

その疑問は、次に鈴、セシリア、シャルル、ラウラと戦っているうちにわかった。葵はISを乗りこなし近接格闘が強いが、銃などの飛び道具を使わないからだ。そのため鈴は距離を取り衝撃砲で攻撃、しかし葵は衝撃砲を掻い潜り接近し殴る蹴る等で倒したが、鈴も葵のシールドエネルギーは半分は減らしている。

セシリア戦では葵は近接型刀プレートを使いピッドを斬って落としたりもしたが、それでも遠くから撃たれたり切り札のミサイルに被弾したりとした。それでも最終的に間合いを詰めた葵がセシリアを殴り倒した。

シャルルは基本距離を取って戦い、ライフルで狙撃したりマシンガン撃つたりとにかく近づけないような試合運びをした。それでも掻い潜ってくる葵に、中間距離では散弾銃等面の攻撃で葵を牽制、しかしそれでもかわし多少の被弾は恐れず『瞬間加速』で肉薄する

葵に、その正面に実体シールドを出現。いきなり現れたシールドに葵は避けきれず激突。動きが止まった所をシャルルが『瞬時加速』で距離をつめ、左腕に仕込んだ『盾殺し』を打ち込もうとした。が、その一瞬の後

「きゃあ~~~~~！」

勢いよく吹き飛んだのはシャルルの方だった。葵はあの一瞬で機体を調整、突進してくるシャルルをカウンターで迎撃したのだ。その後は同じ手は通用せず、いにシャルルに接近する事に成功した葵は一気に勝負をつけた。ちなみにあの時カウンターが成功したのはほぼ奇跡だったと葵が言っていた。

ラウラ戦だが、この時とうとう葵は敗北した。ワイヤーを掻い潜りラウラに接近するも、ラウラのAICが発動し、完全に行動不能になった。その後葵はラウラにタコ殴りにされ破れた。時間にして20秒で負けている。その姿に俺達は茫然とした。…だってあんだけ俺達ボロボロにした相手がこんなあっさり負けるのは。

「あゝ、まさかシュバルツエア・レーゲンにあんな装備があるなんて。ここまで完敗されたの久しぶりよまったく」

ラウラと戦った後の葵は、口ではそういうも楽しそうな顔をしていた。

「でも、いずれその装備も克服してあげるから、覚悟してなさい」

「ふ、望む所だ。今回は私の手札を知らなかったからあの結果になっただけだしな。でも次回も私は負けんぞ」

そういつて互いを讃えあう二人。その様子を見て

「葵！次は私が勝つんだからね！覚悟してなさい！」

「次に戦う時は、本日とは違いますわよ！」

「そうだね、僕ももつと戦術の幅を利かせるようにするよ」

三人の言葉を聞いて葵も、

「いいねいいねこういう熱い展開！でも次も私が勝つ！」

と宣言。望む所と言いあつて皆を眺めながら、俺の心にも熱い物が産まれてくる。ああ、やっぱり男ならこの熱い展開は良い！

「俺もだぜ葵！次は俺が勝つ！」

しかし俺がそう言った後、皆の返事は

「…………それは無理（だ、ですわ）…………」

…………おまえら酷いくない？

こうして俺達の日常は流れていくようになった。以前とは違う毎日俺は楽しむようになった。そしてそのまま、来週に控える臨海学校も俺は楽しみにした。今のメンバーで迎える臨海学校、それは最高に楽しい思い出になる気がするからだ。

そっぴや葵水着持つてるんだろか？シャルルも男としてここに入學してるんだし、持ってないかもしれない。次の休みの日に二人を連れて買いに行くのも悪くないな。

日常（後書き）

戦闘シーン書ける人尊敬します。

そしてこれようやく本編と絡める…

後葵が料理できる理由ですが、葵に母親が幼いところからいないからです。そのため料理は一夏と一緒に習ったため、結構上手いです。

買い物狂想曲（前編）（前書き）

一夏以外の一人称に挑戦してみました。

買い物狂想曲（前編）

「なあ葵、次の休みの日に買い物に出かけようぜ」

俺はベットの上で横になりながらジャンプを読んでいる葵に尋ねてみた。目を悪くするから止めとけ。

「買い物？何を買いにいくんだよ？」

「来週は臨海学校があるだろ。お前学校の水着しか持っていないだろうせ。俺もそうだから一緒に買いに行こうぜ」

俺の言葉に葵はふむ、と頷いた。

「ん？二人で出掛けるのか？他は誘わないのか？」

「ああシャルルも誘っていいこうと思う。あいつも確か前水着持っていないって言ってたからな」

「シャルルね……、いや一夏誘ってくれて悪いが俺は次の休みは用事がある。だから シャルロット と一緒に買いに行つて来てくれ」
葵は妙にシャルロットの名前を強調して言った。

「用事？早く終わるんなら待つぞ」

「いやいつ終わるかは俺にもわからないから俺に構わず シャルロット と言つて来い。ああ、そうそう シャルロット はこの辺の地理とか知らないし女の子なんだからちゃんとお前がリードしてやれよ」

また シャルロット と強調して言っていく葵。なんでだ？

「ああ、言われなくてもわかってるよ」

「おう、デート楽しんでこい」

「デ、デート!?!」

顔が赤くなる俺をニヤニヤしながら見る葵。くそ、変な事言っからただ一緒に買い物誘っただけなのに、妙に緊張してしまうじゃないか。

週末の日曜日、天気は快晴。お出かけには絶好の日。今僕は一夏の一緒に電車に乗っている。昨日いきなり一夏からメールが来て、『二人で水着買いに行こうぜ』と誘われたから。確かに僕は水着をまだ買って無いから今日買いに行こうとは思ってたけど、まさか一夏から誘ってくれるなんて!しかも二人っきりで!僕が学園に女の子だとカミングアウトしてからは初めての二人っきりだよ!ここ最近一夏葵とべったりだったから余計に嬉しいよ!

「ああ、良い天気だなあ」

電車で揺られながら風景を眺めてる一夏に、僕は聞いてみる事に

した。

「あのね、一夏。ちょっと聞いていいかな？」

「何をだ？」

「えっとさ、どうして僕だけ誘ってくれたのかな？てっきりこいうのは葵も誘うとばかり思ってたから」

勇気を振り絞って聞いてみた。ま、まさか僕の事が好きだから！そして二人つきりになりたかったからとかな！

「葵も誘ったが用事があつて来られないんだと。誘った理由だけどもうすぐ臨海学校あるだろ。お前以前女子用の水着持って無いって言ってたじゃないか。俺も買ってないからついではと思って」

「っ、ついでに…」

さっきまでエベレストまで届きそうな舞い上がってた気持ちが一気にマリアナ海溝まで下がっていったよ…。

うん、一夏にその辺を期待した僕がバカだったんだよね……、それにこの二人つきりも葵が用事があつただけなんだ。

「まあ！どうせそんなことだろうと思ってたけどね！」

落胆を誤魔化すためちょっと語気を荒くした。実際一夏に対し怒ってるけど。

「何怒ってるんだシャルル？」

シャルル。その言葉を聞いた瞬間僕の怒りは再度噴出した。

「シャルロット！二人きりの時はそう呼んでっていったじゃない」

「わ、悪いシャルロット！ん、そういえば二人きりで思い出したけど、葵が来てからシャルロットと二人きりになったのって今日が初めてだな」

「そうだよ、だから色々期待したのに……」

いくら久しぶりに親友と再会したからって、一夏ってば毎日毎日葵と一緒にいるし！まあ昔から仲が良かったのは筈や鈴から聞いてたけどさ。その葵もいなくて今日一夏から誘ってくれたのに誘った理由がついでだなんて！

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死んでしまうがいいよ」

「何だいきなり？でも確かにそんな最低な男は死ぬべきだな」

……鏡見なよ一夏。最低な男の顔が見れるよ。僕はは、と大きな溜息をついた。

駅について電車から降りても不機嫌な僕に、一夏が僕の機嫌を取ろうとしてきた。

「あ、あのーシャルロット。理由はわからないけど、お前を傷つけたんなら謝る。ごめん！だから機嫌直してくれ」

そういつて何度も頭を下げて謝る一夏。うん、もう許してあげよっかな。

「もういいよ。一夏が悪いとわかったんなら」

「そ、そうか。　じゃあ買い物にいくとするか！　ここは俺は昔からよく来てるから案内するぜ。あ」

そう言って一夏は僕の前に右手を出した。え、これってまさか！

「はぐれたら大変だもんな。手を繋いでいこうぜ」

ま、まさか一夏からこんな提案するなんて。ゆ、夢じゃないよね！

「う、うん！」

僕は慈しむように一夏の右手を左手で握った。

「……ねえセシリア。あれって手を繋いでない？」

「……ええ、繋いでますわね。しかも見てた所一夏さんから手を出してましたわ」

「そっか、見間違いでも白昼夢でもないんだ。よし、殺そう！！」

セシリアと一アリーナで訓練しようと歩いてたら、偶然一夏とシャルロットが歩いているのが見えて気になって二人でついて来たけど、まさかこんな事態になるなんて！

一夏……！あたし以外の女と二人つきりで出掛けるだけで無く手も繋ぐなんて！殺す！IS部分展開！衝撃砲用意！発

「やめなさいっての馬鹿」

「グエツ！」

いきなりあたしは襟首を後ろから強く引つ張られ、服に首が圧迫された。誰よ！邪魔するのはって、

「葵！」

「はあゝい」

葵はあたしの襟首を掴んでいた。下手人はあんたかい！さらに葵の後ろにはラウラもいた。

「葵さん、ラウラさんも！どうしてここに？」

「いや昨日からシャルロットが浮かれてたのが気になってたのでな。今日の朝、えらく身だしなみを気にして出掛けたシャルロットを見て、もしやと思ったたら案の定一夏と一緒にになった。そして私も二人に交ざろうとしたら」

「私が止めたって訳。まあでも面白そうだからこうして二人の尾行はしてるけどね」

そういつて歩き出す葵。その後をついていくラウラ。葵の手にはカメラも握られている。完全に出歯亀状態。ってちよっとまって。

「ねえ葵。もしかして今日二人が出掛けるの知ってた？」

「知ってたわよ。だって元々一夏から誘われてたから。でも断ってシャルロットと二人で行くようにしむけたけど」

「はあ！それどういうことよ！」

なんであんたシャルロットの味方してんのよ！どうせならあたしの味方しなさいよ！

「まあまあ落ち着きなさいって鈴。大声出すと二人に気付かれるわよ」

「そうですねよ鈴さん、少し落ち着いてください」

あたしを宿める二人。葵はともかく、セシリアあんたは何で落ち着いてるのよ。

まああたし達がこうしてるうちにも一夏達は移動し続けてるため、取りあえず皆で尾行を再開することにした。うゝ、まだ手を握ってるし。

「ところで葵さん、一つ聞いてもよろしいですか？」

「何セシリア？」

「先ほどの台詞から考えますと、葵さんは一夏さんとシャルロットさんを二人っきりの状況を意図的に誘導したように思えますけど」

「さすがセシリア！鋭い！でも意図的っていうよりこれは偶然かな。一夏が買い物行こうと誘って、そのメンバーが私とシャルロットの二人だけだったから出来た事だし」

「葵、あんた何であの二人を二人っきりにしたかったのよ。まああんなことからただ面白そうだからって訳じゃないでしょ」

あたしの言葉を聞いて少し驚いた顔をする葵。だてにあんたと幼馴染してるわけじゃないのよ。ほら、早く言いなさいよ、あたしの言葉を聞いてセシリアもラウラも葵に教えて欲しそうに見てるわよ。

「うゝん、簡単に言えば一夏とシャルロットの関係をリセットさせたいから」

そういつて何故か葵は申し訳ないつて顔をしてシャルロットの方を向いた。

休日でごった返しているショッピングモール『レゾナンス』を、俺はシャルロットと一緒に手を繋いで歩いている。全く凄い人ごみだ、出発前に葵が言っていた「あそこはぐれたら面倒だからシャルロットと手を繋いでいた方がいいぞ」は本当だな。あいつの忠告に感謝せんとな。しかしさっきまでかなり不機嫌だったのに、今はかなり機嫌が良いな。鼻歌まで歌ってるし。

人の流れも落ち着いていた噴水がある広場まで歩いてきて、俺はなんとなく上機嫌の理由を聞いてみた。

「なあシャルロット、どうしてそんなに機嫌が良いんだ？」
俺の質問にシャルロットは

「え、だってこうして一夏と手を繋いで買い物に来てるんだよ！嬉しくない方がおかしいよ！」

と、満面の笑顔で返した。いやそう臆面も無く言われると少し照れるな。

「そつだシャルロット、さっき思ったんだが皆もうお前が女の子だつて知ってるんだから別に二人っきりの時にシャルロットて呼ぶの

も普通だよな。でもどうせだし別の呼び名考えようか、俺とシャルロットだけの呼び名」

俺の言葉に吃驚した顔をするシャルロット。え、そんなに可笑しなことだったか？

「え、いいの!？」

「うん、そうだシャルなんてどうだ。呼びやすいし」

「うん、いいよ凄く良いよ!」

「そ、そうかそんなに気に入ったならなによりだ」

俺は笑顔で「シャル、シャルか」と喜んでいるシャルを見る。

いつものIS学園の制服で無く、私服姿なんだが、シャルってミニスカート履くんだな。そこから見える脚線美がって何見てるんだ俺!しかしこうして見るとシャルって本当に女の子だな。男として入学してきたのが嘘のようだ。ん、男、シャルル:

「なあシャル、一つ聞いていいか？」

「なあに一夏」

「もしかしてだが、シャルが学園側に女だって公表した後俺はずっとシャルルって呼んでたけど、…実は嫌だったか？」

俺の言葉にシャルは複雑な顔をした。

「うん、どうだろ。最初にシャルルって紹介しちゃったから一夏の中でそれが定着してしまっただなあとと思ってたけど、……本心じゃシャルロットって本名で呼んでほしかったかな」

「そつか、ごめんシャル。俺無神経にお前の事傷つけてた」

「良いよ別にそんなの。だって今じゃ一夏から素敵な愛称もらっちゃったし。それになんとかなくだけでも理由もわかるし」

「理由？」

何だ？シャルは何を知ってるってんだ？

「タイミングが悪かったんだよねえ。僕が女の子だって公表した日は一夏、皆から一日中追いかけられてたし翌日は休日。そしてその翌日は葵の初登校で衝撃的な告白。でね、一夏は葵が女の子になっても変わらないって思ってるでしょ。多分だけどその意識を僕にも向けてたんだよ。シャルロットに戻ったけど、一夏の中じゃ僕は変わらずシャルルのままって」

シャルの言葉に俺は衝撃が走った。ああ、そうか俺シャルが堂々と女の子に戻ったってのに心の奥底では、男のシャルルの方が本当の姿だと……。なるほど、それで葵は昨日…。

「ごめんなシャル、確かにその通りだったよ。お前が勇気振り絞って女に戻ったってのに俺は…」

「だからいいよもうそれは。一夏も今謝ってるし、それに」
そういつてシャルは右手を胸に当て、

「今の僕はどう見える一夏。男の子？女の子？」
と笑顔で聞いてきた。んなもん決まってる！

「ああ、可愛い女の子に見えるぜ」

俺の台詞を聞いて、シャルは耳まで真っ赤になった。風邪でもひいたのか？

「うんうん、作戦は大成功！これでシャルロットも報われるつても
のよね」

「いやあんたがしたかったのはわかったけど……あんた何時の間に
一夏に盗聴器つけたのよ」

先ほどまでの会話は、葵が一夏にとりつけていた盗聴器で全員聞
いていた。葵が一夏をシャルロットと二人きりにさせた理由がわか
り、セシリアもラウラも二人の会話を聞いて複雑な顔をしている。
…あたしもね。二人にそういうのがあったなんて全然気付けなかつ
た。

「そんなの同室で生活してるんだからいくらでもあるわよ。でもこ
の問題に一夏が気付くかは賭けだっ
ただ」

「まさに穴だらけの作戦だな。一夏の鈍感さを考えたら普通に何も
無く終わる可能性もあっただろうに」

ラウラの言葉にはあたしも同感。あの一夏が今回ここまで頭が回
ったのは奇跡としか思えない。

「まあ多少の仕込みはしたわよ。でも私は一夏はちゃんと気付くと思
ってたわよ。まあ愛称までは予想外だったけど」

「どうして一夏さんが気付くと？」

セシリアの疑問に葵は笑顔で言った。

「ん？しいていえば親友としての勘」

その言葉にあたしは少し悔しくなる。なんだかんだでやつぱ葵、一番一夏の事見てるし、……信頼してるんだってわかったから。

「いやあこれではやく肩の荷がおりたわ。ところで」

そういつて、あたしとセシリアとラウラを見ていく葵。何よ一体。

「これで一夏も本当の意味でシャルロットを女の子として認識したわよ。そして前は一ヶ月間浸食を共にした相手。はつきりいつて強敵ね」

あ~~~~そうだった！え、これってちょっと不味いわよ！

「いや~~~~これから楽しくなりそう」

葵は他人事のように言つて、苦悩するあたし達を眺めていった。

買い物狂想曲（前編）（後書き）

無駄にシャルル設定引っ張ってました。そして買い物してないし今回。

次回は葵中心にやりたいです。

買い物狂想曲（後編）

「さてと、もう私は自分の買い物に行くけど皆どうする？」

そういつてこの場から離れようとする葵。ってちよつと待ちなさい。

「なによ葵、あんたさっきあんな事言っておいて続き見ない訳？あの二人の事気にならないの？」

「あんまり。だってあの一夏だし。今日はシャルロットを本当の意味で女の子だと自覚したようだけど、それだけで一気に関係が進むようなら中学の時に鈴、あんたととづくに結ばれてるわよ」

「……悲しいけど確かにそうね」

あのキングオブ鈍感の一夏の事だし。凄い説得力あるわね。

「それにしても」

そういつて一夏とシャルロットの二人を交互に見る葵。そして一夏を見て、

「シャルロットとデートしてこいと煽ったのに、一夏の奴黒のジーパンに柄物Ｔシャツ一枚とは……。シャルロットが気合入ってる分余計に浮いてる……」

一夏の服装に呆れてる葵。うん、確かに一夏の服装はデートに行く服装とは思えないけどさ。葵、あんたには言われたくないと思うわよ。

「……いや葵さん、貴方もそれは女の子としてどうなんですか？」

そういつて若干呆れ顔をしながら指摘するセシリア。あたしも同

感。だって葵、……上は無地の白Ｔシャツ、下は青い若干くたびれたジーンズ。シンプルにも程があるわよあんな。

「そう？変かな？夏らしく、そして私に似合う服装だと思うけど」
……まあ似合ってるわよ。でもねえ。

「そんなことより、二人はもうかなり先に行っちゃってしまっているぞ。葵、あの二人に交ざるのを邪魔して様子を見ようと言ったのはお前だろう。なら責任持って二人が水着を買ってまでは付き合え」

ラウラが一夏達を見ながら言うてくる。まあラウラの言い分も一理あるわね。ラウラの行動の邪魔をしたのは葵だし。

「あーもうわかったわよ。それまでは付き合おうわよ。でもそれで降は知らないからね。私も買い物したいし。でもさすがに目的は達成したから盗聴機能は止めるわよ。これ以上は無粋だし」
渋々同行する葵。そしてまた、あたし達四人は一夏達の追跡を始めたのだった。

どうしてこうなってるんだろう？

俺は現在正座されている。隣にはシャル。俺と同様正座されている。そして俺達の眼前には

「いいですか織斑君、シャルロットさん。二人の仲が良いのはいい

ことです！ですが男女が一緒になつて更衣室に……」

と私怒ってますよーって顔をして俺達に説教してる山田先生。その隣に呆れた顔をした千冬姉がいる。うゝ、どうしてこうなった？水着コーナーに来た俺達は別々で水着を買いに行つて俺の分は早く終わったからシャルを待つていたら急にシャルが来て俺の手を掴んで試着室に引きずりこんで……

それから急にシャルが脱ぎだして、水着に着替えて俺に見せて、そして急にレースを開けて俺達をみて呆れてる千冬姉達がいる。

…あゝカオスだ。なんなんだこの流れは。シャルが急に謎の行動をするし何故か千冬姉に見つかつて山田先生に説教されてるし。しかし…、あの時のシャルの生着替えは拷問物だったなあ。

「織斑君、なんで貴方は説教中なのに顔を赤くしてるんですか！」

「大方先ほどの試着室での事を思い出したんだろう。何をしてたかは知らんが」

「お、織斑くん〜！」

千冬姉の言葉を聞き、さらに激昂する山田先生に耳まで真っ赤になるシャル。千、千冬姉！何でわかるんだよ！

「それよりもいい加減出てきたらどうなんだおまえら」
千冬姉はそう言つて近くの柱に語りかける。すると、

「あゝ、やっぱりばれてました？」

と葵が出てきて、その後にセシリア、ラウラ、鈴が出て来た。

「おまえら結構前からこそそこそ俺達の後ついてきてたのは知ってたが、何をやってるんだよ？それと葵、お前今日は用事があつて来れ

ないんじゃないかったのか？」

「用事が終わったからここに来たまでよ。文句ある？」

俺が睨んでもしれつと答えやがった。この野郎。その後もあくだこゝだ騒ぐ俺達を見て

「あ、そういえば私も用事があるんです。学園関係の用事何で、鳳さん、シャルロットさん、セシリアさん、ボーデヴィツヒさん、青崎さん、お手伝いお願いします！織斑先生は別件お願いします！」
と言つて山田先生は葵達を強引に引きつれてどこかに行つてしまつた。いいのか生徒を仕事につき合わせて？

「全く山田先生も変な氣をつかつてくれるもんだ」

呆れた顔をして、その後事態を把握してない俺に千冬姉は説明してくれた。なるほど姉弟水入らずね。千冬姉もこの場合は千冬姉と呼んでいいと許可してくれたし、久々に千冬姉と本当の意味で二人きりになつて俺もちょっと嬉しくなつた。山田先生に感謝しないとな

「そうだ一夏、どうせだから私の水着を選んでくれ」

と言つて俺に二つの水着を見せる千冬姉。黒と白のビキニか。千冬姉なら……黒だな。でもこの水着だとなあ。男が寄るか？なら白の方がいいかな。しかしこの白の水着……これは

「どっちがいいと思つた？」

色々考えてたら千冬姉が俺に聞いてきた。うん、害虫防止のためにもここは白だな！

「白かな」

「嘘をつくな。お前は黒の水着を一番注視していた。お前は氣に入

った方をよく見るからすぐにわかる」

と言って黒の水着を掲げる千冬姉。え、俺ってそんな癖があったのか？

「じゃあお前が気に入った方を買うつしよ。ところで一夏、さっき白の水着も急に見だしてたがどうしてだ？」

少し笑いながら俺に聞いてくる千冬姉。何故に？

「いやその白い方は葵か、箒に合いそうだなあと思ったんだよ。いやあの二人も千冬姉同様スタイルいいし」

「ほう」

と言って何故か少し笑いながら俺を見る千冬姉。な、なんだよ。

「いや何お前も少しは異性を意識してきたなと思ってな。水着を見て似合う女の姿を連想するとはな。葵と箒もさぞ喜ぶだろうな」

「いや千冬姉、さっきも言ったけど体型似てるからつい想像しただけだって！それに葵は現在進行形で、箒も以前一ヶ月位同室だったんだからそりや意識するさ。…昔とはやっぱ違うんだから」

「それでも似合う水着を自然に連想するとはな。さっきはデュノアとデートしてたしな。これも同室相手か。…もしかしてお前は同室位せんと相手を意識しない朴念仁ではあるまいな？」

「ちげーよ！何言ってるんだよ千冬姉！それにシャルロットとは買い物に来ただけだったの！」

「…憐れだな」

と言つてはあゝ、と溜息をつく千冬姉。何変な事言ったか俺？

「で、どうなんだお前は。人の水着を見て私の事を心配する余裕ないだろう。お前もいい年頃だからそういう相手でも見つける。周りには余るほどたくさん異性がいるだろうが」

「いやそんなこと言っても千冬姉。今はまだ俺そういうの考えられないよ。まだ友達と騒いで遊ぶ方が好きだな」

「友達…か。そういえば葵が登校し出してからお前以前よりも楽しそうに過ごしてるな。周りにいる連中は変わらないのに、葵が来ただけでお前の笑顔が増えたな」

「まあね。やっぱ気の置ける友達が増えるのは嬉しいし楽しいぜ」

「…でも、お前も葵はもう異性として意識してるんだよな」

「それは…まあそうだよ。さすがにもう男に思えないだろ。本人も女になったと公言してるんだし。でも、やっぱり俺の中ではあいつは大切な幼馴染だ。それだけは変わらない」

「そうか…わかった。まあ今はお前は皆と馬鹿騒ぎでもして良い思い出を作る方がいいのかもな」

「と言って千冬姉は水着を持ってカウンターに向かうようなので、俺もまだ他に買う物があるから千冬姉に用件伝えて別れる事にした。

「山田先生、生徒五人も引き連れ無ければならない用事って何よ？」

鈴さんが不満顔で山田先生に質問しています。まあ大体山田先生がしたい事はわかりますけど。

「それはですね、ってボーデヴィツヒさんは何処へ?!まさか織斑先生の所に?!」

「ラウラでしたら水着コーナーに居ましたけど急に真剣な顔して電話しに行きましたよ。先ほど用件を済ましたらこちらに來るとメールが來ましたから心配は無いと思います」

「そうでしたか、ふ、よかったです」と言つて胸をなでおろす山田先生。やっぱり胸大きいですわね。

「ところで山田先生、久しぶりの姉弟水入らずをさせるのは良いですけどその間どうします?お茶でもしますか?」

「あ、青崎さん!何で私の計画を?」

「いや僕もすぐわかりましたけど」

「一夏さんだけ連れなだけでバレバレですわよ」

「そ、そうよバレバレよ。すぐにわかったわよ!」

……鈴さん先ほどの発言は?それに目が泳ぎまくってますわよ。

「そ、そんな。そんなにバレバレだったなんて」

「まあそれは置いときまして。山田先生、何も無ければ私自分の買い物に行きたいんですけどいいですか？」

「買い物ですか。いいですよ。あ、どうせですから青崎さんの買い物に皆で付き合いますよ。いいですか青崎さん？」

「構いませんよ。それに皆の意見も聞いた方が良い物買えそうですし」

「わたくし達の意見？葵さんは何を買おうとしてるんでしょう？」

「葵、何を買うに行くの？」

「ん、皆もう買ってるとは思っけど来週で7月7日、第の誕生日じゃない。まだ私はプレゼント買ってないからこー」

「『誕生日~~~~~！』」

葵さんの言葉に、鈴さん、シャルロットさん、わたくしは絶叫しました。聞いてませんわ！

「嘘、みんな知らなかったの？」

葵さんが吃驚してますが、それ以上にわたくし達が吃驚です！

「聞いてないわよそんなの！」

「…何でこーいうの黙ってるかな？」

「危ない所でしたわ。危うく当日何もおめでとうの言葉も無いまま過ごすはめになりそうでしたわ！」

そんなことがあつて後で知ったりしましたら氣まず過ぎますわ！

「あら、皆とづくに知ってるそばかり。まあ確かに誕生日の話なんてしなかったけど」

「まあ確かにしてませんでしたけど…」

「葵も一応僕達に確認しておいてよ…」

「一夏もファースト幼馴染が聞いて呆れるわよ。誕生日なんて自分から言い出しにくいものなんだからあいつから私達に話さないよつたく」

「まったくですわ。一夏さんはこういう配慮が欠けてますわ。葵さんもですけど。」

「待たせたな。どうした皆、さっきから騒いで」

「そうこうしてるうちにさっき何処かへ行かれてたラウラさんが戻ってきました。なにやら紙袋を持ってますが何を買ったのでしょうか？」

「ちょうどラウラも来たし、皆で筈の誕生日プレゼント買いにいこうか」

「誕生日？何の事だ？」

「後で説明してあげるわよ」

「こうして私達は筈さんの誕生日プレゼントを買いに行く事になりました。後ろから山田先生が「青春ですね」と微笑んでいます。…なんか恥ずかしいですわね。」

千冬姉と再度合流し、まだ皆戻って来ないから近くのカフェで時間を潰す事にした。なんか本当に久しぶりに千冬姉と二人っきりで過ごしてるなあ。今は家族として話も出来るし、山田先生には本当に感謝しないとな。

「しかし休日に弟に水着を選んで貰い、カフェと一緒にコーヒーを飲むってのも……私も一夏に言える立場でも無いな」

「何で？家族なんだからおかしくないじゃないか？」

「それを平然と言える事に私はお前の教育を間違えたのかと思えてくるな」

なにやら難しい顔をして溜息をつく千冬姉。俺変な事言ったか？とか考えてると

「織斑先生！織斑君！お待たせしました！」

と皆を引っ張って行った山田先生が戻ってきた。山田先生の後ろにはセシリア、シャル、鈴、そして……え！？

「……葵、ラウラ。その格好どうしたんだ？」

「あ、あまりじりじり見るな！」

「はあ、こういうのはあんまり好きじゃないのに……」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるラウラに、こちらも恥ずかしそうに自分の体を見る葵。俺と別れる前はラウラは制服、葵は白Ｔシャツにジーパン姿だったのに、今では

「どう一夏！あたし達がプロデューズしてあげたこの姿は！似合ってるでしょ！」

「ラウラは制服しか持ってないって言うし、葵もちよっとオシャレというかもうちよつと服装に気を配った方がいいと思ってね」

「それでわたくし達が似合う服装を選んでさしあげましたって訳です。どうです一夏さん？」

胸を張って答える鈴、シャル、セシリア。なるほどねえ。しかし、

「いやラウラの服、確かに似合ってたて可愛いんだけど…普段着で黒のゴスロリ服はどうなんだ？」

いや似合ってるし凄く可愛いんだけど…これ来て街中歩くのはラウラ的にはどうなんだろう？

「何言ってるんだよ一夏！こんなに似合ってるんだよ！問題なんてあるわけ無いよ！」

と言って「可愛いよラウラ」と抱きつくシャル。完全にお前の好みだろそれ！

「か、可愛い…」

ラウラは先ほどから顔を真っ赤にしてぶつぶつ言っている。大丈夫か？そして

「……………」

「無言で見るのはやめてくれない。余計恥ずかしい」

葵は俺をそういつて睨むが…どうコメントしようか。いつもTシヤツジーパンなのに今は、赤の可愛いデザインのカミソールに、白いミニスカート。そして黒のニーソックスでこちらもシャルに負けず劣らず綺麗な脚線美…って何をまた考えてるんだ俺は！しかもいつもはストリートにしている髪をポニーテールにしているし。うん、箒とはまた違った印象がする。全体を見てこれは…

「ほう、ラウラもかなり見違えたが葵はそれ以上だな。カミソールはセシリア、お前の見立てだな」

「ええ、そうですわ織斑先生！何でわかりましたの？」

「いやお前がこういう服装が好きそうだからだ。で、このミニは鈴おまえだな？」

「え、ええ！そうです！千冬さん！」

急に昔の呼び名で呼ばれたため、鈴も昔からの呼び名で答えたが、直後にしまったって顔をする。

「大丈夫だ鈴。今はオフだから千冬姉もそれで注意しないぜ」

「そ、そう。よかった」

かなりホッとした顔で答える鈴。まあ頭叩かれたくないからなあ

「ふむ、かなり見違えたな。ラウラも葵もかなり似合ってる。一夏、お前もこういうのを相手にプレゼントできる男になれよ」
精進します。

「で、一夏。どうこれ」

葵が俺に聞いてきた。いやどうってお前……。ってなんだ皆無言で俺を見て！山田先生も千冬姉も俺に注目してるし！

「い、いやあまあ、あれだ。に、似合ってるぞ」

「つまらない回答だなあ。可愛いとか一言位言えないの？普通それくらいは男のたしなみと思うんだけど」

と言ってつまらない顔をする葵。いやだって可愛いし凄く似合ってるし正直……。

でもお前にそれ言うの凄く恥ずかしいし言えるかよ！

「全く、つまらん男だなお前は……」

…千冬姉までそう言わなくてもいいじゃないかよ。そして千冬姉、葵に何か言った後葵連れて何処かに行ってるし。

その後は山田先生からは「織斑君には失望しました」と残念な子扱いされるし散々だ。

「ねえ、さっきの一夏の態度さ、ヤバくない？」

「わたくし達、もしかしたらとんでもない事をしてしまったのでは？」

「同じ私服を見たつてのに僕とラウラと葵じゃ差がありすぎないかなあ……」

「可愛い……」

なんか鈴達顔を寄せ合って何か話し合ってるな。何を話してるんだ？そうこうしてるうちに千冬姉と葵が戻ってきた。葵の手には紙袋。何を買ったんだろう？

「さてと、もうすぐ夕方だ。学園に戻るぞお前ら」

こうして俺達は買ひ物を終え、学園に戻ることにした。色々あったけどまあ結構充実した一日だったかな。そして俺は隣にいる葵を見る。……俺の評価が気に入らなかったのかまた元に戻っている。

「どうかした？」

「いやなんでもない」

…やっぱ少し位褒めとくべきだったかな。

おまけ

「一夏も、葵も、鈴も、セシリアも、シャルロットも、ラウラもいない。私以外誰もいない……。何故私だけ除者にされたんだー!!」

「あ、あの篠ノ乃さん！久しぶりに部活に精を出すのは嬉しいけどちょっともう勘弁して！皆もう疲れて」

「どうして私だけー!!」

「あーもう！誰かなんとかしてー！部長もこんな時だけいないしー！」

本当に偶然が重なった結果、箒だけ皆と一緒にいられなかったのだが、無論箒にはそのような事はわかるはずもなく、一夏達が帰ってくるまで荒れに荒れた箒であった。

買い物狂想曲（後編）（後書き）

買い物終了

いやね原作では描写無かったけど、第結構落ち込んでないかなあと

臨海学校（序章）（前書き）

そういえば、自分の高校はこんなイベントなかったなあ…
いやある方が珍しいのかな？

臨海学校（序章）

「あー海だー！皆ー！もうすぐ泳げるわよー！」

IS学園をバスで出発してからはや数時間、目的地に近付いてきたためクラスの女子達はかなり興奮している。まあ無理もないか、今日の日を皆楽しみにしてたもんな。なんせこの臨海学校、初日はまるまる自由時間だから皆何して遊ぼうとか移動時間中そればっかだったし。

「一夏さん、もうすぐ到着しますわね」

通路の向かい側に居るセシリアも楽しそうな顔をしている。

「海で泳ぐなんて久振りだな。ラウラ、一緒に泳ごうね」

「あ、ああ。そうだな」

こちらにも楽しそうな顔してラウラに話しかけるシャル。しかしさつきからラウラはずっとボーっとしている。どうしたんだ？バス酔いか？

「大丈夫かラウラ？気分悪いのか？悪いならすぐに言えよ」

「だ、大丈夫だ一夏！心配はしなくていい！」

そういつて顔を赤くしてそっぽむくラウラ。いや本当に大丈夫か？

「そうか、でも無理するなよ。なにかあったら」

「わ、わかっている。私の事は気にするな」

「大丈夫だって一夏。少し敏感になりすぎだよ」

「葵さんの事はしかたありませんわよ。ですから一夏さんが責任を感じる必要はありませんことよ」

「でもなあ…」

皆はそう言うけど、やっぱりしなかなあ。

「しかし葵も、何故よりもよって今日に…」

皆が楽しみにしていたこの臨海学校。目的地に向かうこのバスには葵の姿は無い。何故なら…

「38度6分。風邪ですね」

「体調管理位しっかりしろ。代表候補生だろ貴様は」

「も、申し訳ありません…」

今日の朝、俺が起きたら隣のベットで顔を赤くしてうなされてい
る葵がいた。葵の額に手を当ててみれば物凄く熱く、これはヤバイ
と思った俺は急いで寮監している千冬姉を呼んだ。山田先生も一緒
になって俺の部屋に行き、葵の容体を見てもらった。

「しかしどうします織斑先生？普通の風邪でしたら注射を打って薬
飲んでぐっすり寝れば明日には治ってるでしょうけど」

「ま、まさか俺だけここに留守番しろなんて言いませんよね！千冬さん！」

葵！お前風邪のせいで状況判断やバくなってるぞ！千冬姉の前でその口調にその呼びかけは！

「…まあ安心しろ。今回青崎が行かないと困る事になるからな。別の車に青崎は寝ながら運ぶ事にする。今日の所は向ここの旅館で寝てろ」

お、さすがの千冬姉も病気で苦しんでる葵に鉄拳制裁はしないか。しかし葵が行かないと困る？何の事だろうか？そして千冬姉は葵を慈しむような目で見て言った。

「まあゆつくり休め。治ったら色々待ってるぞ。特に出席簿がな」

…どうやら治るまでは見逃してやるだけのようだ。治ったら葵の運命は…ご愁傷さま。

「よかったな葵、臨海学校に行けるぞ」

「それはホツとしたが、…結局一番楽しみにしていた初日の自由時間」

「まあ、それは諦めるんだな。ったくせつかく私が」

「？織斑先生どうしました？」

「いやなんでもない」

そして葵のために色々用意すると言って部屋を出る千冬姉。山田先生も薬を取りに部屋を出て行った。

「あゝ糞！なんで今日に限って俺は体調崩してるんだよ…」

「ごめんな。俺がお前の変化に早く気付いてれば」

「別に一夏が謝ることじゃないだろ。それに俺もいつこうなったかなんて見当がつかないんだし」

「だが同室にいなから」

「だからお前が責任感することは無いって。あ、そうそう」
そう言っただけはベツトから降り鞆を漁り始めた。

「おいちゃんと寝てろよ」

「あつた。一夏、これを」

そういつて葵は俺にカメラを渡した。

「一夏、俺の代わりにそのカメラで皆の水着写真を撮ってきてくれ。こんなチャンスはもう無いんだ！女の子の水着姿を見れないなんて男としてこれほど悔しいことは無い！」

「おい葵、お前熱のせいで完全に昔に戻ってるぞ。それにお前もう女だろ！」

大体お前女子更衣室でそんな光景毎日見てるだろが。相当熱で頭ヤバいなこいつ。それにこう言っただけはなんだが、お前以上のスタイルを持った女子なんてほとんどいないと思うが。

「あゝそうだった」

そういつて再びベツトに横になる葵。先ほどから声は元気だが顔はかなり苦しそうだ。

「あゝ一夏にも移つたらヤバいからもつ荷物まとめてこの部屋でろ」
葵はそういつて扉を指差した。

「馬鹿か。看病位させろ」

「ここでお前まで移つたら俺がへこむんだよ。頼むから出てけ。それに汗かいたから体も拭きたいんだよ。ああ、お前が俺を拭いてくれんの」

と挑発的な笑みを浮かべる葵。くそ、そんなこと言われたら出るしかないじゃないか

「わかったよ。葵、お前もよく寝て早く元気になれよ」

「ああ。あ、一夏最後に頼みがある」

「頼み？」

「ああ、箒をここに呼んでくれ」

以上回想終了。まあ葵は別便で向こうに行くと思った時は皆ホツとしてたな。箒は一番よかったと言ってたっけ。

…前回一人だけ除け者にされたと誤解したからな。一人の苦しみが一番わかるんだろう。

「そついや箒、葵はお前に何の用事があつたんだ？」

俺はバスに乗ってからずっと心ここにあらずな状態になっている箒に尋ねてみた。

「あ、な、なんだ一夏！何か言つたか？」

「いや葵は箒に何の用事があつたのかと思つてな」

「あ、いやそれは…」

と言つて顔を赤くする箒。何故に？

「と、とにかく！葵も明日には元気になるんだ。心配はいらないな、うん」

いや俺が聞きたかつたのはそういう事ではないんだが。

「そうだね、まあ今日は葵の分まで僕達は楽しんでこうよ」

「うむ、葵が言っていた海の家とやらで不味いラーメンを食べ、食べにくくなつても目を隠して棒でスイカを割り、海に向かって「バカヤロー！」と叫ぶのを代わりにやっておいてやろう。葵はそれらが日本の風物詩で海に行ったらやらなければいけないとか言つてたからな」

「…日本には随分変わった風習があるのですわね」

いやラウラ、セシリア。確かにそれはある意味間違つては無いんだが…あー説明が難しい！葵、絶対わざとぼかして話してやがるな。と、そんな事話してるうちに俺達は目的地に到着した。

旅館に到着後、俺の部屋は千冬姉と一緒に山田先生から聞かされた。それは俺が一人部屋だと就寝時間後部屋に突撃する女子が必ず出るからとか。…まあたしかに千冬姉と一緒にだとそんなことする度胸の奴はいないか。ちなみに今回は葵と一緒にでは無い。聞いた限りでは篝とのほほんさん達と一緒にらしい。

「いやゝアオアオと同室なんて楽しみだよ。風邪治ったら一杯ガールズトークやりたいよゝ」

「本当よね。こういう機会でも無いと青崎さんいつも織斑君というし。ま、それは篠ノ乃さんも同じだけど」

「全くそうよね。ねえ篠ノ乃さん、織斑君との昔話よろしくね」

「う、ああ」

おお篝、のほほんさん達に押されてるなあ。しかし安心した。入学したての頃とは随分変わったな篝も。

「…おい一夏、何故娘を見る父親みたいな目で私を見ている」

「きのせいだ」

そう言った後、旅館の前に一台の救急車が現れた。もしかしてと思ったら、案の定そこからストレッチャーに乗せられた葵と千冬姉が出て来た。

「…救急車で来たのか」

「確かに寝ながら運べますけど…」

救急車から出た葵は熟睡している。顔色も朝よりもかなり良くな
っており、これならすぐに元気になりそうだ。葵はそのまま旅館の
一室に運ばれ、そして救急車から降りた千冬姉と一緒に、俺は旅館
の女将から部屋を案内された。部屋までの道中俺は千冬姉に葵の容
体を聞いてみたら、注射と薬を飲んだらかなり容体は良くなってい
て、明日には山田先生の言うとおり元気になるとの事らしい。いや
本当に安心した。

早く元気になれよ。

部屋着くと千冬姉は開口一番に

「まあ部屋割の都合上、お前と私は一緒の部屋になったが、あくま
で私が教員だと言う事を忘れるなよ織斑」
と言ってきた。相変わらず仕事人間だな。

「わかってますよ織斑先生」

「ならばいい」

…うん、千冬姉少し硬すぎないかな。部屋で二人っきりの時位
は千冬姉と呼んでも良いじゃんか。

「公私の区別はつけんといかん」

…相変わらず俺の考えてる事は何故か読まれてるし。その後俺は
千冬姉から風呂場等のいくつかの注意事項を聞かされた。

「まあ以上だ。さて初日は自由時間だ。着替えて海にでも行ってこ
い」

「織斑先生は行かないんですか？」

「私は他の先生達と連絡なり色々ある。まあ、どこかの弟がせつかく水着を選んでくれたからな。暇になったら海に行こうと思ってる」
おお、千冬姉もやっぱり泳ぎに行くんだ。しかし千冬姉の水着姿か……、何年振りかなあ。

「では私は仕事に戻る。織斑お前は遊んで来い」

「わかりました織斑先生」

千冬姉に行ってきますと言って、俺は水着を片手に海へ行く事にした。

「なあ箒、これどう思う？」

「知らん」

更衣室がある別館に行く途中箒と出会い、一緒に歩いてるんだがその道中に珍妙な物があつた。ウサ耳。どうみてもウサ耳にしか見えない物が地面に埋まっている。そしてその横には「引っ張ってください」と書かれた看板。：まあこんなことする人はあの人位しかないよな。

「なあ箒これ」

「知らん。私は先に行くぞ」

そう言っただけで本当に先に行ってしまう筈。うーん、相変わらずだなあ。しかしやっぱり筈もこのウサ耳は……筈の姉、束さんだと確信してるんだな。

「まあ他の誰かが抜いたら面倒な事があるだろうし……」

そう思っただけで俺はウサ耳を抜く事にした。えい、ってあれ？てつきり地面の下に束さんがいるかと思ったのに、ウサ耳の下は何も無かった。

「どうしましたの一夏さん、そんな物持って？」

「いやウサ耳が地面にはえててそれを抜いたんだが下に何も無くて」

「はい？」

わけわからんって顔をするセシリア。…うん、俺も言っただけで支離滅裂だと思う。

「いや束さんが」

しかし俺が言い終わる前に、

ドカーン！

と空から巨大なニンジンが落ちてきて、俺達の前に突き刺さった。

「な、なんですの！」

セシリアがニンジンに向かって叫ぶ。そのニンジンだが急に二つに割れ、

「ふっふっふっ！引っかつたねいっくん！」

と叫びながら、世界一の天才、篠ノ乃東さんが現れた。…しっかしなんていうファンシーな格好だろう。千冬姉なら絶対着ないだろうな。いや東さん似合ってるからいいんだけど。東さんは俺から先程抜いたウサ耳を取り、頭に装着した。

「いやゝ久しぶり！本当に久しぶりだねー！元気だったいっくん。で、ところで篝ちゃんはどこかな？さっきまで一緒だったよね？」

「あゝそれなんですが」

まさか東さんと会いたくないから逃げたとは言えないし、どうしようかと思ったら

「まあ私が開発した篝ちゃん探知機があればすぐ見つかるけどねゝ。じゃあいつくん、またねゝ」

と言って走り去ってしまった。相変わらずゴーイングマイウェイな人だ。

「あの一夏さん、先ほどの方は一体…？」

「ああ、さっきの人が篝の姉の篠ノ乃東さんだよ」

「えええ！さっきの方が篝さんのお姉さまで、現在各国が探してる行方不明中の篠ノ乃博士?!」

かなり驚いてるセシリア。まあそうだよな。ISを開発した天才科学者があんな人だとは普通思わないよな。

「そうそういっくん」

「どわあ！」

いつの間にかまたこっちに帰ってきた束さん。何時の間に！

「たしかあーちゃん風邪ひいたんだよね。だったらこれ渡しといてね。」

と言つて俺に紙袋渡ししてまた何処かに行つてしまった。ていうか何で知つてるんだろう？まあ束さんだから納得するけど。

「あーちゃんとはもしかして…」

「ああ、葵の事だよ。束さん、昔から葵の事はあーちゃんと呼んでるんだよ」

…多分これ薬だよな？まあ束さんが変な物渡すとは思えないし。

「じゃあ俺一旦葵のとこまで行つてこれ渡してくるよ。セシリアは先に行つてくれ」

「あ、ちよつと待つてくださいー夏さん！」

その後俺はセシリアにサンオイルを塗る約束をさせられた。友達に縫ってもらえばいいのにどうして俺なんだろう？

そして俺は葵の部屋まで行つた。そして部屋に入ろうとしたら

「こら貴方！寝てる女の子の部屋に何入ろうとしてるの！」

…部屋の中にいた旅館の従業員に止められた。どうやらこの人は葵の世話を任されてるらしい

「いや友達の見舞いに」

「何言つてるの！気持ちはわかるけど女の子の寝顔を見て良い理由

にはならないわよ。さあさあ行っただ行っただ！」

と俺を部屋から遠ざけようとする従業員さん。いやちよつと待ってくれ！

「わかりましたよ！部屋には入りません！ですからお願いですがこれを葵の部屋に置いてくれませんか」

と言つて俺は束さんがくれた紙袋と伝言を書いたメモを従業員さんに渡した。

「まあそれならいいでしょう」

と言つて俺から紙袋とメモを受け取る従業員さん。そして俺を見てニヤつと笑い、

「ところでさつき貴方友達とか言つてたけど、実はこの子の彼氏？と、とんでもない事を聞いてきた。」

「いや違いますって！」

「ふん」

なんだよこの人。ニヤニヤ俺を見て！なんか恥ずかしくなった俺は逃げるようにその場を後にした。

そして俺は、皆がいる海に向かう事にした。

臨海学校（序章）（後書き）

束さん、もういい年なんだからあの服装は無いな〜とか一夏に言わせようと思ったが、束に抹殺されるので止めました

臨海学校（初日自由時間）

蒼い空、白い雲、輝く太陽が煌めく絶好の海水浴日和の日。そして砂浜にたくさんいる自分と同年代の少女達。しかも全員水着姿。そしてこの場に男は俺だけ。弾とかに今の状況を言ったら呪い殺される事は間違いないだろう。で、そんな中俺こと織斑一夏は現在…砂浜に体を完全に埋められ頭だけ出ている状態になっている。そして俺の前方にはラウラ。ラウラは目隠しをされ、手には…木刀を持っている。

「さて、葵が言っていた日本の風物詩とやらを体験するか。割るのはスイカではないが」

「頑張ってくださいラウラさん！わたくし達がちゃんと誘導してさしあげますわ」

「ラウラ　！その馬鹿スイカ粉々にするのよー！」

「まあ割っても食べれないけどね」

ラウラに声援をかけるセシリア、鈴、シャル。皆その目は怒気を孕んでいる。セシリア達の後ろでは千冬姉が呆れた顔で、山田先生はオロオロしながら俺とラウラを見て、そして…箒は顔を真っ赤にして俺を見ている。

おかしいな、何でこんなことになったんだろう？

葵に束さんから渡された物を届けた後、俺は水着に着替え海に向

かった。すでに多くの生徒が着替えて海に来ており、かなり賑やかになっている。俺は数人の女子からビーチバレーやサソイル縫って等の誘いを受けたりした。そんな中水着に着替えた鈴が俺の前に現れ、

「どう一夏、あたしの水着姿！」

と胸を張って俺に水着姿を見せつけた。…うん相変わらず胸ないなと言ったら殺されるな。しかし鈴はタンキニタイプの水着か。うん似合ってるな。

「おお鈴、その水着似合ってて可愛いじゃんか」

「か、可愛い！」

やたらと笑顔になって嬉しがる鈴。よし、俺の返事は間違っていないようだ。前買い物行った時葵がこういう場合は可愛いとか言うのが男の嗜みとか言ってたし。

そしてその後も

「どうですか一夏さん、わたくしのこの姿は！」

「どう一夏、前も見せたけど…似合ってる？」

「一、一夏！わ、笑いたければ笑え！」

と水着の感想を聞いてきたセシリア、シャル、ラウラに

「おお、似合ってて可愛いぜ！」

と答えていった。まあ実際に似合ってて可愛いし嘘は言っていない。しかしラウラの水着姿は普段と違った印象を受けて…いや本当に可愛いと思えた。ツインテールがまた良い感じに映えてる。しかしラ

ウラに感想言つた辺りで鈴が

「ねえ一夏。あんたまさか取りあえず似合つてるとか可愛いとか言えばいいと思つて無い？」

と目を座らせて俺に聞いてきた。

「バ、バ力違う！本当に似合つてるし可愛いと思つたからそう言つてるんだよ！」

「ふゝん」

まだ疑いの目を向ける鈴。いやまあ…そう言えば大丈夫だと思つてたのは事実だけだな。あ、鈴の話聞いてラウラ達も俺にそんな目を向けている。

「何をしてるんだお前らは？」

「皆仲良く遊んでますか」

俺が皆から不審な視線にさらされてる時、千冬姉と山田先生が俺達の前に現れた。あ、千冬姉あの水着ちゃんと着てる。…うん、弟の俺から見ても凄く似合つてる。いや弟じゃなかったらマジでヤバい位千冬姉の水着姿は…綺麗だ。うゝん、千冬姉胸大きいなこうして見ると。しかも形良いし。山田先生もビキニの水着を着てるんだけど、俺の視線は千冬姉に注がれてしまう。

「…何を無言でじつと見てるんだ貴様」

「ゲハッ！」

若干顔が赤くなつた千冬姉に俺は頭を叩かれた。うん確かにちょっと見過ぎてた。しかし白でなくやっぱ黒のビキニが似合うと思つた俺の直感はずしかった。

「はい一夏。ずばり織斑先生の水着姿の感想は？」

「凄く似合ってて綺麗だ」

鈴が横から俺に聞いてきて、俺は無意識に答えた。

「へへ、あたし達は可愛いだけど織斑先生の感想は綺麗なんだ」と言って俺を睨む鈴。いやちよつと待て！

「いや鈴！それは深読みすぎだ！大体千、いや織斑先生は可愛いより綺麗の方が的確だろ！」

「うむ、確かに教官は綺麗だ。しかし……」

「普通姉にそこまではつきり言いますかしら？」

「ていうか一夏完全に見惚れてたよね。僕達と比べて明らかに反応違ったし」

うわ、なんか千冬姉の感想で皆の不満がいきなり爆発しやがった。

「いやよかったですね織斑先生。織斑君から綺麗とか言われて」「ふん、別にどうでもいい」「照れなくてもいいじゃありませんか」「山田先生、ここで生徒達に砂浜での格闘術を披露しましょう。相手をお願いします」「ま。待つてください織斑先生！今は少ない休憩を満喫しましょう！」

なんか千冬姉と山田先生が言いあってるが取りあえず無視。まあその後は「まあ一夏はシスコンだし」というかなり不名誉な理由で皆が勝手に納得した。……いやまあここで下手に反論したらまたややこしくなるから黙ったけどさ。

その後ビーチバレー等して一通り遊んだ後、お腹が空いたので海の家で何か食べる事にした。セシリア達は勿論、千冬姉と山田先生も一緒に俺達と食べる事となった。

「さて、海の家で不味いラーメンとやらを食べるとするか」

「ラウラ、わかってて不味い物食べるの？」

「しかしそれが日本の風物詩らしいからな」

「もしかして葵さん出鱈目を言ってるのでは？山田先生、本当なの？」

「え、え〜とまあ確かに青崎さんの言ってる事は間違っでは無いんですが〜」

「どう言えいいのか迷ってる山田先生。うん、確かに間違っではないからややこしいんだよなあ。」

「ところで織斑、篠ノ乃はどうした。いつもお前達と一緒にいるのに姿が見えないが？」

「いや俺も知らないんです。先に行ったはずなんですが。…ここに来る前に東さんに会いまして箒を探してましたから…東さんから逃げてるかもしれません」

「東が？あいつもここに來てるのか。なるほど、納得した」

「え、もっつてどういう」

と千冬姉と話してたら海の家の前で話題の人物の箒が息を荒くし

て膝に手をついていた。：どうやら束さんから逃げ切ったようだな。しかし箒の奴この糞熱いなかパーカーなんか着てる。

「あ、箒どうしたのこんなに息荒くして。てかさっきから姿見えなかったけど何処行つてわけ？」

「はあはあ、鈴、いや少し悪魔から逃げていた」
疲労困憊って顔で答える箒。いや悪魔はないだろ。

「なにがあつたのかはわかりませんがかなりお疲れのようですね。箒さん、ちょうどわたくし達もこの海の家で食事をとりますから一緒にどうですか。休憩いたしましょう」

「うむ、一緒に不味いラーメンを食べようではないか」

「：ラウラ、やけにラーメンにこだわるね」

「あ、ああそうさせてもらう。い、いやその前に」
と言つて俺の前に立つ箒。顔を赤くしてもじもじし、

「あゝそ、その」
と言いながらパーカーに手をかけるもまた手を放したりする。何がしたいんだ？

「あゝもうじれったいわね！」
と言つて鈴は箒が着ていたパーカーを強引に剥ぎ取った。

「くら鈴！」

「一夏に水着の感想ききたいんでしょ。まあどうせ一夏はあたし達

と同じ事言っただろうけどね！」

鈴によってパーカーを取られ、その下に隠された水着はって、え？

「あ、あれ箒、その水着は…」

「ど、どうだ一夏！私の水着姿は！」

顔を真っ赤にして聞いてくる箒。白のビキニで機能性重視の作り。その水着は…そう先日水着を買いに行った時、千冬姉が黒の水着以外で候補に持ってきたあの水着だった。そしてそれは…あの日思い浮かべた通り箒に、いや想像以上に似合っていた。しかし箒も千冬姉同様、胸デカイな。そしてその白い水着は、箒の体に本当に合っていて…うわヤバイ。なんかすごく気恥かしい。

「どうなんだ一夏？」

もはや耳まで真っ赤にして上目遣いで俺に聞いてくる箒。輝く太陽の下その日差しにさらされたその姿に

「ああ、まあなんだ。綺麗だな」
と思わず言ってしまった。

「き、綺麗だと…」

俺の言葉を聞いてもはやゆでダコのようになった箒。あ、両膝が地面についた。

「だ、大丈夫か箒？」

「キレイキレイキレイキレイキレイキレイ」

なんかうわ言のようにキレイを繰り返す箒。おいおい大丈夫か？ん、何やら背中から殺気がする。恐る恐る振り向いたら…鬼が四人いました。

「ふ~~~~ん、僕達は可愛いけど箒だけ綺麗なんだ」

「一夏さん、この違いを明確に答えて貰えませんか？」

「ねえ、一夏ついでにさっきの態度の違いも教えて貰おうかしら」

「私以外の女に私以上の賛辞を送るとはな。嫁失格だな」

「うわなんか凄い怒ってるし！あ、千冬姉そんな呆れ顔しないで助けてくれよ。」

「知らん。ガキ共の色恋沙汰なぞ興味も無い」

「ひでえ。や、山田先生助けて！」

「織斑君、頑張ってください」

「いや何ですかその極上の笑顔は！面白がってますよね絶対！」

「さてと、一夏。懺悔の時間は終わった？」

「こうして俺は鈴達に生き埋めにされる事となった。」

「今一夏はラウラ達にスイカ割りの刑に処されている。理由は一夏が私だけ水着姿を見て綺麗と言ったかららしい。それを聞いて私は頬が緩むのが止まらなくなる。そうかそうか一夏、私だけ特別に綺麗」

麗と言ったのか。こ、これはあれか！私は他の皆よりも一夏に対しリードしてると言う事なのか！

「ずいぶん嬉しそうだな篠ノ乃」

と、私の水着を見ながら千冬さんが私に言ってきた。ええ、物凄く嬉しいです。って千冬さん、何故私を睨んでるのですか？いや、これは…私の水着を睨んでいる？

「ところで篠ノ乃。その水着ずいぶん似合ってるな。良いセンスをしている」

「いえ、これはその実は今日学園を出発する前に葵に呼ばれまして、その時渡されたんです。なんでも一夏にこれ着て見せたら好感度上がる事間違いないとかあいつが言いまして。しかし、そのどうやら本当だったようで葵に感謝してます」

「そうか青崎が…」

そう言って千冬さんは溜息をついた。え、何故？

「いやそうか、なら青崎に礼を言っとくんだな」

と言って千冬さんは山田先生と一緒に海の家に入っていく。そして一夏達の方を見てみると

「……待て………！」

「誰がまつか……！」

どうやらISを展開して生き埋めから脱出した一夏をセシリア達が追いかけてるようだ。長くなりそうだし私も千冬さんと同様に海の家に入る事にしよう。

あやうく殺されそうになったりもしたが、まあなんとか落ち着いた鈴、シャル、セシリア、ラウラから半殺しにまけてもらい、ボロボロになったがその後は皆で海の家で食事をし、午後も皆で楽しく遊んで楽しい時間を過ごした。ちなみに

「葵の奴噓を言いおつて！凄く美味しいではないかこのラーメンは！」

「うん、確かに美味しいね。不味いと覚悟してただけに吃驚だよ」

「いえわたくしは不味いですわよ…」

とセシリアを除き俺も鈴も箒もラーメンは美味しいと絶賛した。…まあこれをここ以外で食べたなら食えたもんじゃないんだけどな。

まあ初日の自由時間、葵がいないのは残念だったが皆と一緒に良い思い出を俺は作る事が出来た。

「ふうん、よかったね楽しそうな思い出が出来て。私は目が覚めたらもう沈んでいく夕陽しか見れなかったけど」

「いやそれはお前が」

「いゝもんいゝもんどゝせねえ」

時間も過ぎ、今俺達は大宴会場で夕食を食べている。葵も風邪が完全に治ったとのことなので、俺達と一緒に夕食を食べている。

「しかし目が覚めた後束さんがくれた薬を飲んでみたけど、怖い位一瞬にして完治したわ。起きた当初はまだ体だるかったのに。さすが天才としかいいようがないわ」

「全くだ。束さんに感謝しないとな」

「ああ……。どうして私はもつと早く目が覚めなかったのだろ……。せめて昼にでも一回起きて薬を飲んでれば……」

「まあだからしかたないだろ」

「う~~~~」

さっきからずっとこんな調子で嘆いている葵。気持ちはわかるがな。そしてその気持ちを紛らわせようとさっきから恐ろしく食べまくっている。病み上がりだったのに元気なこった。

「まあ元気だしなよ葵。海ならまた夏休みにでも皆と一緒にいこうよ」

可哀想に思ったのか、シャルが葵を元気づけている。

「そうですね、葵さん、夏休みは今日以上に皆と遊びましょう」とセシリアも同調。俺もそうだから皆と遊ぼうぜと励ました。そのかいもあって葵も次第に元気を取り戻し、

「ええ、そうですね！次回リベンジすることにする！」
と笑顔で夏休みになったら遊びにいくと決意した。

「ああ、ところで一夏」

「なんだよ」

なにやらニヤニヤした顔で俺に聞いてくる葵。どうやら本当に調子を取り戻してきたなこいつ。

「箒の水着姿はどうだったかな。凄かったでしょ？」

「そっぴゃあれはお前の仕業だったな。ああ、凄かったよ。あやうく殺されかける位な」

「は？それは箒に悩殺されかけたってこと？」

「違う…まあまた今度話すよ」

「そっ」

といってまた食事を再開する葵。勝手に刺身を追加注文したりしてるけどいいのか？

「そっぴゃあ箒が着てた水着、もしかしてお前あの時千冬姉と二人だけで行ってたけど、その時買ったのか？」

「ピンポーン」

「しかし何で箒に？それにもしかして、今日お前が着る予定だった水着って」

と俺が最後まで言い終わる前に、葵は人差し指を唇に当て、笑顔で言った。

「それは秘密です」

臨海学校（初日自由時間）（後書き）

アニメの千冬姉水着シーン、あれは弟としてヤバいだと。

そして一夏は巨乳好きなイメージがある。いや私の妄想ですが。

臨海学校（初日夜）

風邪が全快した葵と夕食を食べた後、俺は千冬姉の命令で葵を俺と千冬姉の部屋まで連れて行った。千冬姉から大事な話があると葵に伝えたら急に顔つきが変わり、「わかった」と堅い声をして俺と一緒にについてきた。何か心当たりがあるのか？と聞いたら「ええ、私は代表候補生だから…」と意味深な台詞を神妙な顔と声で言うものだから、どれだけ重要な用があるのかと思っただが：

スパンスパンスパン

「~~~~~！」

部屋に入り千冬姉に合った葵は、問答無用で連続して出席簿で頭をどつかれていた。痛みで部屋をゴロゴロする葵を千冬姉は冷めた目で見ている。…ああ、そういう今朝風邪が治ったら葵に出席簿が待ってるって言ってたっけ。

「……お、織斑先生。何故病み上がりの私にこのようなひどい仕打ちを。てかこれはもう立派な体罰でPTAとかが見たらヤバいのは？」

頭をおさえかなり涙目で抗議する葵。ああ、こいつ熱のせいで覚えてないな。

「青崎、お前今朝私の前であれだけ注意してきたのに男口調で話をしただろ。これはその罰だ。ちなみにお前を罰するために叩くのは政府公認だ。お前が日本の代表候補生でいるうちは口調に気を付ける」

千冬姉の言葉を聞き、葵はがつくりとその場に崩れ落ち、「別に

熱でうなされてる時位いゝじゃない」といじけ出した。

「ところで織斑先生、葵に大事な用があるって言ってたけどまさかこれの事ですか？」

「ああ」

え、本当にこれだけ？

「ええ！！これだけのために私呼ばれたんですか！」

あ、葵が一番驚いてる。まあここに来る前あれだけシリアスな空気だしてたからな。蓋を開けたらただの愛の鞭だったし。再度いじけだした葵を無視し、千冬姉は急に布団を敷き、その上にうつ伏せになった。

「さてと私はもう明日の朝まで仕事は無い。見周りも今日は山田先生が担当だしな。だからそうだな、一時的に教師の肩書を降ろそう。今からは公私の私だ。だから一夏、久しぶりにマッサージしてくれ」
：千冬姉、何か言い訳くさいな。でもいいか。つまりそれほどマッサージして欲しいって事だし。

「わかったよ千冬姉、じゃあ始めるぞ」

「ああ頼む」

さてと、始めますか。おお、凝ってるなあ千冬姉。これは本気でやらないとなあ。

マッサージを始めて結構経ち、千冬姉の体も大分ほぐれてきて、ふいに葵の方を向いてみた。さすがにもういじけてはいなかったが、何故か扉の方をじっと見ている。そしてニヤツと笑うと

「一夏、織斑先生をやり終わったら、次は私をお願い」

と妙に大きな声で俺に言った後、布団を敷いてうつ伏せになった。何だ急に。まあ別にかまわんけど。

「一夏、私は充分満足した。だから次は葵の相手をしてやれ」
なんだ千冬姉もニヤニヤして。じゃあ次は葵の番だな。

「そっぴや一夏にやってもらうのって初めてかな。いつも千冬さんにやってるってのは聞いてたけど」

「そっぴや、今日が初めてだな。葵、千冬姉で鍛えられた俺の腕前で気持ちよくしてやるよ」

俺がそう言うとは何か口に手を当て笑いを必死で耐える葵。何でだ？千冬姉の方を向くと葵と似たような状況になってる。だから何で？

「じゃあ一夏、……初めてだから優しくしてね」

……いや葵、何でそんなに艶っぽい声出してるんだよ。

「わかった、なるべく痛くないようにする」

……何故かさらに笑いを必死になって堪えようとする葵と千冬姉。ああ、もういいや、さっさと始めよう。

うーん、葵も結構凝ってるな。やっぱ毎日体をあれだけ動かしてるからなあ。ここは温泉宿だから後でゆっくり入った方がいいかもな。

と、意識を逸らさなければならぬほど、……葵の体の感触はヤバい！何この柔らかさ！千冬姉とはまた違うこの感触。はっきり言って気持ち良い。いかん、俺の方がハマりそうだな。

「あ、そ、そこ！う、うん！」

顔を赤くして気持ちよさそうに悶える葵。……いや何この声？いく

らなんでもさ。

「はあ〜〜」

恍惚した表情で俺のマッサージを堪能しているなあ。…しかし葵、わざとそんな顔してるだろ。うう、千冬姉がなんかニヤニヤしながら俺を見てるし。

「あ、あゝ気持ち良い。今日初めてやってもらったけどこんなに気持ち良いならもっと早く言えばよかった」

「そ、そうか。ならまたやって欲しければ言えよ。やってやるから」

「そう、じゃあ毎晩やつてもらおっかな」

「いや毎晩は勘弁してくれ」

「甲斐性ないなあ」

いやこれは甲斐性とかの問題では無いだろ。と思ったら急に葵は起き上った。

「おいま」

だ終わってないぞと言い終わる前に千冬姉が俺の口を塞いだ。そして喋るなというジェスチャーをした後、足音を殺して扉に向かう千冬姉と葵。そして千冬姉は強く扉を叩くと「叩叩叩叩へぶ！」「シリア、シャル、ラウラが顔を真っ赤にして床にうずくまっていた。」

「はあゝい、皆さん！楽しい妄想はできたあ？」

葵がそう言つと、全員涙目で

「「「「~~~~~!!!!!!」」」」
と声にならない叫びをした。

「紛らわしいのよ全く!」

「まあ常識的に考えたらここでそんなことするのはあり得えないけどさ……」

何故か部屋を盗み聞きしてた五人に、俺が千冬姉と葵にマッサージをしていたと伝えたら、皆千冬姉と葵に怨みが籠った目で見つめている。皆そんなにマッサージが羨ましいのか?

その後はマッサージをしたため汗をかいた俺は温泉に入りに行った。葵も一緒に行こうとしたが、千冬姉に止められ部屋に残された。

あゝもう、なんなのよこの状況!さっきは千冬さんと葵が共謀してたあたし達に変な想像させて身を悶えさせたと思ったら、今は一夏は温泉に行つて目の前に千冬さんがあたし達の前に座つて見てるし……しっかしさっきのはあたし達の勘違いで本当によかったわ。正直聞き耳立てたあたし達の絶望感は半端じゃなかったもの。いやだって、千冬さんがいるのに止めもせず葵にやってやれとか言う

から。つまりそれって千冬さん公認の仲ってことじゃ…と思っちゃうじゃない。葵だけなら全員ISに乗って部屋破壊しただろうけど。

「お前達に少し聞きたい事がある」

一夏が部屋を出た後だんまりなあたし達を一瞥した後、千冬さんはあたし達に向かって言った。

「今一夏がいないから聞きたいが、…お前達はあいつのどこがいいんだ？」

あ、やっぱり姉として気になるんだそうなの。その後、箒、あたし、セシリア、シャルロット、ラウラと千冬さんはあたし達に理由を聞き、あたし達も答えて言った。千冬さんはそれを聞いて頷いたり茶化したりしたりして、

「では葵、お前の理由を聞きたい」

最後に葵に質問した。え、でも葵は違うんじゃないの？

「私ですか？そうですね…色々ありますがやっぱり一緒に居て楽しいことですね」

「そうか、一緒にいると楽しいか」

とニヤリとする千冬さん。え、ちょっと待って！

「葵、お前一夏の事が好きだったのか！？」

あ、箒に先越された。

「そりゃ好きだけど。友達として。…いや誤解させるような事してそれは謝るけど、一夏に対する好きは英語で言うlike。決してloveじゃないから」

何を当たり前な事という顔して言う葵。…なんだやっぱりそう

か。箒も他の皆も葵の言葉を聞いて納得してるわね。千冬さんは…あれなんか顔険しくない？

その後は千冬さんから一夏はやらんと宣言され、一夏が欲しければ奪い取れとか焚きつけられて解散した。

それにしても……やるか馬鹿とは。一夏もシスコンだけど、千冬さんも充分ブラコンよね…。

風呂からあがって部屋に戻ると、葵達の姿は無く千冬姉だけだった。

「あれ千冬姉、葵達は？」

「もう夜も遅いだろ。明日は早いからもう帰らせた」
ふふんと相槌打って俺は急須にお湯を入れ、自分の分と千冬姉の分を作った。

「はい、千冬姉」

「うむ、悪いな」

ふふ、風呂上がりには飲む熱いお茶つてのもまた美味い。

「なあ一夏」

と言って俺の前に座る千冬姉。その顔は真剣な表情をしている。

「ちょうどいい機会だからお前に訊きたい。一夏、お前は将来の事は考えてるか？」

「将来の事？」

「ああ、今お前は世界で唯一の男のIS乗りとしてここにいる。なら将来は私同様ISに関わって生きていくのか？それともISとは関係ない別の道を歩むのか？…もっともお前にその道を選ぶのは難しいがな。なにしろ世界で唯一のIS乗りの男なのだから」

「そうだなあ、考えた事無かったなあ。でも確かに千冬姉の言うとおり、俺は多分ISに関わる仕事を目指すと思うよ。ていうかそれ以外選択肢ないと思うし」

「そうか。ならもしお前が競技者としての道を歩むとした場合だが…止めておけ。現状では私は勧めない」

「え、なんで？」

「葵がいるからだ」

そういつて千冬姉はお茶を飲みほし、真剣な顔で俺に言った。

「一夏、一つ聞くんがお前は葵が来てから何度かISで勝負したな。勝率を言ってみろ」

「…全戦全敗。でもそれがなんの関係が」

「おおありだ馬鹿者。あいつは日本の代表候補生だぞ。そしてこのまま順当に行けば代表は確実だ。私が保証する。そうなるとお前はどうかなる？代表かけて戦ってもお前は負けるだけ。ちなみにお前の

コアは日本政府が保管している分だと言う事を忘れるな。他国に行こうもんなら問答無用で百式は没収される。で、お前は百式以外の機体に乗って鈴等の他国の候補生に勝てると思うのか？無理だろうが」

「う、そ、それはそうだけど…」。

「はつきり言おう。競技者の道を歩むなら、葵はお前にとって最大の障害として立ちはだかる。同じ近接格闘特化型だが、実力に差がありすぎだ。しかしお前は葵がもっとも得意とする土俵で戦い勝たなければその道は開かれない」

千冬姉の言葉を聞き、うつむく俺。今まで考えた事は無かったが、こうしてはつきり言われると…

「強くなれ」

「え？」

「だから強くなれ。今はお前と葵との差は恐ろしく離れてるが、死ぬほど努力しろ。目指すなら血反吐吐いてでも強くなれ」

「でも千冬姉さつき勧めないって…」

「現状ならな。しかし、お前が本気で目指し実力をつけるなら止めはしない」

そう言っで微笑する千冬姉。

「ま、決めるのはお前だ。よく考えて結論をだせ。そしてさっき言った道を目指すなら…私も協力してやる。なに、全くの不可能って

わけじゃない。お前だって昔は葵より剣道強かっただろ」

…いやそれはもう6年も前の話じゃないか。

その後は、千冬姉の朝が早い事もあって寝る事にした。布団に横になりながら、俺は千冬姉に言われた将来の事について考えた。確かに今後葵に負けっぱなしというのは幼馴染抜きにしても悔しいが…別に今の俺は代表になってモンド・グロッソに出たいという気持ちはあまりない。むしろそれに出場しようとする葵を応援してやりたい位だ。おそらくこれは千冬姉の警告なんだろう。

もし、私を目指すなら今のままでは無理だ、もしそれを目指すなら死ぬほどの覚悟がいる、と。

俺は…何を目指すべきなんだろうか。

「ねえねえアオアオ、何で空手習ってたの？」

「私の父が世界大会優勝する程の格闘技の達人だったのよ。知ってるかな？青崎誠って名前だけど」

「あゝ知ってる！確か20年前世界格闘技大会で優勝した初の日本人でしょ！それ以外でも数々の大会で優勝した！」

「そ。で、その父からコミュニケーション代わりに空手を幼い頃から仕込まれたっ訳。…まあ理由もあってね」

「理由？なにそれ？」

「まあ隠してもいずればれるかもしれないから…まあ言っちゃおうかな。私の母ね、五歳の時病気で死んじゃったのよ。ってちよおと皆暗い顔しないで！大丈夫！もう大丈夫だからさ！ 悲しみは乗り越えてるから！で、話の続きだけどまあ格闘技一筋な父はどうやって息子と交流をかわせばいいのかわからなかったのよ」

「それで息子に空手を教えたっていうわけ？…なんていうか」

「でも私も元々体を動かすのは好きだったからね。それに空手に打ち込むことで母の悲しみも紛らわす事もできたし。父もその時が一番良い顔してたからその顔を見ると安心するし。ああそれから空手だけじゃないわよ。父は色々な格闘技覚えてたから空手以外にも古武術や中国拳法の技も一部教えて貰ったわね。…ただ毎日朝五時に起きて朝練されたけど、今は平気だけど昔はかなりしんどかったなあ…」

「そっぴや剣道もやってたよね、篠ノ乃さん家の道場で。何で空手やってたのに剣道も始めたの？」

「んゝそれは一夏が千冬さんの影響で剣道習い始めたから。その間一緒に遊べないから私も参加することにしたのよ。まあ門下生が千冬さんと一夏と揃しかいなかったから歓迎されたっけ」

「余計な事は言わなくていい」

「痛！」

「へーそうなんだ。じゃあじゃあ今はしののんが剣道一番強いけど、当時はどんなだった？」

「し、しののん！？いや当時は…最初は私が一番だったが、小学四年生になる頃は一夏が一番強く、その次に葵、…最後に私だ」

「えー、意外！織斑君強かったんだ！」

「昔はな。しかし今は…、全く情けない！」

「まあ落ち着きなさい箒。一夏にも事情があっただし」

「それはわかるが…」

「まあ鈴と遊び倒してたつても大きいかもね」

「やっぱり殺す！」

「まあまあ落ち着いて篠ノ乃さん。そういや青崎さんと篠ノ乃さん、よく屋上で他の専用機持ちの子達と一緒に弁当持って食べてるけど、料理上手いよね」

「まあね。さつきも言ったけど母が幼い頃に死んじゃったから。父は…家事がお世辞にも上手いとは言えなかったから私が必死になって覚えたし。一夏の家も似たようなもんだからお互い家事について一緒になって覚えていったわよ」

「へーそうなんだ。じゃあしののんも、その時一緒になって覚え

たんだ」

「え、あ、そ、そうだ!」

「…まあそういうことにしてあげる」

「黙れ葵」

「ふん、じゃあさ…」

千冬さんから早く寝ろと言われ葵と一緒に部屋に戻ったが、布仏さん達からもう延々と質問をされ続けている私と葵。

…頼む、もう勘弁してくれ。明日起きられるだろうか？

臨海学校（初日夜）（後書き）

八巻出ないからわからないけど、順当に行けば簪が日本代表になるんだろか？

しかしなんだかんだで一夏も男で唯一のIS乗りつてことで国籍関係無く特別枠でモンド・グロッセ出場しそうな気がする。男達の最後の希望として

番外編 久しぶりのカルテット（前書き）

いきなりですがこれは第四話よろしくと第五話日常の間にあった話です。

番外編 久しぶりのカルテット

それは葵が登校して数日経った時の出来事だった。

「ねえ一夏、明後日用事ある？」

食堂で夕食をいつものメンバーで食べていたら、葵はそう俺に話しかけた。

「明後日？別に無いが？」

「よかった。次に鈴、明後日用事ある？」

「あたし？いや無いけど。どうしたのよ急に？」

「いや用事ないなら明後日私と出掛けないと思って」

俺と鈴を交互に見て言う葵。いや別に構わないけど、どうして俺と鈴だけなんだ？

「何故一夏と鈴だけ誘う葵？」

誘われなかったのが気に入らないのか、不満げな顔をして言う篤。そして名前を呼ばれなかったセシリア達も篤同様面白くないって顔をしている。

「ごめん。中学の時の友達に会いに行こうと思ってるから」

中学の時の友達？ああ、もしかして

「葵、もしかして弾に会いに行こうってわけか？」

「当たり前。あいつにはまだ私がどうなったかとか説明してないし。」

話しておこうと思って。…一応聞くけど、一夏も鈴も弾にもう私の事メールや電話で話したりした？」

「いんや。やっぱこういうのは直接本人から話すべきと思ったからな」

「あたしも。というか私そういや日本に来てから弾に会いに行っていないわね。ちょうどいい機会かも」

その言葉に俺も葵も呆れた。いやお前、日本にいた時はあんなだけ一緒に遊んだだろうが。顔ぐらい見せに行けよ。まあ俺も弾に会いに行く時誘わなかったのも悪いけどさ。

「…いや鈴。あんたそれはちょっと薄情じゃないの？まあいいや。久しぶりに四人揃って遊びに行きますか」

「そうだな。しかし今の葵見たら弾吃驚するだろうな」

「最悪信じないかもしれないわね」

「…だから二人も一緒に来てほしいのよ。まあ顔はそこまで変わって無いと思うけどやっぱり体つきは激変してるしね」

…確かにな。二年前よりも少し身長伸び髪も伸び、体つきも完全に女になってるしな。

その後行く事が決定した俺達は昔話に花を咲かせた。そんな俺達を箒達は羨ましそうに眺めていた。

それから二日後、俺達は弾に会いに五反田家に向かっている。一応弾に行く事は伝えてるため、家で待っているだろう。ちなみに弾には俺と鈴が行く事しか伝えていない。葵から黙っているよう頼ま

れたからだ。理由は

「いや吃驚させようと思って」

…らしい。まあいいけどさ。

「ところで葵、あんた何でIS学園の制服着てるの？」

鈴が葵の服装を見て呆れている。俺も鈴も私服姿だが、葵だけ何故か制服を着ている。

「いや女の子らしい服がこれしかないから。この格好の方が現状を説明するのにむいてるかなと思って」

「制服が一番女らしい格好って…。まあ確かに女子を象徴する服装だけど、葵あんたも女として生きてくって決めてるんでしょ。ならそれらしい私服もちゃんと用意しなさいよ。なんならあたしが選んであげるわよ？」

「まあ確かにそう決めたのは私だしね。じゃあ今度お願いしようかな」

「まかせなさい。似合うの選んであげる」

葵と鈴が楽しそうに会話してるのを見ながら、なんか不思議な感じがする俺。最近じゃ千冬姉に矯正されてか、部屋で俺と二人の時位しか昔の口調で話さないもんなあ。いや鈴達も千冬姉に賛同し、葵が昔の口調で喋ったら注意するようにしてるせいもあるけど。にしてもこの二人、二年前よりも仲が良くなってるな。やはり同性になったからか？

そんなやり取りをしながら、俺達はその後五反田家に到着した。

店に入ると中には蔵さんと弾と蘭とお客さんが数人いた。蔵さんは中華鍋を振るい何か作っている。蘭は客に料理を運んでおり、弾は厨房で皿洗いしている。俺の姿を見た蘭は眼を見開き

「一、一夏さん！え、どうしたんですか急に！」

と酷く驚きながら俺に話しかけてきた。…いやその前に料理を客に運べよ。

「おお一夏、早かったな。そして鈴！久しぶりだな！元気そうだなによりだ。で、ところで…お前達と一緒にいる」

厨房から弾が出て来た。そして俺と鈴の後ろにいる葵が誰か聞こうとする前に

「会いたかったわ！弾！」

と葵がいきなり弾に抱きついた。は？

「え、い、いや…ええ！」

急に葵に抱きつかれ、顔を真っ赤にしてうろたえる弾。…まあ弾からすればいきなり見知らぬ美少女から抱きつかれてるからな。

「え、えくと、誰君？」

顔を真っ赤にしながら葵に尋ねる弾。その瞬間葵は泣きそうな顔をしながら弾から一歩離れた。

「そ、そんな酷い！昔あんなに一緒だったのに！私の事忘れたの！」
と言って両手で顔を覆い泣く真似をする葵。多分顔をよく見られたら気付かれるかもと思って隠してるんだなあきつと。

「え、昔一緒だった？え〜っと」

「一緒にお風呂にも入った仲なのに忘れるなんて…」

その台詞を言った瞬間、空気が確かに軋んだ。…まあ確かに一緒に銭湯に行ったから嘘は言っていないが。

「え、えええ！風呂！一緒に！」

さらにうるたえる弾。葵はさらに何か言おうとしたが

「この糞ガキがー！お前、一体この子に何をしたー！」

「グハアッ！」

敵さんに思いつきり弾は殴られた。蘭も追い打ちで「この女の敵！」と叫びながら弾を蹴っている。

「…いや葵、さすがにもうばらしなさいよ」

鈴が葵に呆れた声で言っている。さすがに弾が不憫に思えて来たんだろう。

「そうね。さすがにやりすぎちゃったかな。あのーすみません！実は私は…」

その後葵は弾達に正体をバラした。弾は葵の名前を聞き、事情があつて女になったと話したら「ハア！？」と叫んだが、葵の顔をよく見て「…マジか？」と俺達に訊いてきた。俺と鈴が頷くと「嘘だ

ろ…」と茫然となったが、葵が中学ん時の、しかも俺と弾しか知らない事を幾つか話したら

「…なんてこった。こいつ本当に葵だ」

とようやく信じた。ちなみに巖さんと蘭はなかなか信じなかった。だが俺と鈴、そして納得した弾が保障することようやく信じて貰えた。巖さんは

「長生きしてみるもんだな…」

と呟き、蘭は

「…狡い」

と葵の胸を凝視しながら呟いた。ちなみに鈴もうんうんと頷いていた。

その後俺達は積もる話を弾の部屋ですることにした。

「しっかし二年前急に消えたと思ったら、女になって現れるとはなあ。さすがに予想外すぎる。そしてさっきはよくも俺を騙しやがったな」

ジト目をして葵を睨む弾。まあそのせいで巖さんに殴られるし蘭に蹴られるはされたもんな。

「わりーわりー。いやあお前の反応は面白かった」

と笑う葵。真っ赤になってうるたえてたもんな弾。

「うつせー！つーか二年前はよくも黙ってどっか行きやがったな。心配したんだぞ俺は」

「…ああ、それについては本当にごめん。謝るよ」

「いや別にもういいよ。お前が元気だったってことはわかったから」

「すまん」

さすがにしおらしくなる葵。そんな葵を弾はしばし見て唸った。

「…お前本当に女の子になったな。しかも極上の。いや中学いた時から女が男の制服着てると勘違いしてた奴が多かったが、それでも男と認識されてたが」

と言つて葵の胸を凝視する弾。恥ずかしくなったのか葵は腕で胸を隠した。

「スケベ。敵さんにセクハラされたと言つぞ」

「いやそれは勘弁してくれ！…ていうか葵、余計なお世話かもしれないが話し方替えた方がいいぞ。今の姿で昔みたいに話したら違和感ありすぎる」

「あ、弾もやっぱそう思う。あたしもそう思うのよね。いやさつきまでは弾に信じて貰うため昔の振る舞いさせてたけど、もうそれもいいわよね。葵、昔の口調はもう禁止！わかった！」

いいわねと葵に念を押す鈴。それを聞いてえぐって顔をする葵だが、鈴に睨まれ渋々納得する。

「はいはいわかったわよ。鈴は厳しいなあ」

「これもあんたのためでしょ」

やいやい言う二人を眺める俺と弾。なんか鈴が葵の姉さんみたい

に見えるな。

「なあ一夏、なんか鈴と葵、昔よりも仲が良くなってる気がするな。いや前から良かったけどさらにな」

「やつはお前もそう思うか。やつは同性になったのが大きいんだろな」

「じゃあお前とは疎遠になったのか？」

「いやそれはないと俺は思うぞ。昔同様お互い馬鹿やったりするし。同室だけど気まずく感じる事は無いしな」

「はあ！お前葵と一緒に部屋なのか？」

かなり吃驚した顔で俺を凝視する弾。

「ああそうだが、何を驚いてるんだお前は？」

「いやだって今は葵は女だろ！なのに同室って。ってそっぴやその前に一夏の幼馴染とも一カ月位一緒に生活してたとか言ってたな。」

…何考えてるんだIS学園は？」

実は筈の後にまた別の女の子と同室になったんだが、ややこしくなるだけだから言うのは止めておこう。

「ま、葵が女になったからといって、お前がそれを理由で疎遠になるわけないか。中学の時初めてお前たち二人に会ったが、一目見て

『ああ、この二人仲が良いな』と思ったしな。

それだけあいつが急にいなくなった時のお前の反応は…正直痛々しかった。だからまたお前ら二人が出会えて良かったと俺は心底思うぜ」

「ああ、俺もだ」

…あの時は本当に絶望した。あの頃は千冬姉も家にいなかったから余計寂しかった。一週間は飯もろくに喉を通さない日々が続いた。鈴と弾が俺を励ましてくれなかったら俺は本当に潰れてたかもしれない。

「鈴も帰ってきてよかったよ。お前結構強がつてたけど、鈴が中国に帰った後しばらくは俺の家に入り浸りだったもんな。鈴はきちんと別れを告げたからそこまで大きなダメージ無かったようだが、それでもかなり堪えてたなお前」

「…そりゃな。箒を始めこうも親しくなった奴が俺の前から消えていったら落ち込まない方が変だろ。まあ鈴はまだ箒や葵と違い、別れをきちんと言えたのはせめてもの救いだっただけ」

いや一時期は本気で俺と仲良くなる奴は俺の前から消えるんだと思ひ詰めたりしたな。…家族の千冬姉だってあんまり家に顔出さないせいで。しかし、

「弾、さっきから俺が寂しい寂しい言ってたがお前だってそうだったじゃねーか。葵ん時も顔真つ赤にして怒ってたし鈴がいなくなったら後は妙に中華料理食べるの多くなっただなあそっぴゃ」

ニヤニヤしながら俺が言つと、

「いやそれはそうだがお前よりはマシ」

しれつと言いやがった。…うん否定できないかなこりゃ。二人の付き合いの長さに考えて。

と、俺と弾が話をしていたら

「へーそんなに寂しかったんだ。…ごめんね一夏悲しい思いさせて」

「あたしの存在の重さがよくわかったようね。これからは大事にしないさい」

いつの間にか俺達の会話を聞いていた葵と鈴が、俺の頭に手を置いて「よしよし」と言いながら撫でまわしてきた。ってやめるころ。ガキか俺は！

「バカやってないでそろそろ始めようぜ」

と言つて弾は俺達にそう言つた後押入れを開け何かを探し始めた。

「ん、まさか弾」

葵が言い終わる前に弾は押入れから物を取り出し、俺達の前にそれをどんと置いた。

「このメンツが揃つてるんだ。ならやる事は一つだろ」
と言つて俺達の前に置いた麻雀卓を見て笑つた。

「ふうん、IS戦じゃお前らの中じゃ一番葵が強いのか」

「今はね。あたしがそのうち一番強くなるわよ」

「ふうん、まあ頑張れよ。……つと、取りあえずピンフ親だから千五百点」

タン
タン

「って一夏に鈴。さつきから話聞いてれば葵って専用機持ってないんだろ。なのに負けるって…」

「うつさいわね！でも一夏は全敗だけど、あたしは葵に勝ったことはあるわよ」

「いや鈴、それは打鉄の整備が甘かったのか私が酷使しすぎたのかはわからないけど、鈴を殴りとばしたら殴った右手が砕けたせいでしょ。そのせいでシールドエネルギーは減るし片手だけになったから最終的に鈴にやられたけど、結構僅差まで追いつめたけど」

「うつさいわね！勝ちに勝ちよ！」

「…まあお前がそう思うんならそれでいいけどな」

「全敗のお前もそういう要因がなければ勝てないだろうがな。……つと、リーチな」

「ま、私もラウラには勝てないんだけどね」

「へーお前にも勝てない奴がいるんだな。ロン。メンタンピン一発三色イーペーコードライチ！二万四千点な」

タン タン

「そついやお前らはIS学園では麻雀やんねえの？」

「IS学園じゃやらないわね。他に出来る子知らないし三人打ちじやつまらないし」

「麻雀やる暇があればISの訓練やれと千冬さんに言われそうだし」

「てーか俺達だけで遊んでたら篤達が不機嫌になりそうだしなあ」

「ふーん、色々事情あるんだな。ま、だから弱くなってるのか。チートイドラドラ六千四百点」

「ってまたお前かよ！」

タン タン

「ま、俺は爺さん達とたまに打ったりしてるからなあ。お前達に勝つても不思議じゃねーよ」

「うっせー！今に見てろよ」

「ま、あたしもようやく勘が取り戻してきたからね。そろそろ反撃しようかなあ」

「しかしこうやって四人で卓を囲んでると懐かしいわね」

「…そうだな。中一の頃こうやって一夏の家で夢中になって遊んでたら気が付いたら朝だったってことがあったよな」

「…あの時は大変だったわ。連絡もせず朝帰りしたからあたしの両親が相当心配してたわね。しばらくは夕方五時になったら帰りなさいと言われたし」

「俺の家の電話がちょうどその時壊れてたからな。当時皆携帯持っ

てなかったし鈴と弾と葵の親達マジで心配してたな」

「私も心配した親から思いっきり殴られたっけ。あれは痛かったなあ。でもあれがきっかけで全員携帯を親からもたされるようになったのよね」

「俺も爺さんから殴られるししばらく店の手伝いを強制されたな。つたく一夏め！自分の家だからおとがめなしとかずるいよなあ」

「全くそうよね。ってところでツモ！メンチンタンインリャンペーコー。三倍満二万四千」

「げえ何時の間に！葵このやろっ…」

タン タン

「そっついえば何で葵だけ専用機ないんだ？」

「話はあつたけどコアの数の都合上と一夏の専用機の方が優先されたからねえ」

「だから葵、それで俺を責めるなよ…って来た！リー即ツモオモテ3ウラ3オヤバイ！おら二万四千よこせ」

「ちっ、一夏も調子づいてきたか」

タン タン

「でもさあ、前葵の話聞いてたらあんたが訓練してた所に日本の代

表候補生いたのよね。あんたそいつより強かったらしいじゃん。その子の専用機取り上げてあんたにあげればいいのに」

「そう簡単な話じゃないでしょ。専用機ってワンオフアビリティ開発の意味も強いし。…色々複雑な理由あるのよ、ってリーチ」

「なんか聞く限りその専用機持つてる代表候補生ってIS学園にいないようだな。どこにいるんだ？とリーチな」

「う、葵も弾もリーチとはね…。でもそついやそつね。確か4組にいる子が日本の代表候補生とか言ってたけどその子の機体は完成してないとかいってたっけ」

「あ、鈴。更識さんは違うから。更識さんは別の施設で訓練してたから私も面識無いわね」

「じゃあどこ行っただそいつ？あ、リーチ」

「……さあ。私も知らないかな。鈴！さあトリプルリーチになっただけどうする？」

「…なんか話逸らさせたいみたいね。まあ深くは追求しないであげるわ。ふ、ふ、ふ。あんた達みんな甘いのよ！これでもくらいなさい！」

タン

「「「う、国土無双！……！」」」

その後麻雀をやり続けていたら日もかなり暮れ、「いつまでやってやがるガキども！」という敵さんの一喝の下お開きとなった。ちなみに最終的に鈴がトップで次に弾、三位が俺でドベは葵。まあ元々麻雀の強さは昔から鈴が一番強く、俺と弾と葵はほぼ同じ位だったから妥当な順番だろう。これがTVゲームだと俺と弾がツートップで、次に葵、鈴は万年最下位となる。だからあんまりTVゲームはしないようにしている。負け続けると鈴が暴れるからなあ…。一階に降りたら敵さんが俺達の夕食を作ってくれていた。トンカツコロツケ野菜炒め肉じゃがハンバーグ唐揚げとかなりの豪勢な夕食がそこにあつた。

「ま、お前達の再会記念だ。たらふく食べ。うちの孫もお前達とまた会えて喜んでるからな」

「「「ありがとうございます！」「」」

「あ、金はもらうからな」

「「「え？」「」」

「嘘だ。ま、しっかり食べ」

夕食は蘭も一緒になってたらふく頂いた。このときばかりは敵さんも食事中の会話は見逃してくれたので、和気あいあいと皆で夕食を楽しんだ。ちなみにテーブルに座る時、俺の隣をじーつと鈴と蘭が睨んでたが溜息ついた葵がさっさと俺の横に座ったら二人とも何故か葵を睨んでたな。なんでだろう？弾はそんな二人を見て笑い二人から殴られたりした。

夕食を食べたらもう外は暗く、IS学園に戻る時間となった。

「さてと、俺達ももう帰るか。これ以上は千冬姉に怒られる」

「そうね、名残惜しいけど」

「あ、ちよつと待って！」

俺と鈴が帰る準備をし始めたら、葵はポケットからデジカメを取り出した。

「帰る前に、皆で写真撮らない？この四人で撮った写真ってもう二年前の春のやつしかないし」

と言つてにっこり笑う葵。

「へーいいな。そういや葵がいなくなつてからそんなに写真撮つてないよな俺等。鈴もいなくなつてからは一枚も無いし。ま、一夏と男二人でツーショットなんてキモいだけだしな」

「そりゃお互い様だろうが」

「いいわね。葵、あたしにも写真頂戴ね」

「もちろん、全員あげるに決まつてるじゃん！」

「あ、それなら私が撮つてあげますよ」

「ありがとう。じゃあお願いね蘭

蘭にカメラを渡し、横に並ぶ俺達。右から鈴、俺、葵、弾の順番で並んでいる。鈴は俺の左手に腕を絡め、俺と弾と葵は互いに肩を

組む構図にしている。

「じゃあ撮りますよ！はいチーズ！」

カシャっという音がして無事撮影終了。撮り終わっても俺に腕を組んでいる鈴に蘭が睨んでいる。

「じゃあ次はわしが撮ってやるから蘭、お前も入れ」

蘭を交えもう一枚撮る事にした。並びは俺の両隣りに蘭と鈴。二人とも俺の腕を組んでいる。それを見て葵は弾の右手を左手で絡めている。「お、おい葵。胸当たってる！」「当ててるのよ」と言いながら顔を赤くしてる弾と笑ってる葵。ああ、完全に遊ばれてるな。

「…なんか色々思う所がある光景になつとるな。まあいい。一夏！弾達見てないで前向け！」

厳さんに一喝され前を向いた瞬間、カシャと写真が撮られた。

二枚の写真の画像を眺めながら

「なんかこれ二枚目だけ見たら私と弾が付き合ってるみたいに見えるわね」

「ん？なんだ、じゃあ俺と付き合うか？二年前ならともかく、今の
お前なら大歓迎だぜ」

「いや、私は戦って自分より弱い男は嫌かなあ」

「そっか、なら残念」

ちつとも残念そうに見えないで言う弾。まあ本気じゃないだろうしな。しかし、お前より強い男って条件厳しすぎる。お前に勝てる奴って同年代じゃ物凄く限られるぞ。

「じゃあ弾、次来た時にこの写真持つてくるから」

「おお、楽しみにしてるぜ」

「あ、いやこれデジカメだからメールで送ればいいか。携帯にでも送っとくわね」

「いや、次来た時直接持つてきてくれ！…いや俺の家写真を加工する機械ないからさ。ちゃんとプリントアウトしてくれたら助かる！」
妙に直接持つてきてくれとこだわる弾。別にお前機械音痴じゃないだろうに。そんな弾を見ていた鈴が

「大丈夫よ。またあたし達はあると遊びに来るわよ」

と妙に優しい声で言った。その言葉を聞いて赤くなる弾。…ああ、なるほどな。葵を見たら葵も納得したようで、

「大丈夫よ。また私も弾の家に遊びに来るから。そんな小さいまた来る理由を作らなくともね」

葵の言葉にさらに赤くする弾。……そっか。俺達は今はIS学園で三人一緒に過ごしてるけど、弾は違うもんなあ。…こいつが一番別れが寂しいんだろなあ…。

「ま、じゃあこの写真は私が弾の言う通りにするとしますか。弾、今日は麻雀しかしなかったけど今度は外に遊びに行きたいわね」

「あたしはカラオケ行きたい！」

「お前マイク独占するからなあ…」

「下手糞な一夏が歌うよりかはマシでしょ！」

と、俺達はまた集まる時は何しようかと一通り話した後、五反田家を後にした。

その後、俺の家の机に飾っている写真立てが一つ増えた。それらの写真は、共通して四人とも最高の笑顔をして写っている。

番外編 久しぶりのカルテット（後書き）

すみません急に番外編始めました。

情けない理由ですが単純に今後の展開に悩んだからです。後の福音戦のために専用機をご登場させようと思ってましたが、なんとなく無い展開でもいいかなと思ったり。これを書いたのはまあ悩んでたせいですね。まだ悩んでるんですけど。

まあ次回も頑張って更新できるようにします。

臨海学校（二日目 専用機前編）

「よし、呼ばれたメンバーは全員集合してるな」

臨海学校二日目、俺とまあいつものメンバーの葵、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラは一般生徒達とは隔離された海辺に集合している。この場に先生も千冬姉だけしかない。

この日は生徒全員でIS装備の各種試験運用データ取りが行われる。無論専用機持ちにはその名の通り国から専用の装備や秘密性の高い装備が送られてくる。そのため一般生徒とは隔離して性能チェックするのはわかるんだけど……なんで俺と箒はここにいるんだろ？ 葵は代表候補生だからなにかしら特別な装備の試験を任されるんだろううけど。しかしそれにしては…

「織斑先生、何故わたくし達だけこのような場所に呼ばれてますの？ 本日はIS装備の試験運用データ取りが目的のはずでは？ それに本国から送られてきた装備もここにはありませんし」

セシリアが当然の疑問を千冬姉に言った。そう、この場には試験用のIS装備が見当たらない。なにやら黒い横長の小さなコンテナが一つあるが、そこにここにいる全員分あるとは思えないし。「予定変更だ。その前にお前達にやって欲しい事がある。それはこの場で専用機を持っていない」

と千冬姉が説明を始めた時、

「ちーちゃ~~~~~ん！」

とどこからか声が聞こえてくる。声が聞こえた方に顔を向けると、物凄い勢いで束さんが走りながらこちらに向かっている。そしてそのまま束さんは千冬姉に近づき、

「会いたかったよちーちゃん！」

と千冬姉に抱きつこうとした。が、千冬姉はそれを拒否。見事なアイアンクローで束さんの抱きつきを阻止した。…なんかヤバい位指が顔に食い込んでるんですけど。

「暑苦しくなるから止める束」

「ちええ〜。ちーちゃんのいけず〜」

と言つてするりとアイアンクローから逃げた束さん。…やっぱこの人もただ者じゃないなあ。そして束さんは箒の方を向いた。

「やあ！今度こそ会えたね箒ちゃん！てか昨日は酷いよ箒ちゃん！私から逃げるなんて！」

「え、いやまあその…、なんというかつい」

「つい！ついで逃げてたの箒ちゃん！ってまあいいや。こうして直に会うのは久しぶりだね。いやあしばらく見ない内に成長したねうんうん。特におっぱいが」

「ふん！」

あ、箒が束さんを木刀で殴った。

「怒りますよ姉さん」

「殴ってから言っただけ！しかも木刀で〜！酷いよ箒ちゃん〜！」

と涙流しながら抗議する束さん。う〜ん、相変わらず束さんにたいして態度が堅いなあ箒。いや遠慮無くどついてるからそれなりに心を許せる相手と思ってるのかな？

「おい束、こいつらに自己紹介しろ」

と言つて束さんと面識が無い鈴達を指差す千冬姉。まあ鈴達も束さんの名を知らないわけないからもうわかつてるけどね。皆驚愕の目で束さんを見つめている。

「えゝ、めんどくさいなあ。別に知つて欲しくないけどちゝちゃん
の頼みなら仕方ないか。はい、私が天才の束さんだよ。終わり」
とほとんど棒読みで言つて鈴達とはそっぽ向く束さん。…こつちはこつちで相変わらずだな。束さんの視線は今度は俺と葵をとらえた。

「やつほーいつくん！一日振りだね！そしてあーちゃん、久しぶり！
うんうん昔から思つてたよあーちゃんが女の子だったら絶対美人
になると！いや私の予想は正しかったね。おっぱいも大きいし」
葵の胸を凝視しながら言つ束さん。…束さんおっぱいネタ好きなんですか？

「束さんお、お久しぶりです。この姿になつて直接会つのは初めて
でしたね。そして昨日は薬ありがとうございました。おかげでこの
通り元気になりました」

さすがに箒みたいに殴つたりしないが、微妙に照れているのか胸を隠す葵。

「いやいやお礼なんていらさないよ」

「でも」

「いいからいいから」

「…なんか態度があからさまに箒、一夏、葵と僕達とでは違うね」
束さんと葵を見ながら少し落ち込んだ声で言うシャル。セシリア

とラウラ、鈴も同感と言った感じで頷く。…千冬姉、箒、俺、葵以外の人間には冷たいと言うか興味無しだもんな束さん。

「…一つ忠告するけど、束さんに話しかけない方がいいぞ。俺達以外の人が話しかけても絶対友好的な態度取らないから」

「…わかったわ」

心得えましたという感じで鈴達は頷いた。

「…いい加減話を進めるぞ。束、例の物は」

と千冬姉が束さんに言うと、束さんはふっふっふと笑うと大空を指差して言った。

「ちーちゃん！それはばつちりだよ！さあさあご覧あれ！」

そう束さんが宣言した瞬間、

ドゴーン！

と上空からなにやら縦に細長いひし形の形をした金属の塊が俺達の目の前に落ちて来た。そしてその外装が捲れていき、中に一体の赤いISが入っていた。

「本邦初公開！これぞ箒ちゃんの専用機にして第四世代型IS、その名も紅椿！その能力は現行の全てのISを上回る束さんお手製の一品だよ！」

と言つて大きな胸を張る束さん。その言葉を聞き、全員驚愕した。

「第四世代、だと…」

「各国でようやく第三世代の運用が始まってきたといえますのに…」

「それを飛び越えて第四世代…」

茫然とした感じで紅椿を眺めるラウラ、セシリア、鈴。シャルは実家を思い出してるのか…いやふれるのはよそう。

「じゃあさつそくフィッティングとパーソナライズ始めようか箒ちゃん！お姉ちゃんがやってあげるからあっという間に終わるよ！」

「ええ、お願いします姉さん」

と言つて、箒は紅椿に近づいて行つた。

今姉さんは私の為に紅椿の調整を行つてくれている。姉さんの調整速度は素人の私が見てもわかる位…早い。学園の整備士が束になつてかかつて姉さんには敵わないだろう。いやそれだけでなく、科学という分野において姉さんに勝てる人等存在しないだろう。そんな姉さんを昔私は…

「うんうん箒ちゃん剣道の腕上がったね！筋肉のバランスを見てたらわかるよ。いや～お姉ちゃん嬉しいな」

「……」

姉さんが話しかけて来たが、…つい無視してしまった。しかし姉

さんは気を悪くすること無く笑顔で調整を続けている。いや私だつてよくない態度だつてわかつている。姉さんは私の為にこの機体を用意してくれた事を。妹からの初めての電話がこの機体が欲しいからかけたつていうのに、姉さんは物凄く喜んで、この機体を私の為に作つていてくれた。姉さんが肉親だからよくしてくれるというわけでは無い事も知つている。両親と姉さんの関係を見てたらそれはわかる。ただ姉さんは、私だからこの機体を用意してくれた。それは私にだつて充分わかつている。でも、それでも、まだ私は姉さんのことは…。

姉さんの方を向くと、一夏と葵とで何か話している。昔から姉さんは私と千冬さんとあの二人にしか笑顔を向けない。

一夏。私が専用機を欲しいと思つたのは一夏が原因だ。男として唯一のIS乗りの一夏は専用機が与えられている。初めは私がよく知りもしないISの知識を絞り出し操縦を教えていたが…最近ではもう私と一夏の間では差はなくなつてきている。そして一夏は何故か代表選にタッグトーナメントでもイレギュラーな事件に巻き込まれている。そしてその度に思つた。私に専用機があれば…一夏と一緒に戦えるのにと。

葵。一夏と同じ六年振りに再会した私の幼馴染。かつては少年だったが今では少女となつている。…まあ見た目は昔から少女みたいだったからあまり違和感ない。そして葵の登場で…今まで私が思つていた常識は覆されてしまった。葵が来る前まではセシリア達と模擬戦で戦つて負けても、訓練機の私が勝てる訳が無いと思つていた。しかし葵は私と同じ訓練機に乗つてるのに、…セシリアに鈴、シャルに勝つている。ラウラには負けてるが、それでもごく稀にラウラに勝利することもある。初めて葵と模擬戦をした時の事は、私は今でも忘れない。

「はあ！」

「甘い！」

私の気迫を込めた一撃を、葵は少し後退しただけでかわした。そして私に刀を振り下ろす葵。その一撃を私はかろうじて防いだ。私は葵の刀を上へ押し上げると、すかさず葵の腹を横薙ぎに斬った。しかし葵は急上昇してそれを回避。上へ飛んでいく葵を追い、私も上昇。葵を追って上昇していたらいきなり葵は急旋回し、急降下しながら私に向かってきた。その速度に私は対応出来ず、上から葵に肩を突かれ私はその衝撃で地面に叩きつけられた。急いで体を起こすと葵は空の上におり、私が起きるのを待っていた。その姿を見て私は見下されてると思った。すぐにまた上昇し、葵に向かった。空中で静止している葵に斬りかかる。しかし、

「はー！」

と私が斬りかかる前に葵は私の手首を刀で打ち据えた。衝撃で体が泳ぐ私に、葵は刀を振りかざし、そして容赦無く私の頭めがけて振り下ろした。衝撃で下に落下する私を葵は追いかけて…その後私はほとんど葵に対し攻撃を与えることも出来ず敗北した。

「箒がまだISに乗りなれて無いからとしかいいようが無いけど」
模擬戦終了後、葵に何故こうまで歯が立たなかったのか聞いてみたら、そう返された。

「生身の剣の勝負なら箒が私よりも強い。それは私も認める。でもISに乗ったら私が箒を圧倒するのはもう単純な話、箒がISを乗りこなせてないから。まあこれは一夏にも言っただけ、箒はただISを車の操縦みたいに動かして私に襲っているだけ。私はISを手足の延長として、生身と同じ感覚で動かしている。生身での精密な

動きを箒はまだISで再現出来て無い。だから私に負ける」

葵の言葉を聞いても、納得できるようで出来ない。私だって自分の今まで体で覚えた剣の腕前を披露してきたのだ。それが全く再現出来て無いなんて。

「まあでも気にする事は無いと思うよ。だって箒はまだ本格的にISに乗り始めて三カ月も経ってないし。私は一年と半年以上ISに乗って激しい特訓してきたんだから。これで箒が私に勝ったら私凄くへこむよ。いや本気で。それに箒の腕前は一組じゃ専用機持つてる一夏達除けば一番上手いよ」

例えばセシリア達を除いて一番と言われても、あまり嬉しくはない。私が欲しい實力はそのセシリア達のレベルなのだから。しかし、葵の言う練習の差が大きいのは認めざるをえない。セシリアに鈴、シヤルロットにラウラ、葵も私以上に厳しい特訓を受けてたのだろう。ならそれに追いつくためには…

「はい終了」。さすが私超早い。終わったよ。箒ちゃん！ん、おや？箒ちゃん！終わったよ！

「え、はっはい！」

どうやら考えこんでる内に姉さんの作業は終了していたらしい。姉さんの言葉を聞いて我に返った私は腕や足を動かしてみる。うん、正常に作動している。

「じゃあ箒ちゃん、試運転開始しよつか。準備はいいかな」

「はい、大丈夫です」

では、この機体、紅椿の性能を試させてもらう。

「凄いな箒の専用機……」

「あの機動性、第三世代の中を探してもそうそうないわね」

箒が束さんに言われた通りに試運転をやっていたが、その性能に俺達はただ驚いた。セシリア、鈴、シャル、ラウラは喰いつくように箒の専用機、紅椿を見ている。特にラウラが真剣な眼差しで眺めており、おそらくどう戦えばいいかをもうシミュレーションしてるのかもしれない。

「しかし空裂だっけ？さっき箒がミサイルの群れを切り裂いたやつは？あれなんかゲームにあった横一文字や空破斬みたいでカッコいいなあ」

「ああ、それはわかる。しかし俺は雨月の方がいいなあ。雪片式型にああいった性能追加して欲しい」

俺と葵は紅椿の武器について語っている。いや俺の百式も零落白

夜以外に何か欲しいと思うし。

「何言ってる織斑。貴様が雨月持っても当てる事が出来ないという意味が無いだろうが」

バツサリと俺の願望を切り捨てる千冬姉。：いやそうかもしれないないけどさあ

「あゝあ、しかしこれで専用機持っていないのは私だけかあ。寂しいなあ」

と葵が溜息交じりに愚痴った瞬間、束さんが口を開いた。

「あ、それは大丈夫だよあーちゃん！ちゃんとあーちゃんの方も持ってきたから」

「ええ！」

束さんの言葉に驚愕の声を上げる葵。え、束さん葵の分も専用機持ってきてるの？

「ふふふ、さあご覧あれ！」

束さんが叫ぶと再び束さんの前に上空から細長いひし形の金属の塊が落ちて来た。それはまたさっきの紅椿同様外装がめくれ、中に一体のISが入っていた。白と黒、二色の色分けがわれているその機体を見て、葵は再度驚いている。束さんはそんな葵を見ながら胸をはって機体を紹介した。

「ふっふっふ。どう驚いたあーちゃん！これがあーちゃんがいた出雲技研が作るうとしていたあーちゃんの専用機、スサノオだよ！」

臨海学校（二日目 専用機前編）（後書き）

次回で葵が遅れて登校する羽目になった理由がでます。

臨海学校（二日目 専用機中編）（前書き）

久しぶりに更新。ちょっと内容が酷いけどこんな設定にした私が悪い。

臨海学校（二日目 専用機中編）

「スサノオ…」

束さんが持ってきた葵専用機スサノオを、葵は茫然とした感じで眺めている。しかし葵ちよつと驚きすぎじゃないか？そりゃ束さんが葵の分の専用機持ってきた事は俺も驚いたけど、お前さつきから幽霊でも見たかのような驚愕な顔してスサノオを見てるし。

「へーこれが葵の専用機なんだ？…うー訓練機でも負けてるのに専用機とか鬼に金棒じゃない…」

「まあ今まで持ってた方がおかしかったんですけど…しかし何で篠ノ乃博士が葵さんの専用機を持ってきたのでしょうか？」

「筈と同様に篠ノ乃博士から葵へのプレゼントじゃないかな？」

「しかし先程出雲技研がどうのとか言って無かったか？ふむこの機体も紅椿同様第四世代機なのだろうか？」

「ん？出雲技研…たしかどこかで聞いたような気が…」

鈴、セシリア、シャル、ラウラも葵の専用機スサノオに注目している。筈も葵の専用機が気になりこつちに降りてスサノオを見ている。はて？そっぴや俺もどっかで聞いたような気がするな出雲技研って…。

「よしそれじゃあーちゃん！フィッティングとパーソナライズ始めるからこつち来てー」

「え」

束さんに呼び掛けられてようやく葵は我に返った。そして束さんの方を向いて、

「束さん、ど、どうしてこの機体がここに存在してあるのですか…」と震える声で束さんに尋ねた。お、おいどうした葵！何で震えてるんだ？しかもさっきからどんどん顔色が悪くなってるぞ！

「私が頼んで束に作らせたからだ。いや正確には出雲技研の所長はじめ研究員たちが私に懇願してきたからだな。私を通し束にお前に専用機を、スサノオを頼みますと」

葵の質問に、束さんでなく千冬姉が代わりに答えた。え、出雲技研の人達が？何で？

「出雲所長達が…で、でもたしかこの機体の研究データはあの時全て消えたって…」

「あははは、そこはこの天才の束さんにかかれば全く問題無し。だって私世界中のIS研究所のデータを24時間ハッキングしてたら。研究データは私のラボの中にあつたからそれを忠実に再現したよ。まあ出雲技研の人達が私に懇願する理由わかるなあ。私なら作るのはお茶の子さいさいだけど、今の出雲技研の皆がこの機体をもう一度作り直すとなると…二年位かかるかもしれないしね。そんなに待ってたら日本代表を目指すあーちゃんの足枷になっちゃう」

…常時世界中を監視してるのかよ束さん。てかそれが当たり前前の事のように出来るって…。それにしてもどうしてその出雲技研の人達は千冬姉を通して束さんに頼むような事を？いや束さんの言からすると作るとなると二年かかるとか言ってるし…いやそもそも研究データが消滅？何があつたんだ？

そしてさっきから驚いてるのが束さんがその出雲技研の人達の要請を受け入れてる事だ。さっきの話し方にしても、出雲技研の人達

に対しては東さんは嫌悪感が全く無かった。あの箒や千冬姉、俺と葵以外はどうでもいいと思っていた東さんが。

「そうだ思い出したぞ！」

「うわっ！ちよつと何よ箒いきなり大声出して！びっくりしたじゃない！」

「ああすまない鈴。いやさつきから姉さんや織斑先生が言っていた出雲技研なんだが…一夏は覚えてないか？今年の三月の島根にあるIS研究所が実験の失敗による大火災で多数の負傷者が出た事件を」

「あ！思いだした！そうそうかなり大きなニュースとして流れてたよな。たしか重傷者が39名も出たっていう…ってちよつと待て！葵！お前もしかしてそこにいたのか！」

「…ええ。私がISの訓練をしたのは今一夏が言ってた出雲技研。そして…その事件が起きた原因は私にある…」

俺の問いに沈痛な表情を浮かべて答える葵。っていや待て。葵のせいで事件が起きた？どういうことだ？あゝくそ！わからないことだらけだ。

「ちよと葵！一体あんたに何が起きたのよ！」

「もしやお前が登校するのが遅れたってのはその事件が原因なのか？」

鈴と箒が葵に詰め寄っている。その顔は…葵に何が起きていたのかを本当に心配している表情だ。

「えっと。いやそれは」

「もう話した方が良くないんじゃないかなあーちゃん」
東さんが葵に微笑しながらそう言ってきた。

「私も同感だ。つらい出来事なのはわかるが……少なくともここに
いる連中には話してもいいと私は思う。特に一夏には言った方がいい。
い。こいつは知らなかったら後で絶対後悔する」

俺が後悔する？葵の方を見ると目を逸らされた。

「なあ葵、以前お前に登校遅れた理由を聞いた時、その時お前はま
だ言いたくないと言ってたけど……今も駄目なのか？そして俺も関係
あるのなら教えてくれ！頼む！」

千冬姉と俺の言葉を聞いて考え込む葵。セシリアにシャルにラウ
ラも葵をじつと見つめている。葵は東さん、千冬姉、そして篤、セ
シリア、鈴、シャル、ラウラ、最後に俺をじつと見つめて、はっ
とため息をついた

「そうだね。この専用機を前にしてもう事情話さないつてのもアレ
だし……。というかさつきから意味深な発言連発しすぎたし。それに
……皆なら話してもいいかな」

そして葵は、今まで話さなかった遅れた理由を語り出した。

「じゃあ長くなるけど順を追って説明するから。以前話したように
私は初めての模擬戦で代表候補生を一撃で気絶させた後、政府関係
者が協議した結果代表候補生に選ばれた。そして選ばれた後私は島

根にある出雲技研というIS研究所に案内され、そこで代表候補生としてISの訓練を受けることとなった。その出雲技研だけど、私以外にも4人IS訓練を受けている同学年と年下の少女達がいたのよ。三人は代表候補生候補という名の通り代表候補生予備軍。訓練次第で候補生になれるかもしれない者達。もう一人が……私が殴り倒した代表候補生。別の施設行けよと心底思ってたわね。この四人と私は一緒になってISの訓練を受けてたわけだけど、はっきり言って私と四人の仲は最悪だったわね。欠片も友情なんて芽生えなかった」

思いつきり嫌悪感むき出しの表情で葵はそう言った。

「まあ三人からすれば私はいきなり候補生になったから気に入らなかったんでしょうね。候補生の方は初めてIS乗った私に一撃で気絶させられたからもあるけど、まあこの四人とも完全なる女尊男卑主義者だったってのもあるわね。ようは私が元男だったから今は女でも彼女達の認識としては男。で、今の風潮で男は女からはどんな存在か言わなくてもわかるわよね」

「なんか凄く偏見持った連中だったんだな。心は知らんが葵は体は本当に女なのに……」

「まあ今の社会だとIS乗りは特別な存在だからね。ある種の特権階級的な意識もあつたのよ。そんな連中に私は少女漫画みたいなじめを散々受けたわね。無視、ハブ、私物を壊される、ISスーツはハサミで刻まれる、専用ロッカーは私の落書きオンパレード、大勢の前で誹謗中傷等々。そしてそれだけやっても誰も咎めなかったわね。出雲技研にいた女性職員の8割は彼女達の味方だったし。残りの2割は飛び火を恐れて見て見ぬ振り」

「ちよつと葵！その連中の居場所吐きなさい！私が衝撃砲で吹き飛

ばしてやるわ！」

「俺も我慢出来ねえな！最低だろその連中！」

「よってたかつて一人を蹴るとは…最低の連中だな！」

「僕だったら耐えきれないだろうな、そんな環境…」

「私も本国でライバルから似たような事をされましたわね…、でも葵さんよりは酷くなかったのは確かですわね」

「私も教官が来る前は…」

「まあ怒るのはまだ話を最後まで聞いてからにして。この4人、ここまで私をいじめた理由だけど、さっき言ったの他にもあるのよ。ま、これは自慢になっちゃうんだけど私は出雲技研に入った初日で候補生候補の三人を模擬戦で下し、それ以降ずっと負け無し。候補生もだけど2ヶ月間位は向こうが専用機もあるし優勢だったけど、半年もすれば私もIS操縦にかなり慣れて打鉄で五分五分、8か月後には私の勝率は相手は専用機、私は打鉄でも完全に100%となった。出雲技研に来て8ヶ月目以降、候補生との戦いで私は最後まで負け無しとなった。これが彼女達のプライドを完膚なきまでに碎いたんでしょね。ロッカーの落書きとかもうバキの真似？と思っただわ。どんなにいじめても肝心のIS戦で私に負けまくった彼女達を私は完全に見下してたわね。だから彼女達のいじめもその8か月経った以降は虚しい抵抗みたいに思えた」

…なるほど、確かにどんだけやっても越えられない壁か。その四人が悔しく葵を憎む理由はわかったが全く同情はしないけどな。

「それに出雲技研で私に味方が全くいなかったわけじゃないわよ。

出雲技研にいた男性職員全員に私はよくしてもらったというか可愛がられた。女になってまだ半年だったからどっちかというとなんか話がかけやすいみたいなのがよかったからね。まあ私としては普通に話しかけただけなんだと、そしたら向こうがめっちゃくちゃ感激したのよ。酷いものになると『いつもお世話になります』みたいなこと言っただけで感涙した人もいたわね」

「はあ？なんだそりゃ？」

何でその程度で？

「いやさ、さっきの4人の振る舞いとそれが容認されてるのを考えればわかると思うけど、出雲技研において男性の地位は物凄く小さかった。女性職員、そしてさっきの4人に男性職員は奴隷みたいな扱いだったのよ。そんな中元男とはいえ年頃の女の子が笑顔で接してくるだけで向こうは相当嬉しかったみたいで……」

まあ葵は見た目は相当の美少女だしな。性格も良いしそんな女の子が笑顔で接してきたら……あ、なんか納得。

「私もその四人と女性職員からは嫌われてるせいもあって、皆に懐いた。喜ぶと思って暇な時は菓子を作って振る舞ったり、バレンタインの時も手作りチョコ配ったりした。そしたら娘や孫のように扱われ、『是非将来孫の嫁に！』『息子の嫁に！』『俺の嫁になつて！』と言われるようになった。そしてその言葉が本気なのか私に遊び相手が欲しいだろうと思ってなのか、両方だろうけど休日は職員さん達の息子や孫を呼び、私と一緒に遊ぶようにしてくれた。彼等と遊ぶのはかなり心の支えになったわね。あそこで男友達がいなかったら私心荒んだだろうなあ」

と言っただけで笑顔を浮かべる葵。

「なあ葵、人間関係はわかったがいつになったら話の核心に触れる

んだ？」

「まあまあ焦らない焦らない。この人間関係がこの後重要になるんだから」

「…そうか」

ん？なんかいらつくなあ？何でだろうな？

「ま、私がいた出雲技研はそんな環境下だったわけ。そして今年の1月、IS学園入学が決まると同時に出雲技研が長年開発していた第三世代型ISの運用目処が立ち、そのパイロットとして私が選ばれた。開発陣は全員男性職員で、私のためになんとかして入学前に完成させようと皆急ピッチで開発を急いだわね。私も専用機を貰えると思うとワクワクし、完成が待ち遠しかった。しかし、翌月の2月、一夏の登場である変化が起きてしまった」

「俺の？まさか葵が前言っていた俺の専用機を作るためコアが無くなったと言ってたが、そのことか？」

「そう。でもあれは一夏のせいじゃない。一夏が望んだ事じゃないのはわかるし、日本政府としても唯一の男のIS乗りに専用機を与えようと思うのは至極当然の事。ただそれに私の分のコアを使われたのは事実。じゃあ足りないコアをどう補充すればいい？簡単なことと既存の機体から抜き取ればいい。で、それに選ばれた機体ってのが…出雲技研にいた、私が殴り倒して気絶させた代表候補生の機体って訳。私との対戦履歴があまりにも酷いからというのもあったけど、第二世代機でしかも第二形態になったのにワンオフアビリティを発動出来なかったから見切りをつけたのよ。一応代表候補生のままだけど事実上のリストラかなあれは」

「うわ：自業自得とは言えキツイな」
「だけど聞く限り同情はしないけどな。」

「泣いて彼女は嫌がったけど、国の決定事項だから変更は無し。彼女の専用機の解体は決定されたけど、最後に彼女は条件を出して懇願した。『なら最後にその第三世代型ISを』

この機体で勝負させて欲しい！』と。役人さん渋ったけど性能テストを試すにはいいかもと思いそれを受け入れてしまった…」

はくつと溜息をつき思いつきり暗い顔をする葵。なんだ、なんか物凄く嫌な予感がしてきた…」

「そんなわけで一時的に訓練機の、私がよく使用していた打鉄を解体しコアを取り出してそれを元に作成。そして今年3月、出雲技研の第三世代型ISスサノオ完成。名前は候補としてアマテラスもあり、女性神だからそっちが良いのでは？という意見もあったけど、やっぱ戦の神の方が縁起が良いとのことでスサノオと任命されたわ」

「そして私がスサノオのフィッティングとパーソナライズを行つてるとき、彼女が現れた。皆驚いたけど、自分が対戦する機体を見に来たんだろうと思いきになかった。そして彼女は私の方をじつと見つめ、笑みを浮かべると……ISを展開し、グレネードランチャーを構え私に発射した」

「…………ええ！！！！」…………

「セッティング途中だったけど、その動きを見た私はとっさに近くにいた職員を突き飛ばした。その直後に私に着弾、大爆発が起きたわ。途中だったからエネルギーもまだ十分補給しておらず、その一撃だけで私のエネルギーはほぼ消滅。私がまだ生きてるとわかった彼女は再びグレネードを構え私に撃とうとしたけど、横から銃撃を

受けグレネードは破壊された。そちらを向くと職員がIS用アサルトライフルを数人で構え彼女に浴びせていた。そして私を見て『逃げろ！』と叫んだ。そしてその直後彼女は別の武器を取り出した。発砲。爆発が起き彼等は吹き飛んだ。私は彼らに駆け寄ろうとしたが上手く動かない。調整が済んでないため動きがかなり悪かった。そんな私を彼女は笑って銃を構え、撃った。避けきれぬわけもなく直撃をくらい、スサノオの機体は砕け私は血まみれとなり気絶した」

「目が覚めたら私の上に血まみれの所長さんが覆いかぶさっていたわ。意識はなく背中から大量の血を流していた。大声で呼びかけても返事は無かった。そして次に周りをよく見てみたら、燃え盛る研究所で、私の周りに横たわる職員さん達だった。皆血を流しどう見ても重傷だった。意識がある職員さんがうわ言のように『守るんだ… 葵を』と言ってたわ。それを聞いて、皆私を守るため戦ってくれたんだとわかった。朦朧とする意識の中、血が噴き出す腹を押さえ立ち上がった私の前に、彼女は現れた。皆の必死の抵抗を受け、武器を全て失い絶対防御のエネルギーを消費してまで機体を動かしているのか、左腕の装甲は無くなっていた。それでも私を殺そうと機体を動かして私の前に立ち塞がった。『あんたが！あんたが悪いんだ！あんたが全て！』と泣きながら片腕を振り上げ私に襲ってきた。必死になって避けたけど、全身から出血してるせいで意識がなくなりかけ、壁際に追い詰められた。その時死を覚悟し、走馬灯が頭を駆け巡ったけど、その中に打開策があった」

…え、その状況下で？

「チャンスは一回こっきり。壁に追い詰めた彼女は会心の笑みで腕を振り上げた。その瞬間私は死力を振り絞って彼女との間合いを詰め、左手を彼女の腹にそえた。そしてその左手の上に私は右手を思いつき叩いた。そして…彼女は血を吐いて気絶した。それを見届けた私は気が緩み再び気絶した」

「いやちよつと待ってくれ！なんかもう想像以上の事が起こりすぎてもう何から聞いたらいいのかわからなくなってきたが、とりあえず最後の、どうやって相手を倒したんだよ！」

「だから左手を」

「いやだから何でそんなんで」

「昔、父から鎧を着た武者を素手で倒す方法を習ったからね。絶対防御が発動しなくなったISなら条件は同じかなと思って。というかそれしか方法が無かったのよ。なんせ彼女のIS、全身甲冑装甲タイプ。フルアーマータイプだから。一夏の白式や打鉄見たいに顔面露出とかしてたらそこを殴って倒してるわよ。2年以上前に教えて貰い、その時は合格点貰えたけどあの極限条件下で再び成功するかは賭けだったけど」

「その後だけど私は全治1カ月の重傷。スサノオに守られてたからこの程度で済んだけど、…私を守るために戦い庇った職員さん達は全治3カ月から半年の重傷だったわね。死者が出なかったのが本当に奇跡だった。私は全治1カ月とはいえ、体調を完全に取り戻すにはさらに2か月かかった。別の施設でリハビリをようやく全て終えた私の前に千、いや織斑先生が現れてIS学園に連れて行ってもらった。そしてあの時のホームルームに繋がるというわけ」

そしてはつと葵は再度溜息をついた。俺は箒や鈴達を見てみた。皆葵の話を聞き茫然となっている。そりゃそうだ、こんな展開予想外すぎる。葵に何があったのか知リたかったがまさかこれほどのことがあったとは。そして葵が真相を話すのを渋ったのがわかる。つまり…

「…俺がISに触れなければ、コアの数は足りてそんな事件は起きなかったんだな」

間接的とはいえ、俺が原因でそんな事件が…

「それは違っ一夏。それがなくても彼女と私との仲を考えると…似たような事は起きたかもしれない。だから言いたくなかったのよ。言ったら一夏は自分を責めると思ったから」

「織斑、青崎の言うとおりだ。結果的にそう思っても仕方ないがあくまで悪いのは暴走した小娘だ。お前は関係ない」

「でも！」

「少しは考える馬鹿者！お前がそうやっていじけることが青崎にとつて苦痛となってるのかわからんのか！」

千冬姉の言葉で俺はハツとなり、葵の方を見た。その葵の表情を見て…千冬姉の言葉の意味を理解した。

「で、織斑先生。そのバカをやらかした犯罪者はどうなったのですか？」

鈴が底冷えするような声で千冬姉に聞いた。目が物凄く冷たい。いや、箒にセシリア、シャルにラウラも同じ表情を浮かべている。

「さすがにこのようなことは表沙汰にはできんからな。代表候補生が嫉妬で殺人未遂、大量傷害、器物破損建物全壊、罪状を並べたら死刑は免れん。だがこのようなスキャンダルが世間に流せるわけがなかるう。そうなったら日本のIS地位が傾くのは避けられん。情報操作をし実験の暴走として処理させたが、あの小娘は極秘裏に監禁させた。20年は出れんだろうな」

「死刑にすればいいのよそんな奴！」

俺も同感だ！そんな奴は死んだ方が良く。更生なんて無理だろ絶対！

「一応まだ未成年だからな。多少の温情措置は取ってやった。ま、若い時をずっとせまい部屋で過ごすんだ。罰としては十分だろ」

青春の全てを独房で過ごすのか。それでも足りない気がするけどな。

「長々と話したけど、これが真相。私が遅れた訳も専用機を持ってなかったものね。」

…あゝなんかすっきりした。話したくない内容だったのに、皆に話したら気分がすっきりした。解放されたゝって気分かな」

「それはお前がずっと抱え込んでたからだろ。辛かったのなら私たちにもわけるとよかったんだ。…私たちは友達だろうが。辛いことがあるなら話して軽くすればいい」

「筈の言う通りだぜ。もう、一人で抱え込むなよ。そんな辛いことがあったとしても、俺達が忘れてやるからさ」

俺と筈の言葉を聞き、葵は首を縦に振り、

「ありがとう」

と言った。そしてその瞬間、

「あ、あれ？あれ？」

目から大粒の涙がこぼれていった。張り詰めたものが切れたのか、今まで我慢してたのが溢れたんだらう。涙を零す葵を眺め、気がつく

俺は葵を抱きしめていた。そして俺の胸に葵の顔を押し付けると、

葵は、

声を出して泣き始めた。

「…ねえちーちゃん。私はどのタイミングで再びあーちゃんにセッティングの話持ちかければいいかなあ。というか！これはヤバい光景かな。篝ちゃんピンチ？」

「さすがにもう少し待て。それに一夏も葵も束が考えてるような事は別に考えては無いだろう。…多分」

「…ちーちゃんも自信ないんだ」

「あの二人だと判断が難しいだが」

臨海学校（二日目 専用機中編）（後書き）

話が長くなりすぎたんでさらにわけました。

なんかもつつこみ所満載になってますが、説明不足の所を次話千冬姉が行います。

個人的にはやく福音出したいなあ。

臨海学校（二日目 専用機後編）（前書き）

また結構間が空いてしまった…

臨海学校（二日目 専用機後編）

「う、うわああっ！う、うう……」

俺の胸で葵は声をあげて泣いている。話してる時は平静を保ってたが、……やはり辛さを押し殺してたんだな。出雲技研で葵が受けた陰湿ないじめ、葵は平気みたいな言い方していたけどそんなはずがない。俺の想像を絶する悲しみがあつたはずなんだ。そしてその悲しみを和らげてくれた出雲技研の男性職員達も、候補生が暴走し葵を守るために傷ついて…。

でも、そんな出来事を俺に話したくなくて…。話したら俺が…。

ああ、くそ！なんだよ俺！

親友が一番辛かった時に何もしてなくて、しかも勝手に消えた事に怒ってばかりで…

葵是最悪の環境下でも負けずに前を向いて、真っ向から立ち向かってたつてのに…

そんな葵に俺はのんきに葵と再会出来たことをただ喜んでただけで…

再開後も葵は俺に気を使って真相は誤魔化して胸の内に秘めて…。

俺は、泣いている葵を強く抱きしめた。俺よりもずっと強い葵だが、こうして抱きしめると吃驚するほど儚く感じてしまう。そして俺はある事に気付いた。葵とは出会って10年近くになるが、

声を出して泣いたのをこれが初めて見たと言う事に。

その後葵が泣き止むまで嗚咽の声は続いた。

「ごめん、一夏」

ふきふき

「……いや氣にするな。この程度でお前の氣が楽になるならいくらでも許す」

「本当にごめん」

顔を真つ赤にしながら葵は、……涙と鼻水で汚れた俺の胸を束さんから貰ったハンカチで拭いている。いやかなりべったりついてたからな。泣き止み葵が顔を上げたら、俺の胸に葵の涙と鼻水がべつとりと付いていた。葵が大慌てで何か拭くもの探したら笑顔で束さんが葵にハンカチを手渡してくれた。

「もう落ち着いたか、青崎」

千冬姉がびつくりする位優しい顔して葵に尋ねた。

「はい、もう大丈夫です」

目は赤いが、しっかりした声で葵は返事した。うん、あの表情ならもう大丈夫かな。いつも様子を取り戻してきている。

「落ち着いたようですね、ねえ葵さん」

「すまないがオルコット、青崎に聞きたい事は沢山あるだろうが後にしてくれ。青崎、東、時間が押しているためもうスサノオのフィッティングとパーソナライズを始めてくれ。そして他のメンバーは私に付いてこい」

セシリアの台詞を遮って、千冬姉は東さんと葵にスサノオの調整を急がせた。セッティングを東さんにまかせ、千冬姉は移動し始めた。俺含めセシリア達も葵に聞きたい事がたくさんあったが、千冬姉が有無を言わさない目つきをしたので、渋々みんな移動をした。葵達が見えなくなる距離まで離れた所で千冬姉は立ち止った。

「まあこの辺で良いだろう。…お前達の気持もわかるが、今はそつとしいてやれ。代わりに私がある程度の疑問は聞いてやる」

確かに落ちついたとはいえ、葵の中でも気持ちの整理はまだ終わってないよな。あれだけ大泣きしたんだ、今はあれこれ聞かずそつとしておいたいいか。

「それでしたら織斑先生、出雲技研であれば昔は男として生活されてた事を理由に迫害されましたのに、葵さんの登校初日で何故織斑先生はその事をわたくし達に話そうとしたのですか？まあ葵さん本人が直接わたくし達に話されましたが、葵さんが言わなくてもあの時は織斑先生が話そうとしてましたけど」

ああ、そういえばそうだったな。たしかにあの日千冬姉、もういきなり俺達に葵の事情を話そうとしてたな。

「その事か。いくつか理由があるが…一つは隠してもいずればれるからだ。青崎は日本代表を目指している。今の世界において、ISの国家代表の存在がどれほど大きいかわからないわけではなからう。ましてや日本の国家代表だ、世界中が徹底的にどんな存在か調べ上げるぞ。そうになったら日本がどれだけ情報操作してもバレ、その事実を公表されるだろう。そうなら知らなかった日本の国民の中

で、隠していた事等に不満を持つ奴が必ず出てくる。そういう連中がきっかけで青崎を代表から外そうという動きがでるかもしれない。なら最初から公表しておいた方が良く。その上で実力で代表になった事を見せつけければそういった連中も文句は言えまい」

「…すみません織斑先生、その理由は聞いてたらもう織斑先生の中では葵は日本代表になるから隠し事はせずさつと公表した方が後の面倒が無くていいと思っっているようにおもえますが。…つまり葵の日本代表はもう決定しているのですか？」

鈴の質問に千冬姉は、

「さあな、それはどうだかな」

と言つてニヤつと笑つた。いや千冬姉、口で誤魔化してもその態度でもうバレバレですから。そっぴや昨日の夜、千冬姉俺に葵が日本代表に確定になるとか言つてたな。

「しかし織斑先生、それはあくまで可能性の問題ですよ。実際の所後でバレたとしても、確かに隠していた事に不満持たれるかもしれませんが事情が事情ですしそれが理由で代表から降ろされるなんて事は無いと思いますよ？僕なんか男と偽つてIS学園に入学しましたけど、…今は隠さず本当の性別を発表してますが代表候補生から降ろされてませんし」

シャルの話を聞いて俺も同感。確かにそうだな、いずれバレるからといって事情が事情だし、そこまで不満を持つ奴ばかりとは思えない。シャルの言葉に千冬姉は若干呆れた顔で言つた。

「デユノア、もうお前が女だと正式に世間に公表したから言うが…お前の性別詐称などバレバレだったぞ。学園上層部は全員知つていたし各国のお偉いさん達にも公然の秘密となつていた。ネットのある掲示板等ではお前が男のはずがない、女に決まつてると連日激

論され、証拠の写真とか言って色々張り出されてたぞ。中にはお前が中学生の頃の写真も載っていたな、女の子の服装をしたお前が。フランス政府は必死になって毎回火消しに追われてたな」

「ええ！そうだったんですか！」

シャルは知らなかった新事実に驚愕しているが、…あゝなんか納得。そのとある掲示板って頭に2の数字があるあれか？

「まあ元々フランスとしても織斑に近づき情報がある程度収集出来たら良い程度の目的だったからな。今では織斑の友達となっているし、実力的には問題ないからフランスとしてもバラした所で候補生としては外さん。それにデュノア、こう言ってはなんだがお前の場合は国と家の事情で振り回された身だからな。公表してもお前は同情されこそ非難はされなかっただろ。まあ何人かの小娘が『初恋だったのに』と泣いてたようだが」

…その女生徒達、まあ可哀そうだな。シャルも「そんな子がいたんだ…」と気まずそうにしている。

「織斑先生、しかしいずればレると言いましてシャルロットの言う通りそこまで酷い事態になるとも思えないんですけど。それならIS学園にいただけでも秘密にした方がよかつたんじゃない？あたしもそういう事情があれば、いや例え理由聞かなくても葵のためなら一夏も第も協力するのに」

あ、今度は鈴が千冬姉に質問か。

「そうかもな。葵の昔を知っている生徒は凰に織斑に篠ノ乃の三人だけで、日本政府が本気で詐称すれば学園在籍時だけでもバレないで過ごせたかもしれない。しかし、さっき述べた理由を聞いて青崎は最初っから話した方が気が楽だし、後で真相知って自分から離れる人とかを見たくないという理由でやはり最初から全て話す事を決

めたな。それに」

そういつて千冬姉は箒、鈴、俺を見て

「周りから何か言われようと、一夏達と一緒にいてくれたら大丈夫だからと笑顔で言ってたぞ」

と笑みを浮かべながら俺達に言った。う、そ、それはなんといか
…照れるな。箒に鈴も同様で少し赤くなってる。

「それに今では織斑、篠ノ乃、凰以外にもオルコットにデュノアに
ボーデヴィツヒも事情を知っていても仲良くしてるからな。結果だ
けみても良かっただろ」

そう言われ俺等は顔を見合って、笑みを浮かべた。ああ、そうだ
よな。セシリア達も葵の事情聞いても全く嫌悪感なんて抱かなかっ
たし、葵と友達になっただし。結果的に見たら問題無かったな。

その後もちよつとした事について千冬姉に俺達が質問していたら、

「ちゅちゃん、終わったよー！」

と束さんの声が聞こえたので、俺達は束さんと葵がいる場所まで
戻って行った。

「箒ちゃん同様あーちゃんのデータはあらかじめいれてあるし、
紅椿以上にスサノオは近接格闘特化型に調整してあるよ。まあ私が
調整したんだから不具合なんてあるわけないけどね」

と大きな胸を張って自信満々に言う束さん。その言葉通りなのか、
さつきから葵は手足を動かしてるが、満足そうな表情をしている。

「はい、束さんの言う通り初めて乗っているのにも使っている打鉄以上に馴染みがあります」

「ふ、ふ、ふ。量産機とは違うのだよ量産機とは。じゃあーちゃん、さっそくだけで飛んでみて」

「はい！」

と返事をした瞬間、スサノオは物凄い勢いで一気に上に飛んで行った。うわ、なんだこの急加速！一瞬にしてはるか上空まで飛んで行った葵を、俺達は驚愕の眼差しで見つめる。

「さきほどの速度、筈の紅椿と同等か？」

「いやラウラ、私よりも早いぞさっきのは」

はるか上空まで飛んでいった葵は、しばらく上空を急加速したり急降下したりして性能を確かめている。その動きたるや、先ほど筈が紅椿を動かしている時も凄かったがそれと比較しても全く見劣りしない。むしろそれ以上に見える。

しばらく上空にいた葵だが、急に凄まじい勢いで地上に降りてきた。地面に激突？と思ったが、葵は寸前でPICを調整し、地面すれすれで浮いている。…俺なら絶対あの速度だと激突してたな。

「凄いです束さん！想像以上に私が思った通りに動きます！」

興奮した様子で束さんに報告する葵。うわすげえ嬉しそうだな。

「そうでしょうそうですね。なんせ作ったの私だし」

「設計は全て出雲技研だろうが。お前はその通りに作ったただけだろ」

「ちーちゃん、いやそうだけど私が作ったから不具合無いって事をいいたいんだよ…」

あ、ちよつといじけただした。千冬姉の言う通りだけど、なら出雲技研ってそうとう凄い所だな。葵の為に心血注いで開発して…やっぱ自分達の手で完成できなかったのは無念だったろうなあ。

そして葵は再び上空に飛んでいき、そこで止まると…ん、動きが止まったままになった。何してるんだ？と思ったら、東さんからカーブンチャンネルで葵の声が聞えてきた。

「…あの東さん。武器の性能チェックしようと思ったのですが…今見てみしたら何も入っていないんですけど。スサノオの専用武器天叢雲剣や八咫瓊勾玉はおろか、このスサノオの第三世代特殊兵装八咫鏡もないんですけど？」

は？何も無い。どういうことだろうか？いやスサノオという名前から予想してたけど、武器の名前も神話からとってるんだな。

「青崎、一旦降りてこい」

千冬姉が葵を呼び、葵は再び地面に降りて来た。そして千冬姉にまたさつきと同じ質問をした。

「どうして武器が無いんですか？」

「ああ、そのことなんだが…専用の武器と第三世代兵装は東でなく、出雲技研に再び作ってもらうことにしているからだ。これは日本政府の命令でもある」

え？何で機体は東さんに作らせたのに、武器や第三世代兵装は出雲技研に作らせるんだ？

「私も作つとくよ」とちーちゃんに言ったのに止められたんだよね。なんか私が全部作っちゃうと不味いとかなんとか。なんか設計

は確かに出雲技研の皆が作ったけど、私が全部作ったら本当にその性能の全てが出雲技研の設計によるものなのか？と疑われるからか」

「日本のIS開発技術を他国にも知らしめるために必要な事だからな。特に第三世代は今各国が死に物狂いで開発を急いでいる。それを束が全て作ってしまったら本当に日本の開発陣が作ったのか？と疑われても仕方ないだろう。青崎、不便だとは思うがしばらくは我慢してくれ。出雲技研の者達も来月には多くの者が完治し、開発に取りかかる。まあ遅くても年末には完成するとは言っていた」
なるほど、確かに束さんが全て作ったらそりゃ疑うよなあ。

「そういうことですか…、ええ、それなら私も完成するまで待ってます！」

と笑顔で答える葵。ま、葵からすれば出雲技研の人達が作ってもらう方が束さんに作って貰うより嬉しいんかもな。あ、束さん少し不機嫌になってる。

「しかし織斑先生、武器無くても戦えますけど領域もつたいないですよ。ならせめてブレードの一本でも欲しいですけど」

…武器が無くてもいいとか。葵しか言えない台詞だな。

「心配するな。あそこにおいてあるコンテナを開けてこい」

と言って千冬姉は、俺達が来た時から置いてある小さなコンテナを指差した。葵はそれに近づき、コンテナ4を開けると…中には一振りの剣が入ってあった。ん？まさかこれは。

「天叢雲剣じゃないですか！どうしたんですかこれ？」

と葵は興奮した声を上げ、千冬姉に尋ねた。あ、やっぱりなあ。流れからしてそうだと思った。

「あの事件で機体も武器も兵装も壊されたが、その剣だけは奇跡的に無事だった。しばらくはその剣だけだが我慢しろ。青崎からすれば八尺瓊勾玉が無事な方が良かったかもしれないがな」

「とんでもありません！これで百人力です！」

と言つて天叢雲剣を構え、素振りをする葵。天叢雲剣、見た目は日本刀の太刀みたいだな。一体どんな性能があるんだ？

「今から見せてあげるわよ。じゃあ東さん、もう一回上に上がりますんで第の時と同じようにお願いします」

「りょーかいあーちゃん」

再び上空へ飛んでいく葵。そして頃合いを見計らった東さんが、

「じゃああーちゃん、これでどうかな」

と言つて東さんはまたミサイルを呼びだして……って多！第の時の倍はあるぞ！それを一気に葵に標準を合わせて発射した。迫りくるミサイルの群れを、葵は剣を構え、ミサイルに向かって振った。するとその振った軌道に合わせて青いレーザーが帯状に広がって行き、ミサイルを切り裂いて行った。おお、紅椿の空裂と同じだな。しかし

「ふふふ、甘いよあーちゃん」

と言つて東さんはパネルを操作しだした。するといくつかのミサイルは葵の一撃をかわしスサノオに近づいて行った。それでも大部分は同様に切り裂いて行ってるが、2発ほどもう激突寸前まで近づいて行った。

「葵！」

思わず叫ぶ俺だが、激突する寸前で葵は後ろ向きのまま一瞬にし

て後退した。え！あれはまさか

「後ろ向きのまま瞬時加速だ！」

篤が驚愕して葵を見ている。あ、やはりさっきのは瞬時加速なんだな。そうしてミサイルから距離を取った葵は、残りのミサイルもなんなく撃墜させた。

「さすがだねあーちゃん、次はこれかな？」

と言ってまた空中から何かを出す束さん。次に出したのは紅椿やスサノオを格納していたひし形の塊だった。

「じゃああーちゃん！次はこれを斬り裂いて！」

と言って束さんは葵に向かって物凄い勢いでそれを飛ばした。葵も剣を構え、それを迎え斬った。そして…ひし形の塊は見事に二つに割れていた。

「あの一瞬で二つに斬り裂けるなんて…」

鈴が驚いているが、それよりも俺は葵が手にしている天叢雲剣に注目した。さっきまでは何ともなかったのに、今では刀身が青く光っている。

「気付いたか織斑。天叢雲剣はレーザーで敵を切り裂くだけでは無い。そのレーザーのエネルギーを刀身にコーティングすることで攻撃力を上げる事ができる。天叢雲剣の全エネルギーを刀身に乗せる事も出来、その時の一撃ならお前の零落百夜には劣るだろうかかなりの威力にはなるだろう。無論全エネルギーを一度にレーザーとして放つ事も出来る。大型レーザー砲並みの威力があるようだがそれは避けられたらお終いだからな、滅多には使わないだろうが」

ありがたい解説ありがとう千冬姉。ってなにそのチート性能。俺の雪片二型より数段凄いですけど。

「馬鹿者。それでも一撃の威力ならお前の雪片二型の零落百夜の方が上だ。葵のはそれと同等の威力はだせんし、それにお前のは一応連続使用可能だろうが」

いやそうはいいまして千冬姉。馬鹿みたいにエネルギーを消費する零落百夜はそんな頻繁に使えないじゃないですが。

「それはお前がなんとかするんだな
そうですね。」

「まゝ性能が良いのは当然だよなえ。だってあの剣、ほとんどオー
トクチュールに分類されるよ。スサノオ以外の機体が使ったらレー
ザーは出せるけど、刀身にコーティングすることは出来ないしね。
あ、紅椿ならできるけどね。ただ今の箒ちゃんじゃあのコーティン
グ技術は無理かな。あれ、簡単そうに見えて物凄く調整が難しいか
ら」

へーそうなんだ。文字通りスサノオ専用武器なんだなあれ。そし
て箒、さっきの束さんから無理と言われて悔しいのはわかるが、束
さんを睨むのはやめてやれ。

「ふむ、何も問題はないようだな。よし、これで篠ノ乃も青崎も専
用機の使用に問題が無い事がわかった。なら早速だが誰か、篠ノ乃
と青崎と戦って貰おうか。そうだな…篠ノ乃にはデュノア、お前が
戦え」

「はい！」

「そして青崎だが…」

辺りを見回す千冬姉、そして俺の方を向くと

「織斑、お前が青崎と戦え」と俺を指名した。

おまけ

「ねえねえちーちゃん」

「何だ束」

「あーちゃんのIS学園でさっさと事情バラした件だけど、あれっ

ていつくんがIS学園にいたからしたんだよね。いつくんいなかったらちーちゃんもバラさず秘密にしようと思ってたでしょ」

「まあな、あいつらには言わなかった本当の理由の一つはそれだ。一夏がいるからさつさと話させた。例え経歴を変え名を変えて入学してもだ、葵が一夏達にも黙っておくのは耐えきれないだろうからな。そうなると必然的に一夏達には正体を明かすだろう。まああいつらなら秘密を守るのに快く協力するだろうが……問題はその後だ。一夏の性格からして葵と再会したら喜び、そして前と同じように一緒になってつるむだろう。葵もそれを望んでる。だがな、周りからすれば何で最近登校してきたばかりの葵と一夏があんなに仲が良いのか？と疑問に思われるぞ。あいつらからすれば昔と同様に過ごしていると思ってるが、はたからみれば付き合ってるようにしか見えんからな」

「……だろうねえ。箒ちゃんも同じように接すると思う」

「そうだ。そして箒も昔同様葵と接するだろう。しかしだ、IS学園で人付き合いが悪い箒が周りから見れば初対面の葵に親しげに話してるように見える。違和感を持たれるのは避けられん。あいつもあいつでお前の妹と言う事で周りから注目されてるからな」

「……箒ちゃん、やっぱり友達少ないんだね」

「あいつもお前にだけは言われたくないだろうがな。さらにだ、鈴も演義とかそういうのは向いてない。感情を素直に表す奴だからなおそらく一夏達とたいして差はないだろう。一夏に、箒、鈴の三人が登校初日からおそらく葵と仲良くしだしたらやっぱりおかしいだろう」

「ふうん、そっだよねえ」

「まあ他にもあるがな、真相話させた理由も話しても大丈夫な理由は」

臨海学校（二日目 専用機後編）（後書き）

三種の神器がスサノオ専用武器です。詳細はまあ今後の話の中に出していきます。

読み返してみたらあまりにも誤字が多かったので少し修正しました。

うつ、寝不足でハイな状態で書いてたからなあ…。

臨海学校（二日目 福音）

「お、俺ですか！」

「なんだ織斑、不服なのか？」

「いえそういうわけではないですけど……」

スサノオに乗っている今の葵に、まるで勝てる気がしないなんて言えないな……。いややべえ、マジで勝てる気がしない。今まで葵が乗ってた打鉄なら機動性ではこっちが上だったけど、スサノオの動きは白式を完全に上回ってるし。いやおそらく性能上はそんなに差はないんだろうけど……俺には“まだ”あの動きはできない。

「織斑先生、じゃあまずは僕と箒が戦いますね。箒、その紅椿どれほどのものか見せて貰うよ！」

おお、シャルはやる気満々だな。しかもあの目はあの性能を見せてられても負けれると思っけない感じだな。

「うむシャルロット、今日こそは勝たせて貰う」

箒も自信満々な顔でシャルに宣戦布告。お互い軽く睨みあうと二人は空に飛び

「待て二人とも。お前達は後だ。先に織斑と青崎が戦って貰う」

……飛び立とうとしたが、千冬姉に待ったをかけられた。

「何故ですか織斑先生？」

やる気満々な所で待ったをかけられたので、箒は若干責めるような顔して千冬姉に後回しにされた理由を聞いた。

「篠ノ乃、お前はまだ紅椿を少し操縦しただけで他にどのような性能があるのか知らないだろうが。青崎は開発時から一緒に関わっているからスサノオがどのような機体か十分理解している。織斑と青崎が戦っている間束から色々と聞いておけ」

「任せて箒ちゃん！お姉ちゃんが紅椿の全てを教えてあげるよ！」

「…お願いします」

「そういうわけだ。織斑と青崎、先に戦え」と言つて俺と葵を見る千冬姉。

「まあ私は先でも後でもどちらでもいいですけど」

葵は天叢雲剣を肩に担ぎ笑いながら俺の方を向いた。

「じゃあ一夏、私のスサノオデビュー戦初勝利の為に華々しく散つてね」

笑顔で言う葵。初めて模擬選した時にも見せた俺に負けるはずがないという顔をしている。

……うん、あれだ。意地でも勝つてやる！

「青崎、今回はスサノオの性能と同時に天叢雲剣の性能もチェックしたい。だからなるだけ剣で戦え。素手で倒すのは最後にしろ」

「わかってますよ織斑先生。天叢雲剣の性能を限界まで引き出して見せます」

…武器を使う事がハンデ扱いだよ。それと千冬姉、何俺が負ける前提で話してるんだよ！

「ねえ一夏と葵、どっちが勝つか賭けない？あたしは葵に賭けるけ

ど」「でわわたくしも」

「私もだ」「嫁が勝つとは思えないから葵だな」「…みんな葵に賭けたら賭けにならないよ」「じゃあシャルロット、あんた一夏に賭ければ?」「…僕も葵で」

お前ら~~~~!なんだよなんだよみんなして!誰も俺が勝つなんて思わないのかよ!最初勝てる気がしなかったが、それでももうこうなったら意地でも葵に勝つてやる!

「じゃあ一夏、始めようか」

そういつて先に上空へ飛んでいく葵。俺も葵に続き上空へ飛んで行った。ある程度上空まで行ったら互い適度な距離を開けて対峙。そしてそれを見届けた千冬姉が

「では始めろ!」

と叫び、それが戦いの合図となった。

合図と同時に葵は天叢雲剣を構え俺に向かってきた。その速度、今まで葵が乗っていた打鉄とは比べ物にならないほど速い!しかし俺も雪片を構え、葵に突撃する。どうせ俺の攻撃手段はこれしかないんだ。相手がこっちに向かって来るならむしろ都合。俺も真っ直ぐ葵に向かって突撃するが、葵は天叢雲剣を俺に向かって一閃。すると弧を描く縦薙ぎの青いレーザーが俺に向かってきた。

「あぶねっ!」

体を捻じり何とかそれを避けた俺だが、体勢が大きく崩れてしまった。そこに葵はまた天叢雲剣を振るい、今度は横薙ぎのレーザーを出し俺に攻撃。しかし、

「甘いぜ!」

今度は余裕を持って俺はかわした。その後幾度か葵は天叢雲剣を振るい俺にレーザーを浴びせるが、俺は全てかわしていった。

最初の攻撃の時は天叢雲剣の性能を忘れてたから慌てたが、落ちていて対処すればなんてことは無い。なんせ剣を振らないとレーザーが出ないのだから。しかも直線にしか来ないから楽にかわす事が出来る。砲身が無い鈴の衝撃砲の方がよっぽどかわしにくいってものだ。

「ふーん、やっぱりこの攻撃方法は遠距離専門でやるには向いてないかな」

葵はそう言って天叢雲剣を振るのをやめた。

「じゃあ、次はこれかな」

その瞬間、天叢雲剣の刀身が青く発光した。天叢雲剣のもう一つの性能、レーザーエネルギーの刀身コーティング。そうすることで攻撃力を高め、相手を切り裂く。

青く光る天叢雲剣を葵は構え、俺にまた突撃してきた。俺も雪片を握りしめ、葵に突撃。俺と葵との距離が後数メートルといった所で、葵は俺に向かって剣を突き出した。その瞬間、刀身をコーティングしていたエネルギーが俺に向かって発射された。

「嘘！」

かわしきれず着弾、衝撃が俺を襲った。この衝撃とエネルギーの減り具合から見てセシリアのビットの一撃よりは弱い。ってその剣別に振るわなくてもレーザー出るのかよ！

「誰も剣を振るわなければレーザーが出ないなんて言っていないわよ！」

ヤバい！さっきの一撃に気を取られている間にすでに葵は俺との距離を詰めていた。天叢雲剣も再び青く光っている。慌てて俺も雪片を構えるも

「遅い！」

葵の攻撃に間に合わず、葵は俺の胴に一閃。後方に吹き飛ぶ俺に葵は『瞬時加速』を使い一瞬にしてまた距離を詰め、ガラ空きの俺の頭に強烈な一撃を与え俺は勢いよく海に突き落とされてしまった。

かなりの深さまで沈んだが、水中で体勢を立て直し上昇。そして海面から出ると、空で待っていた葵は俺に向かってまた天叢雲剣を振るって俺に追い撃ち。慌てて俺はかわした。くそ、容赦ねえなこいつ！

再び上空まで飛び、葵と対峙する。現状確認のためエネルギーを確認してみたが…さっきの攻撃だけですでに4分の1減らされている。ただ剣で打たれるだけじゃここまでは減らないのに。

「ふんふん、どうやらこれは効いたみたいね」

満足げに天叢雲剣を眺める葵。その刀身は先程同様青く光っている。そしてその切っ先を俺に突き出して葵は俺に向かって叫んだ。

「一夏！まだまだ準備体操の段階だからね、本番はこれからだから！」

…俺はすでに本番のつもりなんだがな。葵からすればまだなのか…。

葵はまた剣を構え、俺に向かって突撃してきた。俺は向かえ撃とうした瞬間

「それまでだ！織斑！青崎！すぐにこちらに戻ってこい！」

千冬姉の叫び声がオーブンチャンネルから響き、模擬戦は中断された。

俺と葵が千冬姉の所まで戻ると、そこにはさっきまで居なかった山田先生がおり、千冬姉と難しい顔して何やら話をしていた。

「鈴、なにかあったの？」

「あたしも知らないわよ。あんたたちが戦ってたら急に山田先生が血相変えてここに向かってきて織斑先生に小型端末見せて何か話したと思ったら、織斑先生あんたたちの模擬戦を急に中止にしたんだから」

どうやら鈴達も何かあったのか知らないようだ。とりあえず俺も葵も鈴達と一緒に千冬姉と山田先生を見ていたら、千冬姉は俺達の方を向き、叫んだ。

「全員注目！予定していたIS装備のデータ取りは中断！これよりIS学園は特殊任務行動に移る！そしてお前達にもその任務についてもらう！」

旅館の一番奥の宴会用大広間に、教師陣と俺達専用機組が集められた。俺達の一番前に千冬姉はたっており、空中ディスプレイを使い俺達に現状を説明している。

千冬姉の説明によると、アメリカとイスラエルが共同で開発していた第三世代型軍用IS銀の福音が暴走監視区域より離脱。

その後衛星からの追跡の結果、その福音がここから2キロ先の空

域を通過する事を確認。時間にして五十分後。そして千冬姉から、この件は俺達だけで対処しなければいけないことがわかった。

ここまで聞いて俺は他のメンバーの様子を見てみたが、教師陣は無論の事俺と篤以外の代表候補生組は厳しい顔で千冬姉の説明を聞いている。特にラウラと葵は真剣な表情を浮かべている。

その後千冬姉から目標ISの詳細データが送られ、様々な議論がされるも目標ISは超音速飛行を続けているため攻撃する機会は一度しかないらしい。つまり、

「その一度の機会を俺の零落白夜の一撃で倒すってわけか…」

「話が早くて助かる。無論これは訓練では無い。嫌なら無理強いはせんが…どうする?」

そんなもの決まっている。

「いや、俺がやらなかったら多くの人が危険な目にあうかもしれないんだろ!ならやります!」

「よし、なら具体的な作戦に移るぞ!織斑の機体のエネルギーは全て攻撃に使ったため、織斑をそこまで運ぶ役が必要になる。そこ」

「織斑先生!それでしたらちょうど本国から強襲用高機動パッケージと超高度度ハイパーセンサーが送られてきたこのわたくしに任せて貰えませんか!」

「オルコット、それはもうインストールされているのか?」

「いえ、まだですが…」

「今からですと、間に合うかはギリギリですね。では早速」

山田先生がセシリアのパッケージのインストール作業を指示しようとした瞬間、

「ちょっと待った~~~~~!」

と束さんの声が響いた。ってなんで天井から首出してるんですか束さん。

「束、まあちようどいい。お前に頼みたいことがあったからな」

「ん!ちーちゃんが私に頼み事!うんうん、勿論OKだよ。ちーちゃんの頼みなら無条件でOKだよ!でもその前に、私が良い案があるよ!」

その後束さんからこの作戦には断然紅椿を使用することを勧められた。第四世代の紅椿はパッケージ換装を必要としない万能型で、全身展開装甲とやらでできているため束さんが少し調整すれば数分で高機動型ISになるとの事。

「ふ、ふ、ふ。篝ちゃんの紅椿を使えばこんな作戦余裕だね!」
胸を張って言う束さん。うゝん、でも

「あのゝ束さん。しかし篝はまだ紅椿に乗ってまだ一回も戦ってないんですよ。それなのに初めての实战ってのは…。一夏が万が一失敗した場合ちよつと」

葵が不安そうな顔をして束さんに言った。そう、今日初めて紅椿に乗った篝はまだ一回も戦闘を行っていない。模擬戦もこの件で流れてるし、初めての实战で一回もまだ戦ってないのはなあ。

「安心しろ葵。私は立派に果たしてみせる!」

自信満々な顔をして葵に言う篝。いやお前のその自信はどっから出てるんだよ…。

「うん、でも」

まだ何か言おうとしている葵に、

「大丈夫大丈夫。だって篤ちゃんといっくんはあくちゃんが守ってくれるから」

とあっけらかんと束さんは葵の方を向いて言った。

臨海学校（二日目）福音（後書き）

なんかようやくここまでできたなあと思います。

臨海学校（二日目 出撃準備）

「は？…あの束さん、今なんて言いましたか？」

「いやだからあーちゃん、篤ちゃんにいつくんが心配ならあーちゃんが一緒に行って守ってあげれば何の問題もないでしょ」

困惑する葵にさも当たり前のように言う束さん。その言葉に千冬姉も頷き、

「青崎、お前にもこの作戦に参加してもらおう。幸いな事に強襲用高機動パッケージは今日お前に試験運用してもらったため用意してあったからな。これをつけてお前も作戦に参加してもらおう。そしてお前が目標ISと交戦し、織斑のために足止めをする」

「ちーちゃん、私に頼みつてあーちゃんの機体に強襲用高機動パッケージを取りつけて欲しいって事でしょ？私でなきゃ作戦まで間に合わないから。ま、あーちゃんだからやってあげるけどね。これが他の連中ならちーちゃんの頼みでも嫌だけど」

…つい先程千冬姉の頼みなら無条件でOKとか言いませんでしたか束さん。いやまあこういう事は例外って事なんだろうけど。

「そうだ。この作戦失敗は許されん。しかし作戦の要の二人が少々心許ない。織斑が確実に目標を撃破するためにも目標を足止める役が必要だ。篠ノ乃は青崎が言ったようにまだ試運転しかやって無い上、単独飛行ならともかく織斑を運ぶ事でかなりのエネルギーを消耗してしまう。戦闘する余裕はないだろう」

千冬姉の言葉を聞き「それくらい私一人でも出来る…」と俺の横でボソつと言う篤。だくらく、その自信は本当にどこから出てきてるんだよ。もしかして篤、専用機貰えて少し浮かれている？

さらに千冬姉が何か言おうとしたら、急にセシリアが立ちあがった。

「ちょっと！少しお待ちになってください織斑先生！葵さんも作戦に参加されるのならわたくしもお願いします！」

今回の作戦に自信満々に参加しようとしたのに東さんの登場ですっかり忘れられていたセシリアが、千冬姉に抗議した。が、

「却下だオルコット。さっきも言ったがお前のブルーティーズにはまだこの作戦に必要なパッケージはインストールされてないだろう。いまからやっても作戦に間に合うかわからん。ちなみに東に頼ろうとするなよ」

「さっきも言ったけど箒ちゃん達以外の機体はお断りだからね」
東さんは笑顔でセシリアに向かって言った。笑顔で拒絶されセシリアは怯むも、

「し、しかしそれでもやってみないとわからないではないですか！それに足止めする人は何人いても」

「以前も言ったがオルコット。お前の機体は多対一ではむしろ邪魔だ」

「あ、あれから訓練は重ねました！」

「悪いがお前のその成果を私は知らん。オルコット、今回はお前は待機だ。それ以上何か言うなら命令する」

「~~~~~」

千冬姉から散々言われたセシリアは目に涙を浮かべるも、それ以

上は何も言わずその場に座り込んだ。鈴、シャル、ラウラが複雑な表情を浮かべながら千冬姉とセシリアも見つめている。

しかし千冬姉、さっきからセシリアに厳しい事言ってるけど…なんか違和感を感じる。言ってる事は正しいんだろうけど…なんかからしくないな。

「さらに相手は暴走状態のISだ。そんな相手に足止め出来る技量を持つのはこの場では青崎しかない。青崎、そういうわけだ。さつきも言ったがお前は福音と接触したら交戦。織斑が零落白夜で撃ち込める状況まで持つて行け。お前は日本の代表候補生だ。ならこの任務必ず遂行してこい」

あれ？俺の時と違い葵には命令なんだ。しかもあの目、その口調、拒否権は一切認めないと言っている。そんな千冬姉に葵は力強い笑みを浮かべ、

「任せてください織斑先生。必ず一夏と箒を守り任務を遂行させてみせます！」

力強く返事をした。その時の葵の目を見て、俺は少し驚いた。なんて表現したらよくわからないのだが…ただすごく大人びて見えた。葵の顔を見て覚悟を悟った千冬姉は、今度は箒に向かった。

「篠ノ乃、先程から束がお前を作戦に組み込むことを推薦してるがお前自身はどうなのだ。はっきり言うが危険が多い任務だ。嫌なら断っていいぞ」

箒には俺と同様参加の意思を問う千冬姉。…まあさっきからの反応から考るとなあ。箒は葵を見て、次に俺を見ると

「任せてください織斑先生！その任務承ります！」
と返事をした。

「よし！ならばすぐに行動を起こすぞ！束！」

「うんまかせてちーちゃん！篝ちゃんとあーちゃん、すぐに紅椿とスサノオの調整に行くよ。ちーちゃん、すぐそばの砂浜で調整行うからスサノオにつけるパッケージ持ってきてね」

と言つて束さんは葵と篝を連れてこの場から立ち去った。この場を出る際、篝はやる気をみなぎらせながら出ていったが、葵は複雑な顔をしながら千冬姉とセシリアをちらつと見たが特に何も言わなかった。教師陣もそれぞれの任務の為部屋を後にしていき、千冬姉も山田先生に何か指示を出しながら部屋を出ていった。こうしてこの場に残ったのは俺、セシリア、鈴、ラウラ、シャルだけとなった。

「…納得いきませんわ」

セシリアは座り床を見ながら震える声で呟いた。

「セシリア、しょうがないよ。セシリアのパッケージは作戦までにインストール出来るかは織斑先生の言う通りわからないんだし」
シャルがセシリアを励まそうとするも、

「ですけど！やってみないとわかりませんのに！それに」

「諦めるセシリア。今回初めから教官はこの作戦は一夏と葵にさせるつもりだったからな。」

不満を言おうとするセシリアに、ラウラが苦汁を滲ませた顔で言った。

「え？ラウラ、それどういう事よ」

「いや正確には教官の意思ではない。おそらく日本政府の意思だろ

う。出来る限り日本の戦力で今回の任務を遂行するよう命じられたんだろ？」

え、どういふことだよそれ。

「おそらく日本政府としては今回の件で日本の優位性を高めたいのだろ。今回の事件は機密扱いになるが、それでも各国の上層部は知ることとなる。その任務を日本の機体だけで解決出来れば、各国に対する日本のISの性能の宣伝にもなる。そして教官はこの命令に絶対逆らえない。…それは」

そこで口をつぐむラウラ。しかし鈴、セシリア、シャルもラウラが何を言おうとしたのか理解しているようだ。…俺もラウラが何を言おうとしたのかは理解している。

ISの世界大会で、二連覇を確実視されていた千冬姉は誘拐された俺を助けるため第二回モンドグロッソ大会決勝戦を棄権した。そして、そのせいで千冬姉は日本中から非難される事となった。第一回大会の優勝者が何も言わず棄権した為、当時の日本の面子は丸潰れとなった。

……その負い目があるから、千冬姉は今回政府の命令に従うしかないのか。

「ラウラさん、言いたい事はわかります。わたくしだってラウラさんに言われなくても、薄々わかつてはいました。ただわたくしは」

「一夏と箒と葵が心配だから、でしょセシリア」

笑みを浮かべ言うシャル。シャルの言葉を聞き、セシリアの顔は赤くなった。

「一夏と箒はISに乗ってまだ三カ月で、箒に至っては今日初めて専用機を与えられてまだ試運転程度しか操縦していない。葵は代表

候補生でISの腕は申し分ないけど、それでも専用機を今日初めて乗っている。不安に思っるのはわかるよ」

「そしてセシリア、あんたこうも思ってるんでしょ。平民を守るのも貴族としての自分の務めだとかなんとか。軍人として訓練された葵はともかく、一夏と箒には危ない任務は私がやりますみたいな。ま、この作戦一夏がいなければ成立しないから一夏はしょうがないけど」

シャルと鈴の台詞を聞き、さらに顔を赤くするセシリア。「うゝゝ」と言いながら指で床をなぞっている。

「セシリア、気持ちはわかるがここは一夏と箒と葵を信じようではないか。セシリア、それにこう言っではなんだが一夏も葵も箒も前が思ってる程弱くないぞ。特に葵は」

そこは俺の名前も言ってほしかったが、ラウラの言う通りだ。

「大丈夫だセシリア。俺も葵も箒も無事に任務を達成して戻るから心配するな」

俺はセシリアにそう言うと、セシリアも納得したのか笑みを浮かべた

「そうですね、なら一夏さん今回の作戦ですが」

「あ、そうそう一夏あんた高速戦闘がどんなものか知らないわよね。簡単だけ教えてあげるわ」

「ちよつと鈴さん！それはわたくしが」

「一夏、高速戦闘だと周りの風景が」

「ブースト残量にも気を付ける。いつもの調子で」

「シャルロットさんにラウラさんまで！その役目はわたくしですのにゝ！」

とまあ、葵と箒の調整が終わるまで、俺はセシリア達から高速戦闘の説明を受ける事にした

時刻は午前11時、作戦時刻となった。紅椿もスサノオも調整とパッケージインストールが完了し、今三人で千冬姉の出撃命令を待っている。

「もうすぐね。一夏、箒、緊張している？」

「大丈夫だ葵、私は問題無い」

「俺もだ。そういう葵は？」

「私は大丈夫」

と言つてにっこ笑う葵。まあ葵にはああいったが、俺は少し緊張している。やっぱ今までと違いこれは実戦なんだ。今までと違い樂觀視することはできない。

「一夏、一夏。聞こえるか？」

少し物思いに耽っていたら、葵がプライベートチャネルで俺に話しかけてきた。ん？なんでわざわざこれで？直接言えばいいのに。

「ああそついや一夏はこれ苦手だったか。ならいいや、返事はいい。俺の話の聞くだけでいい。箒の事だ」

「なんというか、箒の奴少し浮かれている。専用機を持たされ、多分重要な作戦を任されて嬉しいのだろうけど…あまりいい傾向じゃない。何かあった時は一夏、サポートを頼む。俺は福音相手にそんな余裕はないだろうから」

葵の言葉は、会議の時から俺が思っていた事だった。確かに今の箒は少し浮かれている。

なら…何かあった時は俺がちゃんとサポートしないとな。しかし葵、プライベートチャネルとはいえ、最近じゃ自室以外では二人きりでも女口調だったのに口調が男だったってことは…葵も実は緊張しているのか？

そしてその後少し時間が経った後、

「では、はじめ！」

千冬姉の号令とともに、作戦は開始された。

臨海学校（二日目 出撃準備）（後書き）

まあ、今後の展開はかなり予想されやすいでしょうね。

臨海学校（二日目 敗戦）（前書き）

三人称に挑戦してみました。

一人称と違いなんか書きづらいですね。未熟だなあと 생각합니다。

臨海学校（二日目 敗戦）

千冬の開始の合図と共に、一夏を背に乗せ展開装甲された紅椿と、強襲用高機動パッケージ飛燕をインストールされたスサノオは飛び立った。一気に目標到達高度まで上昇した紅椿とスサノオは、千冬から送られてくる情報を照合し、目標の現在位置を確認。目標ISに向かい再び飛翔して行った。

（…なんてスピードだ。常時瞬時移動並だろこれ）

紅椿の背に乗りながら、一夏は紅椿の性能に驚いていた。横に目をやると増設されたスラスターを噴射しながらスサノオが紅椿と並びながら飛んでいる。しかしスサノオは単騎で飛んでいるのに、紅椿は白式という荷物を運んでいるのにも関わらず同等かもしくはそれ以上の速度で飛んでいる。その事実に一夏はただ束の技術力に関心した。

（さすが紅椿、束さんが作った機体。スサノオよりも遥かに性能が高い）

紅椿の横で並んでいる葵も、一夏同様にその規格外な性能に感心していた。自身の乗っているスサノオも最高の機体だとは認識しているが、さすがにISの生みの親である束が作ったISはそれ以上であった。確かにこれなら束が作戦に加える事を勧めるのも納得できると葵は思った。しかし、

（…いや大丈夫だろう）

一抹の気がかりが葵の頭によぎるが、葵は気にしない事にして飛行に集中することにした。そしてその直後、

「見えたぞ、一夏、葵！あれが目標だ」
とハイパーセンサーで目標を確認した箒の叫びが響いた。

目標のIS銀の福音は、頭部から足先まで全て装甲で覆われていて、その名の通り全身が銀色となっており、頭部から一対の巨大な翼が生えている。この翼が福音の推進力を司るスラスタでもあり、砲撃を行う場所でもある。福音はデータ通り超音速飛行で移動しており、真っ直ぐ一夏達に向かって飛んできている。

（さうで、どう対処しようかな。とりあえず俺が突撃して）
と葵が思案していると、いきなり福音は平行に飛んでいたのを方向転換し上昇し始めた。

「な、何だ一体！」

「気付かれたのか！？」

箒と一夏は急な福音の行動に驚き、そしてその直後

「敵機確認。警戒レベルCと判断、迎撃モードに移行します」
オープンチャンネルから響く福音からの機械的な音声を聞き、顔を強張らせる。一夏達よりも高い高度に移動した福音は頭部に生えている翼を広げ、それを見た葵は叫んだ。

「来る！一夏、箒、気を付けて！」

その直後、福音は広げた翼から無数の光弾を発射させ、一夏達に攻撃を開始した。全方位にわたる福音からの光弾は雨のように降りそそぎ、一夏達に襲いかかった。それを一夏、箒、葵は散開してそれぞれ攻撃をかわしていく。葵はなんとか全弾回避できたが、一夏と箒はかわしきれず2、3発着弾。光弾は触れた直後に爆発した。

しかしまだ2機とも深刻なダメージにはなっておらず、それを確認した葵は安堵した。

「物凄い数の光弾だったわね、なかなかやつかいな機体ね福音は」

「のんきな事言っていないでどうするのだ葵。あの光弾の雨ではうかつには近寄る事も出来ないぞ」

「どうするもなにも、作戦に変更は無し。私がこれから福音と戦って動き止めて、一夏が零落白夜で止めを刺す」

「しかし葵、一人で大丈夫なのか？俺も」

「駄目。一夏も戦って肝心な時に零落白夜が使えなくなったら目も当てられない。それと箒も一夏と一緒に待機。エネルギーも少ないんだから無理せず防御に集中しときなさい」

「だが」

箒はそれでも一緒に戦おうとするが、

「いいから二人とも、幼馴染の私を信じなさい」

と葵は笑顔で一夏と箒に言って、一夏と箒を残し福音に向かって行った。

「敵機A、接近。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

福音はこちらに向かってくるスサノオを確認すると、再び翼を広げる。翼に備え付けられている36の砲門を全てスサノオに照準を合わせ、発射。しかし

「はあー！ー！」

雄叫びを上げながら葵は向かってくる光弾を紙一重でかわしていく。そしてかわしながらも天叢雲剣を振るい、弧を描くレーザーを福音に浴びせていく。しかし福音は難なくかわしまた翼から光弾を発射。葵もそれをさけ、合間にまた剣を振るいレーザーを浴びせる。両者互いに交互にかわしながらも遠距離で攻撃する展開がしばらく続く事となった。攻撃回数では圧倒的に葵は福音に負けているが、光弾をかわしながら葵は勝利を確信した。

（いける！確かにあの翼から降り注ぐ光弾の数はやつかいだが、それでもセシリア達みたいに正確な射撃精度を持っていない。それにスサノオの機体にも慣れたし）

一夏との戦闘だけではまだスサノオの機体を完全に把握できていなかったが、福音と交戦している間に葵はスサノオの機体を完全に乗りこなすようになった。そして現在エネルギー節約の為、福音の攻撃を牽制するために天叢雲剣で攻撃するのを止め、完全に回避に集中するようになっていた。しかし、じわりじわりと葵は福音との距離を光弾をかわしながらつめていつている。

（後少しで瞬時加速で間合いを一気につめれる）

福音を見つめ、葵はその後どう一夏まで繋げようか思索しながら回避を続けていく。

しかし、一夏と箒の二人が今の自分を見てどう思っているかまでは考えてはいなかった。

「葵の奴任せなさいとか言っていたが…防戦一方じゃないか！」

「しかも先程から天叢雲剣を振るってもいない。完全に押されている。このままでは不味い！」

福音の攻撃パターンを理解し、少しでもエネルギーを温存するため回避に専念した葵を、二人は押されていると勘違いしてしまった。これが待機を命じられている代表候補生たちなら、よく観察すれば葵が少しずつ福音に近づいていつている事に気付いただろう。しかし初めての实战で葵を心配している二人にはそこまで気付く事が出来なかった。

今二人には、福音の攻撃から逃げ回っている葵としか写っていなかった。しかし

（あいつが言ったんだ、私を信じなさいって。なら）

焦燥に駆られながらも、一夏は葵の戦いを見つめていった。

（あと少し）

福音の攻撃をかわしながら、葵は瞬時移動を行うタイミングを図っていた。もはや瞬時移動すれば懷まで行ける間合いまで葵は福音との距離を詰めており、そろそろ勝負を決めないといけなと思うっている。

（予想より回避に時間掛け過ぎたし、そろそろ決めないと）

そう思っていた時、福音の砲門が全て撃ち尽くし、再度照準を合わせようとした瞬間、

「ここだ！」

瞬時加速を行い、一気に葵は福音との距離を詰めていった。福音は葵の瞬時加速に対応できずにいる。そのまま福音の正面に現れた葵は両手で握っている天叢雲剣の刀身にエネルギーをコーティング。

（まずは機動力を奪う！）

光輝く天叢雲剣を手に、狙いは福音の頭部から生えている右側の翼。これを落とせば福音の機動力は大幅に減退できる為、まずは片側を両断せんと剣を振りおろそうとした。しかし

「え？」

振りおろそうとした葵に、横から赤いレーザー群が福音とスサノオを攻撃していった。予想外の攻撃に回避出来ず直撃。衝撃で吹き飛ばす葵がレーザーが来た方角を見ると、そこには愕然とした表情を浮かべた筈と一夏がいた。

（このままでは危ない！）

葵が瞬時加速を行う前、箒は苦戦している（と箒は思っている）
葵に加勢しようと、福音に向かって突撃していった。

「箒！待て！勝手に動くな！」

後ろから一夏が箒に向かって制止の声を掛けるも、箒は無視した。

「ああ、くそ！」

すぐさま一夏も箒の後を追った。しかし展開装甲で出力が上がっている紅椿には到底追いつくことが出来ない。さらに出力を上げて追いかける一夏だが、その前に箒は行動を起こした。箒は腕部展開装甲を開き、さらに両手に持つ空割と雨月を県政の為振るい攻撃。雨月からは無数のレーザーの弾丸が、空割からでるレーザーの斬撃が発射される。さらにそれを補うように展開された腕部からもエネルギー刃が自動で発射され、福音に迫る。しかし、

「な！」

紅椿の攻撃が福音に届く瞬間、福音の前に瞬時加速を行った葵が現れた。そして、箒の攻撃は福音と　スサノオに着弾した。
箒は自分の攻撃を受け吹き飛んでいく葵を愕然とした顔で凝視する。

「葵！」

一夏の叫びがオープンチャネルを通し箒にも聞えるが、箒は葵を攻撃してしまったという事実混乱し、激しく動揺していた。茫然と佇んでいる箒に、葵よりも早く体勢を整えた福音は、自分を攻撃した機体を脅威と判断した。

「敵機B、確認。警戒レベルBと判断。目標を迎撃します」

オープンチャネルから流れてくる福音の声を聞き、嫌な予感をする一夏。そしてその予感通り、葵を攻撃してしまった事に動揺している筈に、福音は恐るべき速度で筈に接近しその速度のまま強力な蹴りを筈に叩きこんだ。

「がはっ！」

未だ動揺していた筈はそれを回避できず、後方へ吹き飛ばされていく。そして吹き飛んでいく筈に福音は全ての砲門を合わせ、一斉射撃を行った。

（何かあった時は一夏、サポートを頼む）

出撃前に葵から言われた事を思い出した一夏は、瞬時加速と零落白夜、その二つを最大出力で行い筈にまで到達。筈を担ぎ、また瞬時加速を行い高速離脱。そのすぐ後に福音の光弾は降り注いでいった。離脱する二人にさらに攻撃しようとした福音だが、

「お前の相手は私でしょうが！」

遅れて体勢を立て直した葵が一夏達に気を取られている福音の背後に現れ、福音は背中から最大稼働で刀身にエネルギーが込められた天叢雲剣の一撃を受け、爆音と衝撃と共に吹き飛んで行った。それを見届けた葵は、オープンチャネルで一夏と筈に向かって叫んだ。

「一夏、筈！残りシールドエネルギーは後どれほど残っている！」

葵の尋常で無い叫びを聞き、慌てて確認をする一夏と筈だがそこに出されている数値を見て絶句。筈は福音に対して行った攻撃と福音の強烈な蹴りのせいで、一夏は先程筈を助ける為に使った零落白夜と瞬時加速のせいでもう二人ともエネルギー切れ寸前とまでになっていた。二人の顔を見ただけで現状を把握した葵は、

「作戦は失敗！私が時間稼ぐから一夏と箒はすぐにでもこの場から離脱！」

二人に撤退命令を出した。

「で、でも葵！一人じゃ」

「頼むから行って！でないと」

渋る一夏に葵が何か叫ぼうとしたが、それよりも早く葵の一撃から復活した福音がこちらに向かって近づいて来た。

「ちっ！もう来た！」

葵は天叢雲剣を構え、福音に向かって行った。しかし葵の頭の中は焦燥で埋め尽くされていた。

（ヤバイヤバイヤバイ！これはヤバイマジで！さっきの二人の表情からもうエネルギーは無いのは明白。そしてこっちもさっきの箒の一撃。瞬時加速が終えた頃とはいえあの加速時に攻撃受けてしまったせいでアーマーブレイク寸前までいつてしまった。こっちもかなり残りエネルギーが少ない！）

もはや福音と戦闘できる状態では無くなってるが、それでも一夏と箒が逃げるまでは福音を引き留めようと葵は決意した。しかし福音はそんな彼女の決意をあざ笑うかのように、高速飛行のまま葵に近づいて来たのを急旋回し、一夏と箒に向かって飛んで行った。

「な！まさか先に二人を！」

葵の叫びを肯定するかのように、福音は高速移動しながら一夏達に光弾を浴びせていった。慌てて回避する二人だがかわし切れず互いに数発着弾する。その瞬間二人のエネルギーは空となった。

その二人を見据え福音は上空にて停止。そして翼を広げ、一夏達に照準を合わせた。葵を倒すよりも先に、この二機を撃墜させよう

と福音は判断したのだ。

一夏と箒も福音がこちらを狙っている事に気付いたが、エネルギーが残っていない白式と紅椿は動いてくれない。鈍重な動きしかなかった二機に対し、福音は翼を展開、一斉射撃を行った。

「くそー！ー！」

降り注ぐ光弾を目にしながら、一夏は死を覚悟した。しかしその目の前に、

「一夏！箒！」

瞬時加速を行って、寸での所で葵は福音の光弾と一夏達がいる間に到達した。そして光弾がこちらに来る前に葵は天叢雲剣の残りエネルギー全てを刀身に込めて福音に向かって投擲。その後は一夏達を守るように抱きしめた。その直後、福音の攻撃と葵が投擲した天叢雲剣は同時に互いに着弾。大爆発が起きた。

「~~~~~！」

もはやここに来るために全てのエネルギーを使ってしまったスサノオに、容赦なく光弾は振り注いでいった。シールドエネルギーで相殺できなくなった衝撃が、容赦なく葵に命中。装甲は砕け、髪は焼かれ皮膚も筋肉も炎に包まれ挟られても、葵は一夏と箒を放さず庇い続けた。

「「葵！葵！」」

一夏と箒が叫び続けるが、葵は激痛に苛まれながらも二人が無事なのを確認すると

「言ったでしょ。二人は守るって」

とにっと笑った。そして爆発と共に三機は海に墜落した。

葵が投げた天叢雲剣は正確に福音の顔に当たり、その後刀身に込められていたエネルギーがそのまま解放され爆発した。しかしそれだけでは福音に対してさしたるダメージにはならなかったが、光弾を止める事には成功していた。反撃を受け攻撃を止めた福音だが、目標が三機とも海に落ちた事を確認すると、展開した翼をたたんだ。

「敵機 A、B 及び C の撃墜を確認。警戒を解除」
そして福音は再びどこかへと飛んで行った。

一夏達が福音に撃墜されてすぐに、千冬は救助船を大至急向かわせた。しかしその前に

「わたくしが先にいきます！」
とセシリアが飛び立った。セシリアはあの後何かあった時はない、強襲用機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を千冬に黙ってインストール作業を行っていた。必要はないと思っていたが、万が一を思い整備に精通しているクラスメイトに頼んでやってもらったのだ。

（まさか本音さんが整備に詳しいとは予想外でしたが…、やってよかったですわ！一夏さん！葵さん！篤さん！今行きますわ！）

セシリアは最大加速で一夏達が墜落した場所に飛んでいき、そして海面に浮いている一夏達を発見。すぐさま急行し、近くに降り立った。そしてそこでセシリアが見たのは、

「葵！葵！頼むから目を開けてくれ！葵！」

と泣き叫ぶ一夏と篤だった。そして二人が抱えている葵を見て、セシリアは絶句した。

何故なら二人が抱えてる葵の周りの海面が血で真っ赤になっており、髪も半分以上焼けただれて真っ白になった表情は、どう見ても死んでいるようにしか見えなかったからだ。

錯乱状態の二人と葵を強引にセシリアは回収し、救助船まで大至急運び医師に葵を預けた。医師は葵の容体を見て顔を強張らせるが、急いで治療を開始した。このときまだ錯乱し取り乱していた一夏と篤を、別の医師達が薬を嗅がせ眠らせた。

「辛いでしょうが…今はもう眠っていて下さい」

こうして一夏、葵、篤の初めての实战は最悪な結果のまま終わった。

臨海学校（二日目 敗戦）（後書き）

なんか芸が無いですが、葵が二人を庇って重傷を負いました。
次で一夏達の福音退治が始まります。

…しかしあれですね。本当に葵はろくな目にあってないな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555v/>

IS～女の子になった幼馴染

2011年11月23日06時26分発行